

立命館京都学
優秀卒業論文集
2020

立命館大学 文学部 人文学科
地域研究学域 京都学専攻

「立命館京都学 優秀卒業論文集 2020」

【はしがき】

立命館大学文学部の京都学クロスメジャー（旧京都学専攻）は、日本文学や歴史学、地理学、考古学など、各学問分野における手法の融合や超域を通じて、独自の歴史的価値を有する「京都」を理解しようとするものとして設けられています。

本論文集は、2020年度に京都学専攻へ提出された卒業論文のなかで、特に優秀と認められた論文を収録したものです。今年度の優秀論文は、①青森県の伝統芸能「荒馬踊り」継承のために京都の大学生和太鼓サークルがどう関与したかを、詳細な聞き取り調査で解明した坂根論文、②新型コロナウイルス感染状況の拡大に直面して大きな打撃を受けている京都の観光の質について問い直す芦田論文、③京都の食文化を代表する京漬物の特徴とイメージ、今後の展望について製造者に聞き取りをした上野論文、④京都生まれの作家村上春樹の『ノルウェイの森』や『騎士団長殺し』を読み解き、主題となる「自我」について考察した泉論文の4本です。いずれも異なった学問手法を採りながら、丁寧に資料を集めて読み込み、京都という場のもつ力や意味を論じた力作が揃いました。

コロナ禍の第一波により、2020年度4月は休校となり、春学期は全面オンライン授業となりました。秋学期も対面・オンラインのハイブリッド授業が基本となり、学生諸君は未知数の学生生活を送られたことと思います。しかし先の見通しが立たない状況の中で、それぞれが工夫して必要なデータを収集し、努力して良い論文を書き上げたことに、4年間に培ってきた確かな底力があることを感じました。

2021年5月の時点で、新型コロナウイルス感染の第四波が世界各地に及び、未だ終熄の兆候は見えません。京都にかつてのような活気が戻るには、しばらく時間がかかるでしょう。この厳しい状況のなかで我々はいかに「京都に学び」、そこで得た知見を今後にかけていくか、改めて問われていると感じます。共に学び、先に進みましょう。立命館京都学のさらなる発展とともに、卒業してコロナ禍の社会で奮闘する皆さんのご健康とご活躍を願っています。

2021年5月吉日

立命館大学 文学部 地域研究学域 京都学専攻 教員一同



清心門の東角より北西方向を写す
(2021年5月撮影)



清心館4階南西角の窓より写す
(2021年5月撮影)

【目次】

伝統の担い手の現代的意義
—大川平荒馬踊りを例に—

坂根 亮太 pp.1～52

京都に求められる観光のかたち
—持続可能な観光都市を目指して—

芦田 奏穂 pp.53～78

京漬物に対する認識
—製造業者と消費者の目線から—

上野 まどか pp.79～119

村上春樹作品における「自我」と「共生」
—『ノルウェイの森』を中心に—

泉 綾乃 pp.143～121

伝統の担い手の現代的意義—大川平荒馬踊りを例に—

坂根亮太

はじめに

青森県は津軽半島の北部に大川平という地域がある【第1図、第2図、第3図】。そこに伝わっている「大川平荒馬」という芸能は、少子高齢化、過疎化といった現代日本の課題を抱えた、ある意味では「ありふれた」地域で行われている芸能である。人口減少に関する議論として、増田(2014)の地方消滅論¹が全国に広く衝撃を与えた。これは2010年から2040年にかけて、20～39歳の若年女性人口が5割以下に減少する市区町村を「消滅可能性都市」と呼び、全国の自治体のおよそ半数が消滅の危険があるという警鐘を鳴らしたものである。大川平がある今別町は若年女性の人口変化率が-88.2%と青森県内で一番であり、典型的な過疎地域である²。このような「ありふれた」芸能に注目したのはその存続のあり方が特異であるからだ。

この地域には、毎年夏の祭りの時期に合わせて様々な場所から、様々な立場の人々が集って、祭りに参加し地域を盛り上げており、中には20年という長い関わりを持つ団体もある。同地域の住民や学生を取り入れるというような事例は散見されるが、遠く離れた地域から継続的に関係を持つという例はなかなか見つからない。すなわちこれは「関係人口」³を取り入れた全国的に見ても先進的な事例であり、新たな伝統の継承のあり方であると考えている。筆者自身も2017年から大川平荒馬に参加している関係人口の一人であり、大川平荒馬の内側と外側の両方に属する立場から考察できると考えている。本研究ではこの事例から、地域と外部の関わりに意義を見出し、現在消えつつある日本各地の伝統、今回は特に無形民俗文化財(以下伝統芸能とする)に焦点を当てて、一つの提案ができるのではないかと考えている。

なお、今別町には「今別の荒馬」として県の無形民俗文化財に登録された荒馬が3種類ある⁴が本研究で「荒馬」と記す際には基本的に大川平荒馬の事を指す。

第1章 伝統の変容

第1節 伝統芸能の時代区分

現在、文化財保護法により、「演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの」と定められ、国により保護、保存される対象である伝統芸能だが、最初からそのような対応をされていたわけではない。1950年に公布された文化財保護法において無形文化財として加えられてから、何度もの改訂によって徐々にその立場を確立してきたのである。その扱いや呼称などの移り変わりについては、いくつかの区分により分けることができる。ここでは星野(2009)⁵に倣い「呼称」に注目して時代を分けていく。

そもそも、「各地の風土と生活の中で生まれ、地域の人々によって歴史的に育まれてきた」⁶伝統芸能が特別な意味を付与されて世間から注目され始めたのは、大正末期の1925年に日本青年館⁷の開館を記念した「郷土舞踊と民謡の会」が開催された頃に遡る。第1回に上演された芸能は8種類だが、全国の70を超える応募先から選ばれたものだった。その選出には、「成るべく由緒の古い、郷土色の濃厚なもので、豊かな芸術味があり」⁸という基準があったようである。この頃は伝統芸能という言葉はまだ無く「郷土芸能」と呼ばれていた。「郷土」には、近代都市化の影響で故郷を出て都市部に集中移住してきた人々の「郷愁の対象」という意味が感じられる。「全国郷土舞踊と民謡の会」は第1回から1936年まで、ほぼ年に1回実施されたが第二次世界大戦中には中断を余儀なくされている。この区分は第二次世界大戦頃まで続いていく。

次の区分は第二次世界大戦後から高度経済成長期で、「民俗芸能」とされる。戦後に再開した「全国郷土舞踊と民謡の会」の第1回目は「全国郷土芸能大会」と呼ばれていたが、後の第9回から「全国民俗芸能大会」と名前を変えている⁹。前述の通り1950年には文化財保護法が公布され、このとき今日で言う民俗文化財は「民俗資料」として有形文化財の一つに加えられた¹⁰。同法において「民俗芸能」という文言が追加されるのは次の改定時の1975年となるが、「郷土」から「民俗」へと大会の名称が変化したのは法律の制定によるものであろう。この区分では特に歴史的な連続性や、見せ物としての芸術性などといった学術的価値が重視されているように見受けられる。

加えて注目しておきたいのは日本共産党の文化工作隊¹¹であった民族歌舞団と呼ばれる団体の活動、そしてそれに伴う「民舞教育」の流れである。その中でも特に東北に拠点を置くわらび座に注目する。わらび座は文化工作隊「海つばめ」を前身とする団体で、本研究で言うところの「外部の担い手」にあたる。民族歌舞団わらび座の目的は、「民俗芸能」から個別の地域を排除し、国民文化として抽象化した「民族舞踊」を創り出すことであった¹²。

創立者である原太郎は「元来、民俗芸能は民衆の社会生活のなかに、一つの生きものとして絶えず変貌し発展して行っているところに価値があり意味があり、だからこそ国民の芸術が形成されるための生命の源になる」¹³という考えのもと芸能収集を行い日本の民族歌舞の再創造を目指していた。そして「わらび座」の役割を「若い人たちが郷土の歌、踊りの美を見直し喜びを新たにすることを与えること」¹⁴と述べている。

「民舞教育」の先駆けとなったのは1966年の「第一回民族舞踊を学ぶ会」である。明治以降の近代化政策に含まれる学校教育において郷土の舞踊が蔑ろにされてきたことへの反省がこの会のきっかけにあったようである。「民俗」ではなく「民族」の語を用いたのは、優れた郷土舞踊をその地域のものだけでなく広く全国に伝えていきたいという意気込みが込められている¹⁵。

これらの動きから「郷土芸能」として各地域に伝わってきたものは学術的価値を加えられて、「民俗芸能」となり、地域を排した「民族芸能」と名を変え、全国に広まることになるのである。しかし広まるのは民舞教育の教材として、もしくは舞台用に脚色を加えられていたもので既にもととの「郷土芸能」とは異なる場合が多かったようだ。つまり、郷土芸能は知名度と引き換えに変化してしまったということである。

そして、現在浸透している「伝統芸能」もしくは「地域伝統芸能」と認識されるようになるのは、高度経済成長期以降の話となる。1992年の「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律(通称「お祭り法」)」にて「地域伝統芸能」と記載されている。この法律は市町村による「伝統芸能」を中心としたイベントの企画、実施を国がバックアップするというもので、伝統芸能を地域おこしのための資源として活用しようという方針を示している。制定の背景としては1990年のバブル崩壊に伴う、日本経済の疲弊から地方に対する期待が大きくなったこと、つまり地域社会の経済的振興を視野に入れなければいけなくなったということが挙げられる。これ以降、伝統芸能は観光との結びつきによってイベント的側面がより一層強くなっている。

本稿では、それぞれの語句の明確な分類を目的としているわけではないので、はっきりとした定義を避けるが、この歴史から明らかにしたかったのは「伝統芸能」が時代を経るごとに様々な価値観を持ったまなざしにさらされ、重視される要素が変化しているということである。

第2節 伝統の現状・課題

前節で伝統芸能を取り巻く環境、その歴史について述べたが、これを受けて本節では現在、

伝統芸能が直面している課題についていくつかの先行研究を参照しながら言及していきたい。人口減少が進む中で検討しなければならないのは後継者、担い手問題である。もちろん地域の環境や、芸能の種類など様々な要因があり一般化するのは容易ではないが、おそらくこの「人手不足」という問題を避けては通れないと考える。

星野(2009)¹⁶は「民俗芸能伝承危機緊急実態調査」を中部地方の計 88 民俗芸能保護団体に行っている。これは地域の伝統芸能の実態を示す上で多くの団体にアンケート調査を実施したという点でかなり重要なデータである。伝承度合いの調査において全体の 65.91%が先輩世代のものと比べて悪化していると解答していることに事態の深刻さが表れている。ここで大多数を占める理由が過疎化、少子化、高齢化からくる後継者不足である。後継者を地域外の人に頼らざるを得ない団体は地域の規模が小さくなるほど多くなっているという点にも注目しておくべきだろう。つまり、地域内で後継者をまかないきれなくなっているのがある。

一方で、地域外の担い手を加えることで問題が発生しているという意見もある。それは「芸能が変わってしまう」というものである。西郷(2006)¹⁷が岩手県に伝わる「黒川さんさ踊り」¹⁸を例にこの問題を指摘している。この事例では、民舞教育の教材として「黒川さんさ踊り」を学びたいというものが、外部との接触のきっかけにあたる。しかし、外部からの訪問者が相次ぐようになり、宿泊の受け入れ先であった保存会員の家庭が多忙になってきたことなども加味して、東京での講習会が企画されている。講習会を 10 回経た時点での受講者数は 600 人を超えたが、その中には数回通っただけで連絡が途絶えてしまった者もいた。そしてこれらの参加者が伝播の仲介役となり、時には保存会にとって不本意な形¹⁹で「黒川さんさ踊り」が全国に広まる要因となってしまった。加えて西郷は「文化の著作権」という言葉を用いてこの問題を説明している。これは「フォークロリズム」や偽物のフォークロアを意味する「フェイクロア」²⁰といった考え方によるもので、近年民俗学研究において注目されている概念である。「フォークロリズム」とは主に「セカンドハンドによる民俗文化の継受と演出」、あるいは「なんらかの民俗的な文化事業が本来それが定着していた場所の外で、新しい機能を持ち、また新しい目的のために行われること」と説明されている²¹。

また、田邊(2014)²²は富山県八尾町の年中行事、「おわら風の盆」²³のあり方をめぐるとの団体を調査し、その真正性や伝承方法に関する考察を行っている。ここでは、観光資源としても「おわら風の盆」を伝承している「富山県民謡越中八尾おわら保存会」と、保存会の踊りは「品」がないとし、「本来の型」の伝承を目指す「おわら道場」²⁴の双方の視点から調査されているが、興味深い点は各団体の構成員である。保存会は八尾町出身でなければ加入

することはできないが、道場では出身は関係なく、調査が行われた段階では全会員が八尾町出身ではないという²⁵。西郷の述べる通り、本論文でもどちらに伝承の正統性があるかというところについて議論を行うつもりはない。あくまでも外部の人間が地縁血縁のない芸能を伝承しているという事例として紹介した。

「黒川さんさ踊り」では地域外に芸能を教えた結果、保存会と受講者との間で芸能に対する意識の相違が生じてしまったが、「おわら風の盆」の事例では、その地域出身ではないにも関わらず、技術の洗練を通して芸能の真正性を主張している団体がある。そこにあるのは地域外の担い手の意識の差であり、「外部」の存在が関わったからといって芸能が変化して伝承、継承の妨げになる事にはならないのではないだろうか。

小活

第1節では「伝統芸能」がどのようなまなざしを受けて現代まで続いてきたのか、その歴史を辿ってきた。ある地域で伝わっていた「郷土芸能」、外部の衆目の集まる場所となった「民俗芸能」、地域を出て国民文化として一般化された「民族芸能」、そして観光や地域振興などと結びついた「地域伝統芸能」。注意しておきたいのは、伝統芸能が本来持っていた意味は消失しないという点である。例えば、「民族芸能」になったからといって「民俗芸能」の際に注目されていた学術的価値が損なわれることはないという事である。第2節では「伝統芸能」が持つ「変化する」という特性が明らかになった。ここには時代のニーズに合わせてその構成員や運営方法などを変化できるという柔軟性があるが、本来の「伝統芸能」自体の動きや形も変えてしまうという危険性をはらんでいる。

第1章では、「伝統芸能」全体に関する論点と課題を明らかにした。続く第2章では、本研究の事例である「大川平荒馬」について、この章と同様の事が言えるかどうかを検討していく。

第2章 伝統芸能と外部の担い手

第1節 大川平荒馬の概要

本節では、本研究で事例として扱う大川平荒馬について述べていく。大川平荒馬踊りは、昔のサナブリの行事(田植え)が終り、田の神が天に昇るとき、農民が神に加護と感謝のために催される神送りの行事として伝わってきたものであり、「今別の荒馬」として1980年に

町指定の無形民俗文化財に、2003年には県指定の無形民俗文化財に登録された。その由来は古く、1585年頃大浦為信が津軽を統一して藩の経済を保つため、馬と農耕と結びつけ農作物の増収を図ったことが起因であろうとされている²⁶。

芸能としては、馬に扮した²⁷男性と手綱取りの女性がペアになって跳ねる踊り【第4図、第5図、第6図】で、2ペア4人ずつの組で踊るのが基本形である。お囃子には太鼓、笛、手平鉦の3種類がある。太鼓は大きな桶太鼓を使用し、葦でできた長いバチで叩く【第7図】。祭りは毎年8月3日から7日にかけて行われ、合同運行と呼ばれる日には今別、大川平、二股の荒馬が一斉に披露される。

あくまでも地域内で行われる祭りに過ぎなかった大川平荒馬が「外部」と接触することとなるのは、前章で触れたわらび座により世間に発見された1962年である。この頃のわらび座は拠点を秋田に移し、東北の芸能を収集し始めていた頃であるので、今別町の荒馬もその集められた芸能の一つであったと推測できる²⁸。「郷土芸能」から「民族芸能」への変化は大川平荒馬にも等しく訪れているということである。

また、1990年代には既に外部の参加者がおり、大川平の人々はこれを受け入れて祭りに参加させている。「とにかく参加させて楽しませる」²⁹という考え方からも分かるように、大川平の人々は遠くからやってきた旅行者を歓迎するという包容力を持っているようだ。2000年に大川平と関係を持つようになった立命館大学のサークルである「和太鼓ドン」も大川平の人々に歓迎された団体の一つである。

和太鼓ドンは京都を中心に活動している学生団体で、地域の祭りやイベントなどで伝統芸能の演奏披露を行う団体である。当時の和太鼓ドンは自分たちの披露する伝統芸能のルーツを求めて各地に赴いていた³⁰。同じ学生団体として2004年に立命館アジア太平洋大学の「荒馬緒」が、2006年には名古屋大学の「音舞」も参加するようになり、三団体で協力して大川平での生活を支え合うようになっている。ただ、これらの団体が他の訪問者と異なっていたのは初めて訪れた年から継続して、年々人数を増やしながらか大川平を訪ねるようになったという点である【第8図】。大勢で大川平を訪れ祭りに参加するようになって、外部の訪問者の相手をしてきた保存会も地域住人に説明をし、彼らに宿泊場所を用意するなどの対応を改める必要に駆られた。最初は運行について回るだけだった「和太鼓ドン」も継続的に訪れることによりその熱意を認められ、祭りへの参加を促されている。もちろん外部の参加者を祭りに参加させることに批判や抵抗がなかったわけではない。現在は地域全体に熱意が伝わっているが、未来に祭りを残そうとする保存会と昔のままで残したいという地域住民との意見の相違が見受けられる。

「地域伝統芸能」へと変化したのはやはり観光との結びつきによるものである。前述した今別町の荒馬三種類が一斉に運行を行う「荒馬まつり」が観光協会の企画のもとで始まることになった。本来は各地域で行われていた運行を同じ場所で行うという事でその変化は顕著であるだろう。また 2017 年からは「世界荒馬選手権大会」という企画が催されている。「今別町の伝統芸能である『荒馬』の腕を競技形式で競い合い『荒馬』の技術のさらなる向上と継承」³¹を目的としており、祭りの盛り上がりの一役を担っている。

大川平荒馬においても、他の「伝統芸能」と同様の歴史を歩んでいることが分かるだろう。特筆すべき点はやはり関係人口とのつきあい方である。この点について、次節で関係人口への聞き取り調査を参照しながら言及していく。

第2節 大川平における外部の担い手

第1章第2節で明らかにしたように、地域外の人物だからといって継承の妨げになるわけではない。本節では外部の担い手にあたる和太鼓ドンの学生、卒業生に聞き取り調査を行った結果を記し、大川平荒馬に対する意識や考え方について分析をしていきたい。本調査では特に近年の大川平の伝統の変化に注目するべく、在学中もしくは卒業してから年数の浅いメンバーを中心にインタビューしている。また、本調査は10月から11月までの約1ヶ月間で現役生7名【資料1～資料7】、卒業生5名【資料8～資料12】の計12名に筆者が聞き取り、もしくはアンケート調査を行ったものである【第1表】。質問項目は「大川平荒馬に関わるきっかけについて」「関わりを続けている理由」「大川平荒馬に取り組む上で大切にしていること」「伝統芸能が変化していくことについて」「大川平荒馬に対して何か問題意識はあるか」「和太鼓ドンが大川平に対して果たす役割について、また後継者ということについて」である。

また、本研究における「担い手」の定義は「実際に芸能に触れ、地元を訪れて、継続して関わっている人」とする。

まず関わるきっかけだが、和太鼓ドンに所属する際にサークルの魅力の一つとして紹介されることもあり、所属当初から大川平ツアーに参加することを決めている割合が高い。他にも「先輩に誘われて」「ツアーに行った人の話を聞いて」という割合が高いことから和太鼓ドンが大川平に行くことに熱を入れていることが分かるだろう【第9図】。参加が容易で、受け入れの間口が広いということも大川平の特異な点の一つである。その中で、参加したメンバーが継続的に関わりたいと思うようになったきっかけだが、「地元の人に触れて」という主旨の回答が一番多い。地元の人々と交流を深めることで荒馬にかける思いや人と

なりを知り、滞在中に人間関係を構築したメンバーはまた来年も会いに行きたいと思うようになるようだ。筆者自身は初参加であまり話せなかったため来年はもっと話したいと思うようになり、次年度も参加するようになった。京都と青森という地理的な距離を超えて、毎年大川平という地域に惹かれている理由の一つに人柄的な魅力があることは間違いない【第10図】。

続いて「大川平荒馬に取り組む上で大切にしていること」という問いについてだが、「大川平らしさ」という回答が大部分を占めている。この「らしさ」の部分に各人が感じた大川平の魅力が表れている。一部見てみると、「見た目はクールだが、内側には情熱を持っているイメージ。渋く熱くという感じ」³²、「元が田植えの時の踊りだということを意識しているので、地元で踊るときはちょっとした泥臭さをイメージしている」³³というような意見や、「文化と社会と伝統芸能の結びつきに本質がある」という考えから実際に訪れることで「芸能に流れているテンポ感がその土地の時間の流れと結びついていると感じた」³⁴メンバーもいる。また、舞台用と地元で踊るものを線引きするという意見も見られた【第11図】。ここでの舞台用とは「人に見せる」という要素が重要視されていることから第1章での「地域伝統芸能」にあたり、他方、地元で踊るものとは大川平という地域に長く伝わってきた「郷土芸能」であると言えるだろう。どの要素を重視するかによって表現方法が異なるということであり、「伝統芸能」に含まれる価値が消えず付加され続けているということが分かる。ここで双方の考え方について善悪の判断を持ち出すことは誤りである。それぞれが団体内で検討された結果であり、大川平荒馬に対する礼儀や敬意が前提としてあるためである。このような意識については次の「外部の存在が芸能を変えてしまうことについて」の回答で見られた。変化することは避けられないとしつつも「演者が地元を知っていれば良い」という意見が多く、変化についても「意図的に変える」³⁵のではなく、時間の経過による緩やかな変化ならば受け入れられる³⁶という考え方もあった【第12図】。

「大川平荒馬に対して何か問題意識はあるか」という質問に対しては「高齢化による存続」を懸念する回答が多い。数字の高齢化率だけでなく、実際に現地へと赴き、大川平の人口構成を目の当たりにしたからこそ生まれる感覚であろう。一方で「関わり方」、「温度差」という回答も少なくなかった【第13図】。この問題意識は学生と卒業生、学生と地元という間で発生しているようである。まず前者は継続年数によるものである。関わっている年数が多いほど地元とは親しくなり、弾む話も多いのは自然なことだろう。そういった状況の中で、初めて訪れた現役生が話に入りやすく関係を構築しづらいということに課題を感じたようだ。後者は特に「外部の担い手」の意識の差という問題である。あるメンバーが「一言で表すな

ら熱量差。団体ごとに大川平へと行く意味合いが違うと思うが、受け継ぐ団体によって、(同じものを習っているのに)やっていることが違う。団体ごとの温度差というのが、今後人が増えていく上で問題になると感じる。お囃子は運行全体に関わるから厳しく教わると思うが、踊りは地元の方の優しさゆえか少し甘く評価されていると感じる」³⁷と言うように前節で述べた大川平を訪れる3団体の間で踊り方に差ができていくという問題を指摘している。本研究では他の2団体には調査を行っていないのでそれぞれの考え方については検討できないが、祭りの大部分を学生が占める状況で、学生間の踊りが異なると祭りを乱してしまう恐れがあるという懸念である。筆者自身はお囃子で太鼓を習っており、確かに打ち方や強弱、テンポ感に至るまでかなり詳細に教わった。もちろん「優しさ」というのも一つの要因として挙げられるが、踊りとお囃子の人数比もこの問題に関わっている。2019年を例に見てみるとお囃子を学ぶ学生が27人に対して踊りは48人の学生が学ぼうとしている³⁸。お囃子はその中でも太鼓、笛、手平鉦と3パートに分かれ、それぞれ個別に指導出来るが、踊り手に対して限られた時間の中で全員の動きを見て指摘するのは至難の業である。学生の増加が相対的に教える人手の不足を引き起こしているということである。

そして最後に、「和太鼓ドンが大川平に対して果たす役割について、また後継者ということについて」という本研究の核とも呼べる質問についての回答結果だが、結論から記すと聞き取りをした中で自身を大川平荒馬の「後継者」と捉えている割合はかなり低かった。しかし、この結果について芸能に関わる意識が低かったなどのような消極的な見方をすることは無い。筆者が質問で用いた「後継者」という言葉について、後継者は「地元に住んで」、「弟子入りをして」荒馬に取り組む者というようなイメージが強くあるようである。つまり「後継者」という言葉に含まれる責任の重さ故に、夏の祭りの期間だけ大川平を訪れる自身の立場を後継者と捉えることに懐疑的だったと推測できる。それでは大川平荒馬にとって、関係人口はどのような立場であると言えるのだろうか。回答の大多数に共通していたのは「発信者、きっかけづくり」という点である。京都などで公演を行い、人目につきやすい活動をしている自分たちは、あくまで荒馬に対する興味の入り口を示しているだけという考えである。この点は関係人口として様々な地域から関わることの出来る強みであることは間違いない。しかし、広まる芸能は保存会の大川平荒馬ではなく「和太鼓ドンの大川平荒馬」であり、中には自分たちの荒馬が広まることで「純粹な大川平が薄まる」³⁹ことを懸念したメンバーもいる【第14図】。

この問題をさらに考えるため、改めてメンバーの大川平荒馬に対する意識を検討したい。前述の通り、団体内には大川平荒馬を「礼儀」や「敬意」をもって披露するという意識があ

り、「京都で披露している自分たちは人の目につきやすく、初めて見た人にとってはそれが大川平荒馬となる。そのため地元と自分たちの間に差があれば間違った大川平が広まってしまうことになる。それを防ぐためには時間をかけて荒馬を学ぶ必要がある」⁴⁰というような考えを持ち、練習に取り組んでいる。和太鼓ドンのメンバー全員に聞き取りを行ったわけではないので、全員に共通しているとまで言うことは出来ないが、少なくとも今回聞き取りを行ったメンバーの間では表現の仕方は違えども似通った認識を持っているようだ。

本節で明らかになった「外部の担い手」の意識が地元の保存会の考え方と一致するものがあるかどうか、次章で保存会の聞き取りと照らし合わせることで明らかにしていきたい。

第3章 荒馬を支える人々

第1節 大川平荒馬保存会への聞き取り

大川平荒馬保存会の2名を対象に電話による聞き取り調査を行った。質問項目は、「祭りを行う意義について」「外部が入ってきた事による変化、そのことに対する抵抗感」「保存会以外の団体が大川平荒馬を披露、指導することについて」「伝承に危機感を覚えているか」「後継者は誰を対象にしているか」「これからの継承のために必要なこと(コロナ禍も踏まえた今後のあり方)」である。

嶋中卓爾氏は大川平荒馬保存会の前会長で、現在は保存会顧問、そして荒馬の里資料館⁴¹の館長として大川平荒馬を支える存在である。嶋中氏は地域外の人が祭りに参加することをチャンスだと捉えており、抵抗感は一切無かったと述べている。高齢化が進み、地元で荒馬が跳ねられなくなる人数が減っていく中で外部の担い手の参加は転機となったのだ。そのことによる芸能自体の変化については「特徴」であると語っていた。今別町に興味を持つきっかけが生まれ地域が盛り上がるならば、多少脚色が加わってしまっても構わないと「大川平荒馬」を地域振興の起点の一つとして考えていることが窺える。ただ、決して芸能の変化に積極的であるということではない。「地元の荒馬」を知った人たちが荒馬を広めていって、その際に形が変わってしまうのは仕方ないということである。そして伝承についても学生やOBたちが頑張ってくれている今の状況に不安はないが、地元の保存会がいなくなった後の事を懸念していた。祭りを続ける意義については先祖から続く伝統を絶やしたくないということで「民俗芸能」として重視されてきた「歴史的連続性」を特に重んじている【資料13】。

他方、田中健介氏は大川平荒馬保存会の現会長である。嶋中氏と同様に外部の団体を受け入れることに抵抗感はなく、20年前に和太鼓ドンのメンバーらが来ていなかったら荒馬をここまで残すことが出来なかったと述べている。芸能の存続についても「危機感だらけ」で、関係人口が祭りの期間中に参加する事で助けられてはいるが、地元で荒馬を出来る人が増えない限り不安が消えることはないと考えている。そのために荒馬を「全国に広めてほしい」として、時代の変化に順応して大川平荒馬が出来る人口を増やしていきたいと語っていた。ただ、誰でも広めてほしいというわけではなく、「実際に現在行われている荒馬」を見て知った上で広めてほしいという事であった。意義については、地域のために、未来へと荒馬を残すために祭りを行っているということであった【資料14】。

外部の受け入れに抵抗はなく、芸能の存続に対する危機感という点に関してはほとんど同様の考え方をもち、外部の団体に感謝しつつも将来に対しての不安を拭えないようである。祭りの意義についても表現の仕方は違えども、「地域に根付いた芸能」としての側面を非常に大切にしていることが分かった。伝統芸能が「各地の風土と生活の中で生まれ、地域の人々によって歴史的に育まれてきた」ものであるということもはっきりしただろう。本節で明らかになった地域側の思いを踏まえ、次節では「伝統の担い手」という事について分析していきたい。

第2節 伝統芸能の継承のために

ここまで関係人口側の意識と地域側の思いについてそれぞれ聞き取り調査を元に整理してきた。結論から述べると関係人口としての和太鼓ドンは「後継者」にはなり得ないようである。しかし、大川平荒馬と民族舞踊について研究した西嶋一泰氏が「継続的に関わっていくうちに祭りに対する責任感や意識などが芽生えてくる」⁴²と語るように、長く深く関わりを持つことが後継者の要因として重要になってくるのが分かる。大川平荒馬に取り組む姿勢は人それぞれであり、卒業後も関わり続けたいという魅力を個々人の中で見出せるかどうかで差が生じるのだ。大川平はその間口の広さ、寛容さ故に関わりは容易で、毎年通わなければならないというような責任や義務に縛られず、良い意味で気楽に関わりを持つことができる。そして関わる中で魅力を感じ取ったメンバーは後継者としての階段を一段登っていく。つまり「和太鼓ドン」として、関係人口としての関わりは「後継者への準備期間」と称することが出来る。

何をもって「後継者」を定義するのは伝統芸能毎に異なる。「技術の巧拙」や「関わる年数」など様々な要素が考えられるが、田中氏が「地元にいるからこそ地元のことがわかる。

荒馬を練習するのはどこでやってもどこにしよう関係ないだろうけど、やっぱり、地元で、ここ(大川平)でやるのが大川平荒馬だから地元が条件になる」⁴³と語るように、大川平荒馬にとっての条件は「大川平に住んでいること」なのである。もちろん地元の高齢化、人口減少などもこの理由に数えられるだろうが、地域があってこそその伝統芸能であるということだろう。

「地元の荒馬」を大切にし、継承していきたいという点において関係人口側と保存会側で意識は一致している。そして、大川平荒馬を地域外に広めることで、今別町を盛り上げたいという保存会の願いに対して関係人口側は応えられる立場にある。和太鼓ドンのメンバーが自分たちの役割として意識していた「発信者、きっかけづくり」という考えも地元の意思に沿うものであることが明らかになった。「黒川さんさ」の事例のようにならなかったのは、この意識が共有されていたからであろう。これは地元と密接かつ継続的に繋がっているからこそ生まれる意識である。

学生団体としては本研究で定義した「担い手」と称するのが適切なのだろう。祭りの期間中だけとはいえ、継続的に関わり地域に貢献している。「後継者」でないからといって決して役不足という事はないが、現状のままだと大川平荒馬の「後継者」はいなくなってしまう。各地に広まった大川平荒馬は技術としても記録としても残るかもしれないが、「地元」自体が無くなってしまえば「郷土芸能」としての大川平荒馬は完全に消滅してしまい、地域性を失った「民族芸能」となる。このフォークロリズム的状态を「存続している」と捉えるかどうかだが、伝統芸能の「地域と地域の人と共にある」という側面と聞き取りにより明らかとなった保存会側の思いを踏まえるとこれは消滅と呼べるだろう。

この未来を避けるためにも「後継者」の確保が必要である。和太鼓ドンの面々が大川平のことを「ふるさと」⁴⁴と呼ぶような密接で顔の見える関係性を長く維持することが「後継者」育成のための解決策となるだろう。

第4章 伝統芸能を取り巻く新たな動き

第1節 コロナウイルスの影響

2020年、甚大な影響をもたらしているコロナウイルスだが、その例に漏れず各地の伝統芸能にも大きな被害をもたらしている。連続性を保ってきた伝統芸能において一度の中断が後に響いてくることは想像に難くない。しかしその一方で、規模を縮小してでも開催した

ものや、コロナウイルスの影響で再開した伝統芸能もまた存在している。

京都の夏の風物詩である五山の送り火は点火箇所が大幅に減らされ⁴⁵、祇園祭では山鉾巡行や宵山が中止となり一部神事のみ行われる⁴⁶など 2020 年度は規模を縮小して行われた。この動向から、人の思いやウイルスの影響など様々な要素を踏まえず極端な仮説を立てると「縮小して行うならば来年以降もその規模で良いのではないだろうか。様々な検討をし、残った行事がそれだけならばその祭りの本質はそこに集約されないだろうか」という考え方もできる。

京都市の門川大作市長は五山の送り火の規模縮小に対して「京都市民にとって身近で大切な伝統行事。今年は例年どおりとは違う形になりますが、本来の意義を考える機会とし、コロナ禍で亡くなられた方の鎮魂、闘病されている方のご回復を祈り、よりよい社会をつかっていく決意の機会としたい」⁴⁷と述べている。五山の送り火に関しては観光的側面を排した「お盆の精霊を送る」という「本来の意義」が重視されているようである。

一方で、祇園祭の目的、つまりその起源は「疫病を流行させ、災害を起こす怨霊を鎮める」というものである。奈良時代以降の御霊信仰⁴⁸の隆盛に伴い行われてきた祇園祭であるが、その長い歴史の中で祭が延期、中止になったことは、実は 2020 年度が初めてのことはない⁴⁹。祇園祭の担い手たちは時代に応じて柔軟に祭のあり方を変え、現在まで継承してきたのである。

今年度は神輿の渡御と山鉾巡行が見送られたが、完全に中止されたわけではない。神輿の代わりとして櫛を白馬の背に立てた行列が街を練り歩く「御神霊渡御祭」が行われた。この神事自体は祇園祭の歴史の中でも初の試みで、山鉾連合会の木村幾次郎理事長は「コロナ禍で我々として何ができるか、一つの形を示すことができた」⁵⁰と述べている。

再開した事例としては祇園祭と同じ御霊会である、北野御霊会を取り上げたい。北野御霊会は北野天満宮と天台宗の総本山である延暦寺が合同で営む神仏習合の行事で再開されるのは応仁の乱以降、約 550 年ぶりの事になるそうだ。歴史的な節目⁵¹も関係しているようだが契機となったのはやはりコロナウイルスの影響である。ここで事例として取り上げるのは、この再開の理由が本節の「本来の意義」を考えるというテーマに即しているためである。

同宮で毎年 8 月に行われていた北野祭は、御霊会といった仏事に加え、神輿の渡御や走り馬、舞楽の奉納なども行われていたが、15 世紀半ばに、世情の混乱を受け一旦途絶する。江戸末期にその復興が試みられたが、程なく神仏分離が起こったことで神事のみで斎行されてきた。そして 2020 年、再び御霊会の内容を盛り込んだ北野祭の復興が図られ、ついに

実現するに至った⁵²。「歴史的に貴重だから」という理由だけではなく「疫病の収束を願う」という御霊会の本質を重視する関係者の思いがこの再開をもたらしたと言える。

本節冒頭で仮説の前提とした、「続いてきた伝統を未来に残したい」というような「人の思い」を無視するということがいかに愚かなことであったかこのような事例から見えてきた。規模を縮小したのは「必要ない」からではなく、感染者を出さないための「苦渋の決断」なのであり、厳しい制限の中でも祭を次世代へ繋ごうとした人々の思いの表れである。伝統は歴史の中で「人」から「人」へと受け継がれてきたものであるため、伝承の議論においてその要素を切り捨てることはできない。「全部やめるのは簡単。だが祭りは来年も続く。どのような形でつなぐかが大切だ」⁵³という木村理事長の言葉がそのまま本節の回答へとなる。伝統芸能の本質とは、変化する中でも変わらず受け継がれる「人の思い」であると言えるだろう。それが五山の送り火においては「先祖の鎮魂」、祇園と北野の御霊会では「疫病の不安から人々を守りたい」という思いである。

現代において、「お祭り法」などにより数々の行事が観光と結びつき「郷土芸能」としての側面が薄れてきたことは第1章で確認した通りである。そのような時代の中で「本来の意義を考える」という伝統のあり方に関する議論としてコロナウイルスの影響は良い機会であったのかもしれない。伝統の継承を考える上で、地域の人々が本来の意義を認識する事は地域に根ざす伝統芸能にとって、大きな意味を持つことになる。

第2節 コロナ禍の下での荒馬

前節では知名度も高く、規模も大きい京都の伝統行事を例に挙げたが、本研究のテーマとしている大川平荒馬もコロナウイルスに立ち向かい、将来につなげるべく様々な対策を講じている。

2020年4月に今別町会議にて2020年度荒馬大会の中止が決定され、大川平地区町会、荒馬保存会としても運行の中止を決断し行政からの自粛要請も受けて大人数の外部者の受け入れ見合わせも決定した。この通達を受けた和太鼓ドンの卒業生たちは自宅での自主練習動画をつなぎ合わせる企画を始め、大川平自体には行けなくとも大川平に対する強い「思い」を表現した。その状況下で、保存会より「NHKの番組⁵⁴で大川平を取り上げたい」との連絡があった。地元の音源を用いて各自踊りの動画を撮影し、一本の動画を作ろうという企画である。ビデオ会議アプリを用いて学生、卒業生、保存会の面々がオンライン上で集まり、「リモート荒馬祭り」と称して完成映像のお披露目会が行われた。そして本来祭りが行われるはずだった8月8日には、今度は卒業生の企画で「大川平荒馬大宴会 in オンライン

2020」が開催され、慣れない環境ながらも久しぶりの再会を喜んでいた⁵⁵。卒業生の中には仕事の都合などで暫く祭りに参加することができていない人々もおり、久しぶりに顔を見せ、近況などを話し合うことのできる良い機会になったようだ。地元と関係人口との間にある強い繋がりが確認できるだろう。

8月13日には大川平保存会が「盆荒馬」を急遽ゲリラ的に決行した⁵⁶。祭りの日程とは関係ない事である。この開催理由に関して嶋中氏は「祭りを絶やさないため」、田中氏は「地域の住民のため」と述べている。一見本来の意義、歴史的背景とは無関係のように思われるが、ここには「地域の風土の中で生まれ」、「社会生活の中」にあるという伝統芸能の側面が強く表れていると言える。ここからも大川平荒馬にとって「地元」という要素が一番大切にされ、切り離すことの出来ない関係にあることが推察できる。

おわりに

大川平荒馬を事例に伝統を継承することについて検討してきた。本稿で見てきたように伝統芸能は人から人へと伝えられるため、「変化し続ける」という特性がある。しかし、変わり続ける中でも変わらず受け継がれる「人の思い」が存在している。そしてそれを次世代へと繋いでいくことこそが、伝統を継承するという事なのであろう。今回事例として取り上げた大川平荒馬にとっての受け継がれるべき「人の思い」は、大川平荒馬が地域内のみで完結せず外部に広まっている芸能であるという前提を元にすれば、「地元で行われる荒馬を知っている事」である。例え、観光と結びつき人目を引くような派手さを得ても、コロナウィルスの影響で規模が縮小し、その表現方法が変わったとしても、「郷土芸能」としての「地元」と「演者の思い」という要素がある限り大川平荒馬は継承されていくのだ。

伝承の核となるこの要素は保存会と関係人口の間で共通の認識として存在している。その価値観を共有し続けることが出来れば「外部」の存在であろうと伝統芸能を担っていくことは可能である。そしてその「担い手」の中から継承者になり得る人物が表れるのだ。もちろん関係人口側に「地元に対する敬意・礼儀」が必要なことは忘れてはならない。

「伝統芸能」だけが外部と地元との接点になるのではなく、関わりを続ける中で多面的にすることができれば「継承者候補」を育成することができる。外部の存在を取り入れることは継承問題の解決策として即効性はない。しかし「交流人口」としてではなく、「関係人口」として継続的に関わるのがいずれはその地域を、伝統芸能を救う可能性を持つことは本

研究で見てきた通りである。人口減少が進む現代では、芸能の演者、担い手についての考え方も検討し、地域の枠を超えて、必要に応じて変えていく時が来ているのかもしれない。

謝辞

本研究において、多くの方々にご協力頂きました。

聞き取り調査にご協力頂きました、大川平荒馬保存会の嶋中様、田中様、和太鼓ドンの皆様、卒業生の皆様、貴重なお時間を頂き、快く引き受けてくださったことに感謝申し上げます。至らない部分もありご迷惑をおかけしたと思いますが、ご多忙の中でも真摯に向き合ってください、大変嬉しく思いました。誠にありがとうございました。

注

- 1 増田寛也『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』、中央公論新社、2014年。
- 2 前掲注1。「全国市町村別の将来推計人口」。208-243頁。
- 3 「移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々のこと」 総務省 HP <https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/>(2020年10月9日最終閲覧)
- 4 今別町 HP <https://www.town.imabetsu.lg.jp/education/bunka/arauma.html> (2020年11月17日最終閲覧)
- 5 星野紘『村の伝統芸能が危ない』、岩田書院、2009年、97-104頁。
- 6 日本青年館 <https://nippon-seinenkan.or.jp/seinenkan/minzoku-3/>(2020年10月4日最終閲覧)
- 7 日本青年館は1921年の財団設立以来、施設の管理運営と共に青年団をはじめとする青少年団体に対する支援や、文化・スポーツの発展、国際交流事業等を展開する一般財団法人。日本青年館ホテル <https://nippon-seinenkan.or.jp/history.php> (2020年10月4日最終閲覧)
- 8 館史編纂委員会・編纂作業部会編『財団法人 日本青年館七十年史』、財団法人日本青年館、1991年、86頁。
- 9 本田安治「民俗芸能の公開と保存」、『芸能祭三十年史 本文編』、1976年、206頁。
- 10 「民俗資料」は1954年の一部改定において有形文化財からは切り離され、独自の保護方法が追加されている。
- 11 人びとの中にくすぶっている文化への渴望を刺激し、サークルという集団の場に結びつ

けて個人ではできない表現活動、また活動を通じた意識の変革を仕掛けていく仕掛け人たちをこのように呼んだ。道場親信『下丸子文化集団とその時代——一九五〇年代サークル文化運動の光芒』、みすず書房、2016年、2頁。

¹² 西嶋一泰『『民族舞踊／民俗芸能』の現代史——大川平荒馬踊りを事例に』、立命館大学文学部2008年度卒業論文、7頁。

¹³ 原太郎「日本の民謡の旋律をもとめて」、『日本の歌をもとめて 民族歌舞団「わらび座」の記録』、未来社、1961年、216頁。

¹⁴ 前掲注13、233頁。

¹⁵ 中森孜郎『日本の子どもに日本の踊りを』、大修館書店、1990年、14頁。

¹⁶ 前掲注5、35-62頁。

¹⁷ 西郷由布子「民俗芸能の流通—「黒川さんさ踊り」と文化の著作権を巡る問題—」、『民俗芸能研究』40号、2006年、52-64頁。

¹⁸ さんさ踊りは盛岡市周辺地域で踊られている盆踊りの一種で、太鼓を胸に付けた太鼓打ちと、笛吹き、踊り手で構成される。盛岡市内では70を超えるさんさ踊りの保存会があり、黒川さんさもその内の一つである。前掲注17、54頁。

¹⁹ 「『しっかりと習得しないまま自己流に練習を重ね』た結果、『本来の黒川さんさの形と音が正確に受け継がれていない傾向がある』ものが賞をもらい、メディアなどで賞賛されている。同前、56頁。

²⁰ 八木康幸「フェイクロアとフォークロリズムについての覚え書き—アメリカ民俗学における議論を中心にして—」『日本民俗学』236号、2003年、20-48頁。

²¹ 河野眞「フォークロリズムの生成風景—概念の原産地への探訪から—」、『日本民俗学』236号、2003年、3-4頁。

²² 田邊元「民俗芸能における真正性と伝承方法に対する—考察—「おわら風の盆」のフォークロリズム的解釈を通じて—」、『現代民俗学研究』6号、2014年、59-72頁。

²³ 富山県富山市八尾町に伝わる盆踊りを含む年中行事であり、毎年9月1日～3日に開催される。盆踊りは踊り手と地方と呼ばれる、唄や囃子などの伴奏を行う楽器隊で構成されており、この地方の演奏に合わせて踊り手が練り歩く。前掲注22、61-62頁。

²⁴ 地元の人であろうと県外の人であろうと、民謡（唄、楽器、踊りほか）の経験が深かろうが浅かろうが、また老若男女を問わず門戸を開き、ただ技量の進歩上達を基準に審査を行い、段位を取得してもらうという思いから「道場」と名付けている。同前、66頁。

²⁵ 道場の発足は同町出身のメンバーで行われている。同前、65-66頁。

²⁶ 前掲注4。

²⁷ 塩化ビニールの管に黒い布を巻き、紅白の手綱が繋がっている木製の馬の頭をつけた道具を身に着けることで馬を表現している。この「馬」はさらしによって体に括り付けられ、馬が尾を振るように動かすことが出来る。

²⁸ 前掲注12、8頁。

²⁹ 同前、35頁。

³⁰ 同前、30 頁。

³¹ <https://www.town.imabetsu.lg.jp/news/kankou/2019-0605-1825-1.html> 今別町 HP
(2020 年 11 月 27 日最終閲覧)

³² 【資料 1】参照。

³³ 【資料 1 1】参照。

³⁴ 【資料 8】参照。

³⁵ 【資料 7】参照。

³⁶ 【資料 11】参照。

³⁷ 【資料 10】参照。

³⁸ 踊り手とお囃子の両方に挑戦しようという学生も少なくない。今回は両方に加算することにするため合計が実際に訪れた人数よりも多くなっている。和太鼓ドンのサークル内冊子「出会って 20 年ありがとう 荒馬の里の物語 ～第 2 章～」、2019 年、30-35 頁。

³⁹ 【資料 4】参照。

⁴⁰ 【資料 8】参照。

⁴¹ 旧大川平小学校を利用しており、校舎には写真や資料などから大川平荒馬の歴史を知る事が出来る。体育館には大川平地区の太鼓、ネブタ、荒馬などが展示されている。

<https://www.town.imabetsu.lg.jp/sightseeing/tourist/shiryokan.html> 今別町 HP (2020 年 10 月 26 日最終閲覧)

⁴² 【資料 12】参照。

⁴³ 【資料 14】参照。

⁴⁴ 前掲注 38、39 頁。

⁴⁵ 京都新聞『『五山送り火』今夏は大幅に規模縮小 京都市街からは「炎の点」に、コロナ対策で』、2020 年 6 月 27 日 <https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/292554> (2020 年 10 月 4 日最終閲覧)

⁴⁶ 毎日新聞 大阪朝刊「祇園祭：神輿なき祇園祭 京都」、2020 年 10 月 4 日、31 頁。

⁴⁷ 前掲注 45。

⁴⁸ 特定の個人の霊が個人または社会に祟り、災禍をもたらすという信仰で、奈良時代から平安初期に広まり、祖霊信仰と共に、現在に至るまで、日本人の信仰の基礎をなすものといわれている。伊藤 信博「御霊会に関する一考察（御霊信仰の関係において）」、『言語文化論集』24 卷 2 号、2003 年、3-18 頁。

⁴⁹ 記録の残る明治時代以降でも 1879、86、87、95 年の 4 回、コレラの流行やその恐れがあるとして前祭・後祭の日程が変更され、11 月に 2 回、10 月と 5 月に 1 回ずつ延期や前倒しされた。日程の延期について、山鉾連合会の山口敬一事務局長は「山鉾を建てて動かすための道路使用許可が得られず、延期はできない」と説明。近代で初めて「疫病」による巡行中止のやむなきに至った。明治以降の中止は、明治天皇が危篤となり、後祭が中止された 1912 年、太平洋戦争中・戦後の 43～46 年と、阪急電鉄地下工事の影響による 62 年。山鉾建てが実施されなければ、46 年以来となる。毎日新聞 地方版／京都「新型コロナ

ナ：新型コロナ 祇園祭、大幅縮小 来年への継承法、模索 山鉾連合会、困難な運営続く」、2020年4月21日、18頁。

⁵⁰ 毎日新聞 地方版／京都「祇園祭：祇園祭前祭 榊持ち、四条通練り歩く 山鉾関係者」、2020年7月18日、26頁。

⁵¹ 北野天満宮では令和9年に執行される「千百二十五年半萬燈祭」に向けて境内の整備を進めると共に、心と精神的な継承としての旧儀大儀の復興を目指している。比叡山時報 https://www.hieizan.or.jp/_att/jihou/jihou-R02-09.pdf (2020年10月12日最終閲覧)

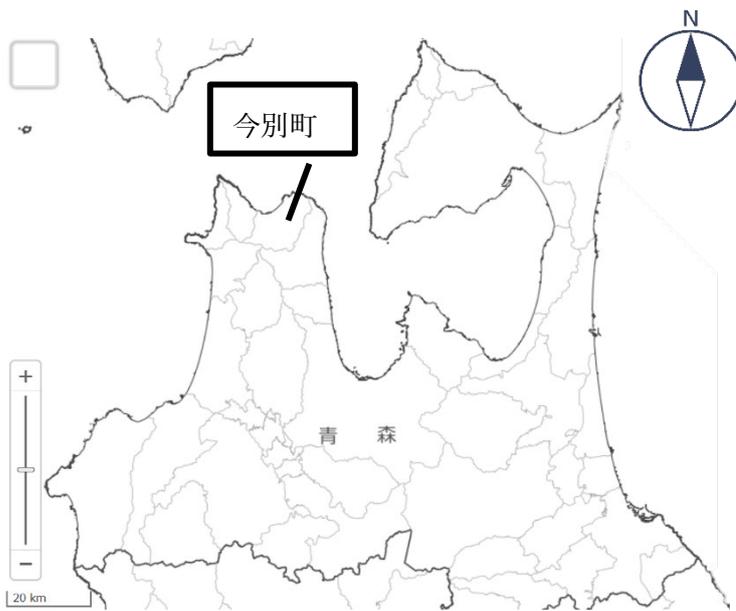
⁵² 伝教大師最澄 1200年魅力交流 コミュニケーションサイト「いろり」 <https://1200irori.jp/content/special/detail/article0> (2020年10月12日最終閲覧)

⁵³ 前掲注49。

⁵⁴ 夏だ!てれファミリー - NHK <https://www.nhk.jp/p/ts/VG1X283WZ9/>(2020年12月2日最終閲覧)

⁵⁵ 「もずくうどん」などの今別町にゆかりのある取り寄せ品を購入し、保存会メンバーの勤め先なども利用して地元に貢献しようという動きもあった。

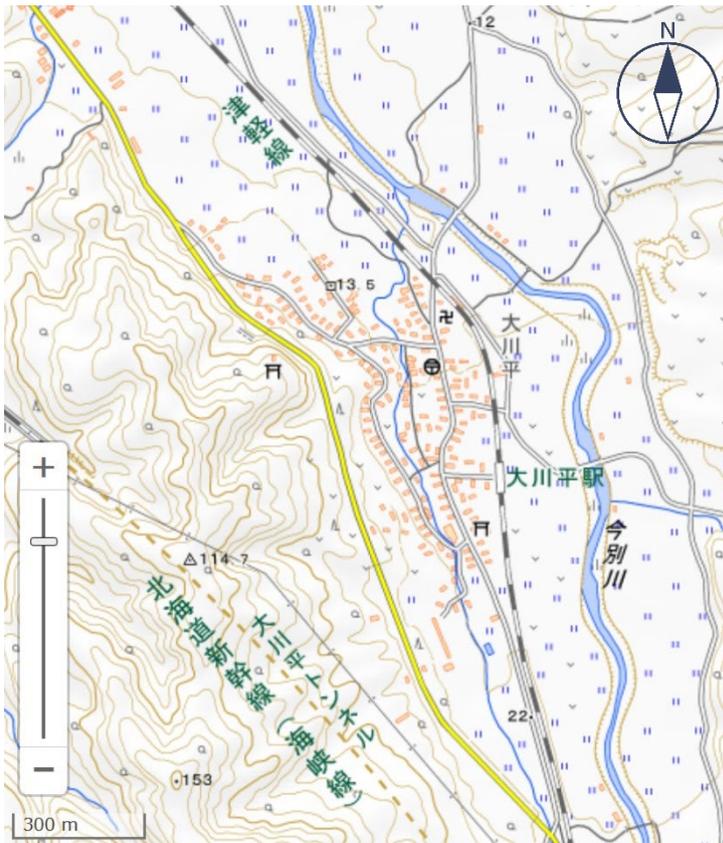
⁵⁶ Web 東奥 離れていても荒馬まつりの絆 2020年8月27日 <https://www.toonippo.co.jp/articles/-/400255> (2020年12月2日最終閲覧)



【第1図】 今別町(国土地理院地図より筆者加筆)



【第2図】 大川平駅(国土地理院地図より筆者加筆)



【第3図】大川平(国土地理院地図より)



【第4図】踊り手の様子 いまべつ荒馬まつりにて(今別町今別)

大川平荒馬保存会による披露の様子

(2019年8月4日 筆者撮影)



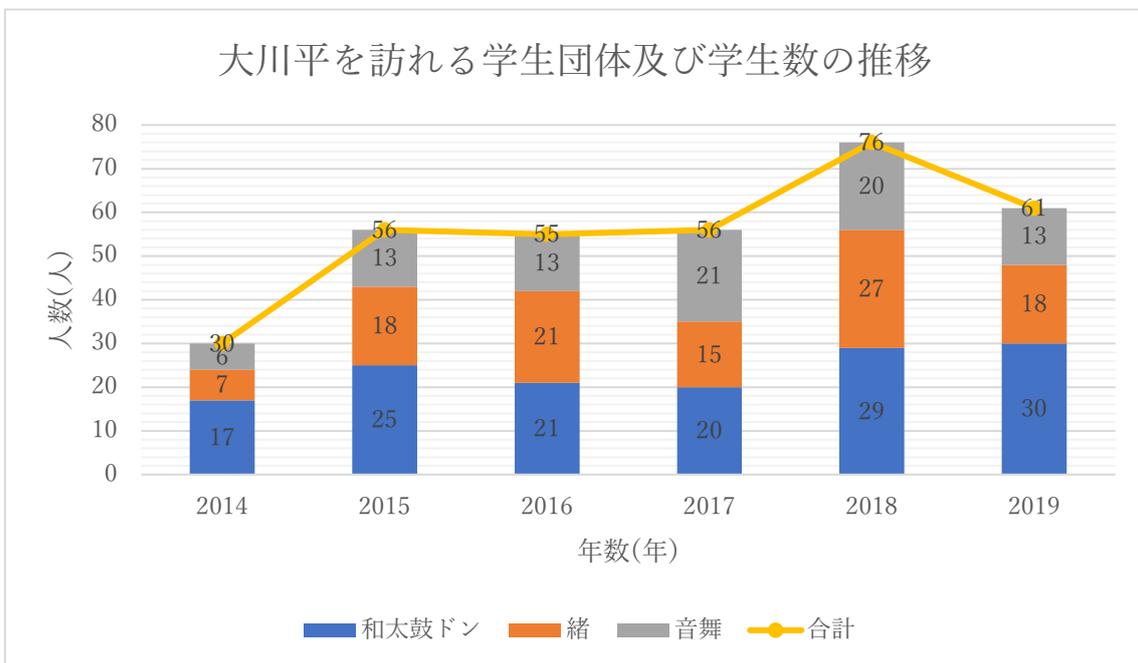
【第5図】踊り手の様子2 いまべつ荒馬まつりにて(今別町今別)
大川平荒馬保存会による披露の様子
(2019年8月4日 筆者撮影)



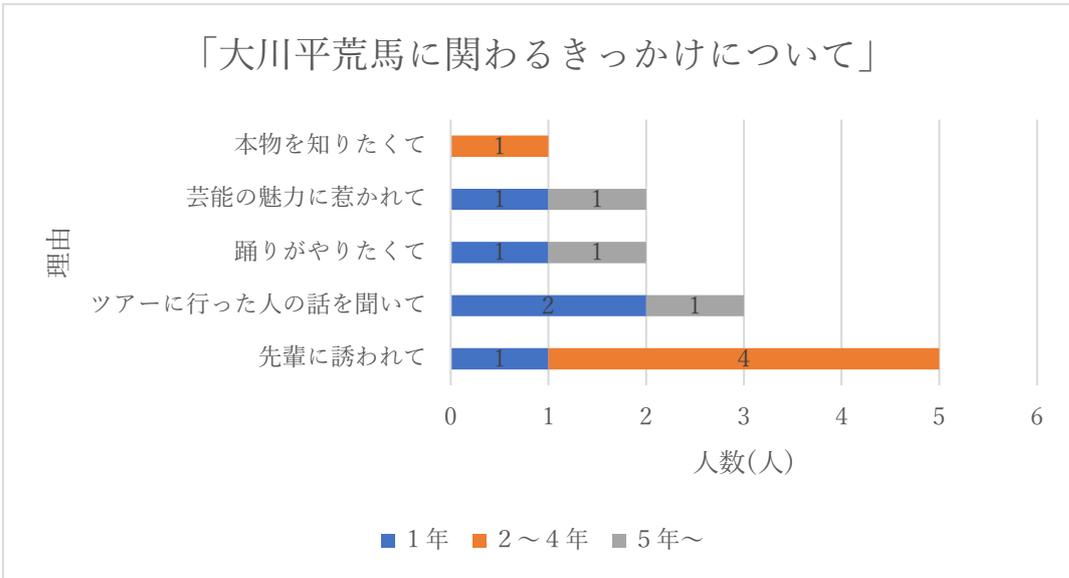
【第6図】運行中の踊り手の様子 今別町大川平にて
(2017年8月7日 筆者撮影)



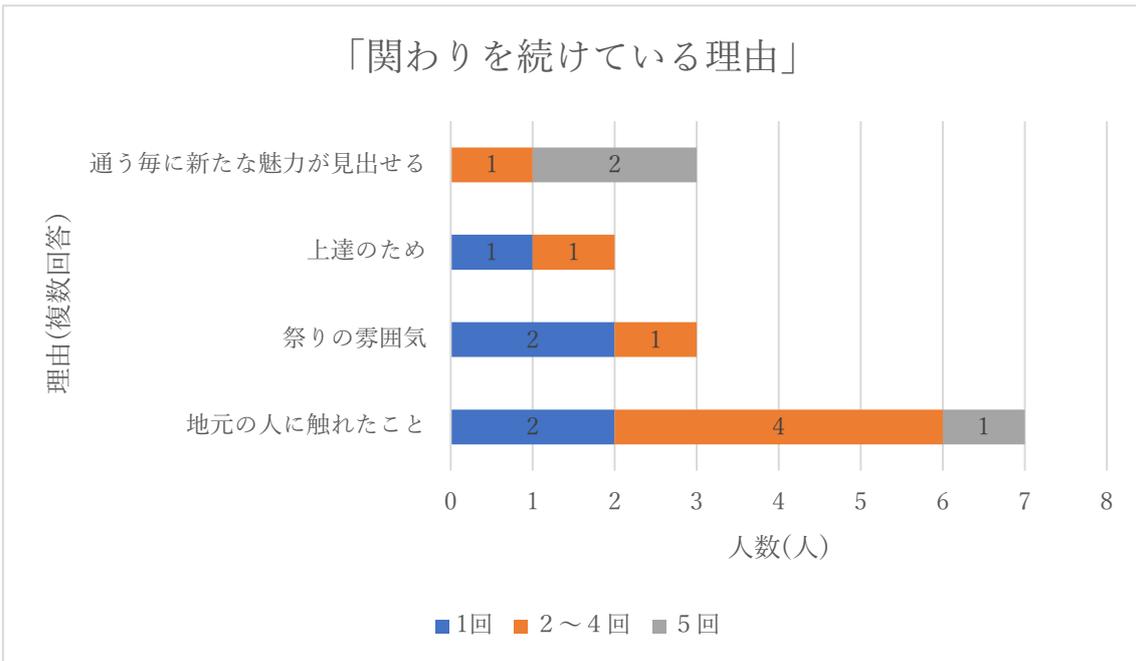
【第7図】 運行中のお囃子の様子 今別町大川平にて
(2019年8月5日筆者撮影)



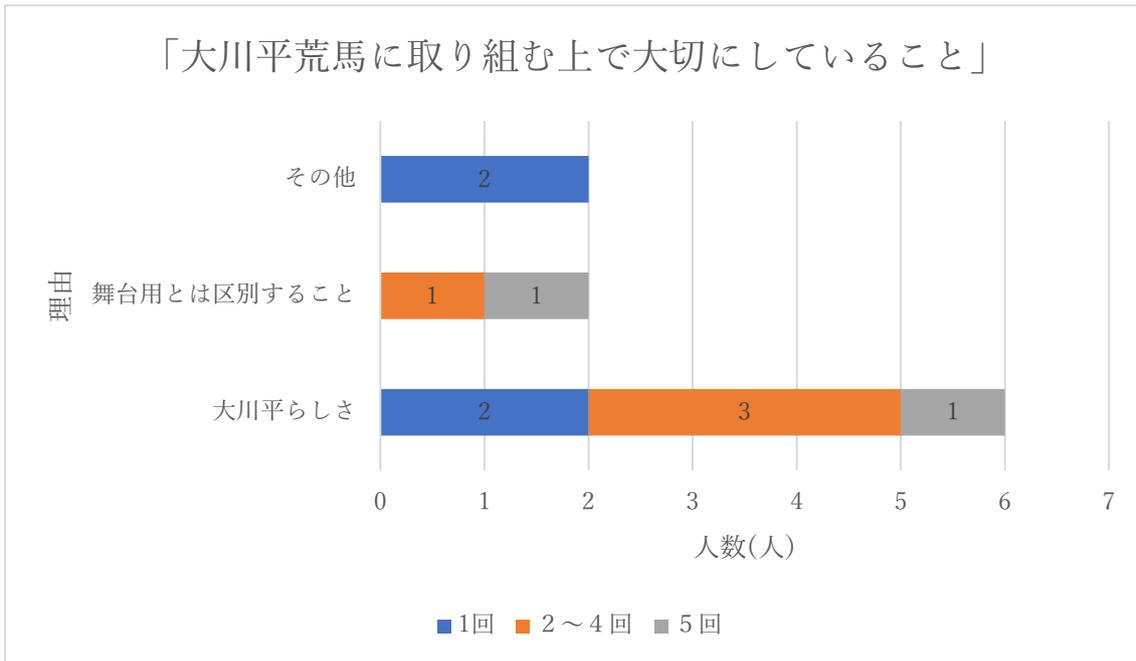
【第8図】 大川平を訪れる学生団体及び学生数の推移（各団体の活動資料、参加者名簿をもとに筆者作成）データとして確認出来た2014年から最新の2019年までを示す。



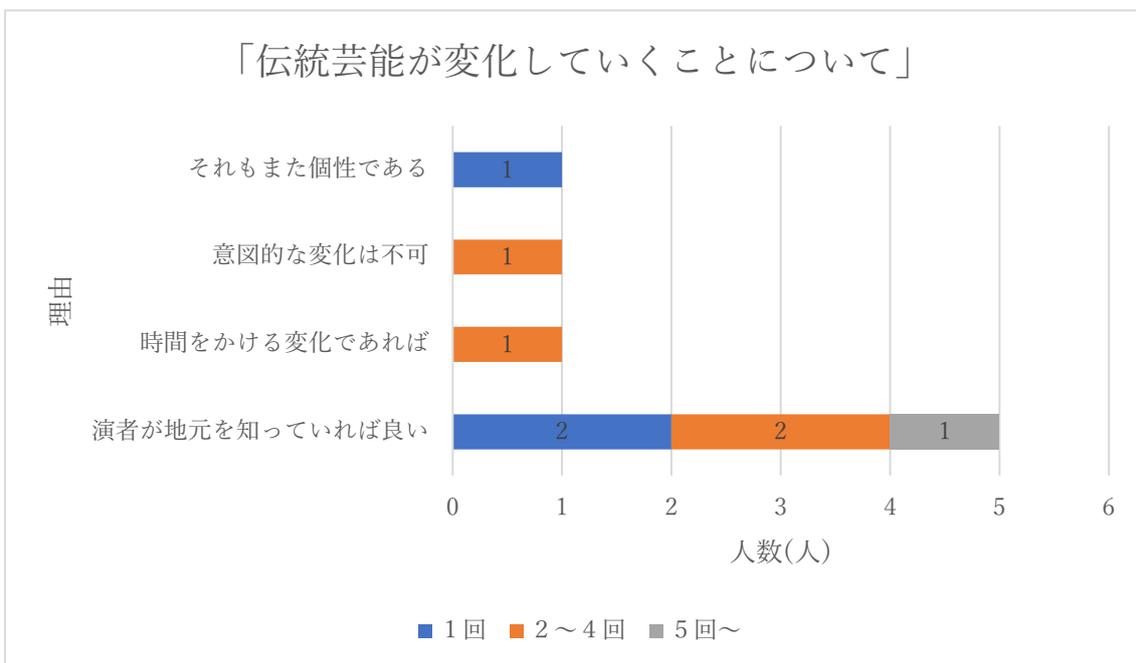
【第9図】「大川平荒馬に関わるきっかけについて」(聞き取り調査を元に筆者作成)



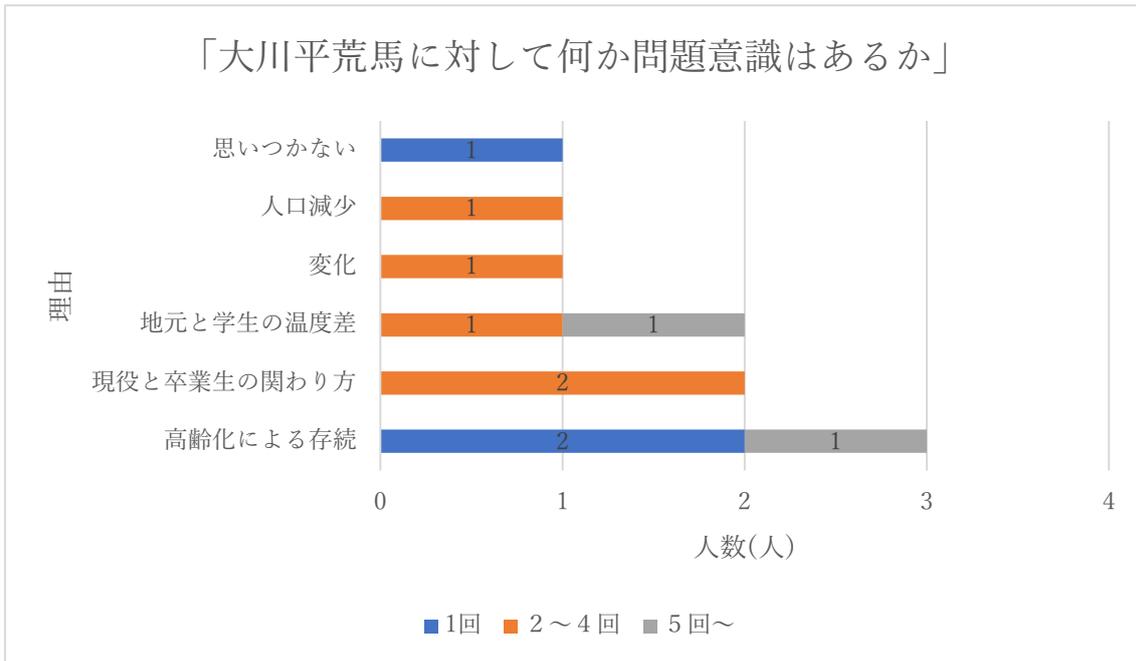
【第10図】「関わりを続けている理由」(聞き取り調査を元に筆者作成)



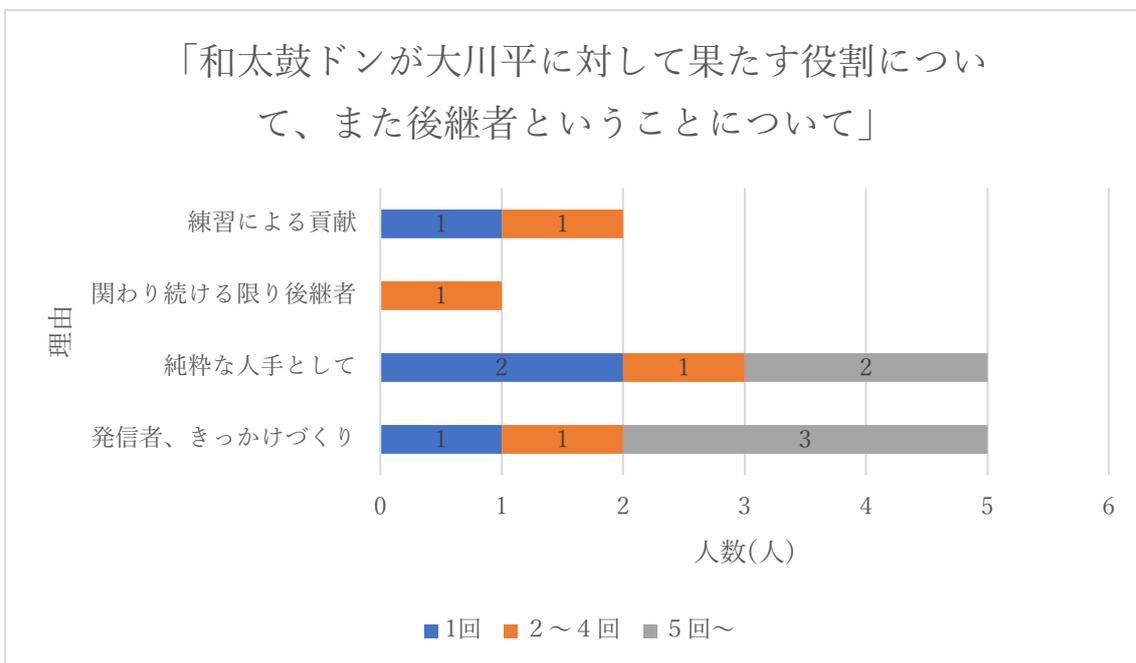
【第 11 図】「大川平荒馬に取り組む上で大切にしていること」(聞き取り調査を元に筆者作成)



【第 12 図】「伝統芸能が変化していくことについて」(聞き取り調査を元に筆者作成)



【第 13 図】「大川平荒馬に対して何か問題意識はあるか」(聞き取り調査を元に筆者作成)



【第 14 図】「和太鼓ドンが大川平に対して果たす役割について、また後継者ということについて」(聞き取り調査を元に筆者作成)

【第1表】和太鼓ドンのメンバーへの聞き取り調査対象者の概要(筆者作成)

氏名(匿名)	立命館大学 入学年度	和太鼓ドン 在籍年度	大川平参加年度 (回数)(調査当時)	調査実施時期	方法
Aさん	2018年	2018~	2018(1)	2020/10/27	直接聞き取り
Bさん	2017年	2017~	2019(1)	2020/10/27	直接聞き取り
Cさん	2018年	2018~	2019(1)	2020/10/28	直接聞き取り
Dさん	2019年	2019~	2019(1)	2020/11/8	アンケート調査
Eさん	2018年	2018~	2018,2019(2)	2020/11/5	直接聞き取り
Fさん	2017年	2017~	2018~2019(2)	2020/10/28	直接聞き取り
Gさん	2017年	2017~	2017~2019(3)	2020/11/6	電話にて実施
Hさん	2016年	2016~2020	2016~2019(4)	2020/10/30	電話にて実施
Iさん	2016年	2016~2020	2016~2019(4)	2020/10/31	アンケート調査
Jさん	2015年	2015~2019	2015~2019(5)	2020/11/5	電話にて実施
Kさん	2014年	2014~2018	2014~2019(6)	2020/10/22	電話にて実施

【資料1】大川平訪問1回目 Aさんへの聞き取り

1. 「関わるきっかけ」

荒馬のお囃子が良いと感じてOBさんたちの動画を見始めた。サークルに入った段階から挑戦しようと思っていた。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

祭りに参加してみて、自分たちもOBさんたちも地元の人もみんなが一緒になって参加できるという一体感に惹かれた。よそ者だけど迎え入れてくれて一緒にお祭りに参加させてもらっているというなかなか出来ない経験が出来たから。

3. 「荒馬をする際に大切にしていること」

お祭りではあるがどんちゃん騒ぎのお祭りにならないように意識している。「大川平らしさ」を意識してはいるが、「伝統芸能」として意識してはいない。

「大川平らしさ」とは

大川平はきゃぴきゃぴしていない。見た目はクールだが、内側には情熱を持っているイメージ。渋く熱くという感じ。今別荒馬などは衣装とかも派手だからそのあたりでも違いが出ていると思う。

4. 「芸能の変化に対して」

大川平に関しては地元の人がもっと広めたい、他に伝えていくことに抵抗が無いという事を感じた。しょうが無い部分もあると思う。地元の人だけで成り立つなら地元の人だけでやりたいという思いはあるはず。例えそういう理由があったとしても、受け入れてもらっているわけだから芸能に対する礼儀を持ち合わせる必要があると思う。

5. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

芸能には地域性がある。地域でやっているからこそその特異性があると思う。これが広まってしまうことで芸能が一般化されて地域特有のものでは無くなってしまう。例えばわからない部分は簡単にしてしまうなど外に出たものが再び地域内に影響を及ぼしてしまうこともある。それが良いことか悪いことなのか自分には判断できない。ただ、地元の人が紡いできたお祭りなので地元の思いを大切にしたいと思う。

6. 「自身を芸能の後継者と捉えているか（後継者として自覚はあるか）」

後継者として意識したことは無い。伝統芸能サークルで青森県の芸能を学ぶ中で全然知らない踊りを知った。それを自分たちが届けうる範囲の人たちにその感動とか驚きを伝えていきたい。発信者としての立場だと思っている。「後継者」は地元で長く踊り継いでいるというイメージ。こういう踊りもあるのだと知ってもらうきっかけを作る立場だと思っている。

「担い手」ということについて

支えているという点については一つの柱になってはいると思うが、支え方にも個々人のグラデーションがある。祭りを一年単位で見たときには盛り上げたり賑やかしたりする役割を担っていると思うが、芸能として長いスパンで見たときには果たしてどういう役割なのかというようには思う。

7. 「卒業後 関係人口として」

卒業後も行きたい、関わりを持ちたいという思いはある。地元の人もそうだが一年に一度ドンや音舞など様々なメンバーが集う場として貴重な機会だと思っている。

【資料2】大川平訪問1回目 Bさんへの聞き取り

1. 「関わるきっかけ」

ツアーに行き帰ってきたメンバーの話から運行や他団体との関わりを聞いて、みんなで一つの行事を作っている事に対して面白と感じ自分も関わりたいと思った。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

実際に行ってみたときに地域の人たちが一丸となって盛り上げていたり、楽しむということを第一にしていたりということを感じたから。あとは純粋に楽しく、踊り自体も上手くなりたかったから。

3. 「荒馬をする際に大切にしていること」

大川平に限らず地元がある演目については(他のオリジナルの演目と同様に)楽しませるという事に加えてお客さんが見ても「わからない」という感覚を残している。離れた地域で

行われているものだからその部分は崩してはいけない。楽しさを表現したいから動きを変えちゃうとかではなく一貫したい。

「わからない」とは

魅力とか良さは伝えたい。言葉にしづらいが、芸能を簡単にしたくないわかりやすくしたくない。お客さんから見で一発で分からない感じを残したい。プロの披露とかは楽しませるためのものでそのあたりが違うのかと思う。変える、変えないの部分は団体によって異なるであろうが、(大川平という)名を借りてやるということは地元にあるもの、つないできたものを残さないといけないと思っている。地元の荒馬に触れないと分からない部分だと思う。

4. 「芸能が変化していくことに対して」

反対することは無い。団体ごとに目的があるはず。団体内で意識が共有されていてその上で変わってしまうのなら良いと思う。地元の部分が残っている方が良いとは思いますが、変わっていくことで残るならそれはそれでいいのかもと思う。

5. 「大川平荒馬に関して何か問題を感じるか」

特にパッと思いつくことはない。

6. 「和太鼓ドンは大川平にとってどのような役割を果たしているか」

言葉としての後継者だと地元で弟子入りしてというようなイメージがある。自分ももっと広い意味で捉えていて、ドン内でも先輩後輩の関係になり教える、教えられるの関係が出来ている。知っている人から知らない人へと教えていて、卒業生になっても地元を支えようと活動している人もいるので後継者と呼んでもいいのではないかと思う。

「後継者という言葉について」

地元において次世代に語り継いでいくというような責任感が伴っているから改めて聞かれると謙遜してしまうと思う。あくまで夏の時期にしか行っていないわけではあるから。継承という言葉ならしっくりはくる。

7. 「関係人口としてこれからどうか」

時間の許す限りは関わりたい。サークルで紡いできた縁を大切にしていきたい。ここまで知ることができたから関わり続けたい。ただ道具の心配がある。現役の時は団体のもの

を使えていたが、(自分も含め)自分道具で作れる人がほとんどいない。踊りは伝わっているけど道具の作り方も伝えていかないといけないと思う。卒業してしまうと関わり、つてが無くなってしまう。先輩に聞けばもちろん教えてもらえるであろうが、団体の枠が外れて個人となると作るハードルも高いと思う。

【資料3】大川平訪問1回目 Cさんへの聞き取り

1.「関わるきっかけ」

みんなが行っていて話を聞く中で興味をもったから。

2.「なぜ関わり続けているのか」

一回目行って、地元の人も優しくて、祭りの雰囲気も好きだった。純粹に楽しかった。

3.「荒馬をする際に大切にしていること」

地元で忠実な踊り方をしようとは意識している。舞台用と地元の線引きをしたいと思うけれど実践が難しい。気張らないことが地元らしさだと思う。舞台の上だと笑顔を作るなどしなければならないが、祭りは一体感を楽しむものだから、かっこ良さを追求するのはいいけど、気楽に取り組むのがらしさだと感じる。

4.「芸能が変化していくことに対して」

教わりにいくことに意味があって、現地に行ったという箔がついている。現地に行って直々に指導されているから自分たち(和太鼓ドン)が広めるのは問題ないのではないかと思う。完全に地元の動きをコピーすることは出来ないし、動き方は個性と割り切ってもいいのではないか。

5.「芸能に関して何か問題を感じるか」

高齢化による存続が心配。消えるものは消えるというのは仕方ないのかと思うが残せるなら残していきたい。

6.「和太鼓ドンは大川平にとってどのような役割を果たしているか」

後継者としての意識は無かった。後継者は地元に住るイメージがあるから(聞いても)そう

思わない。担い手は何か大学生っぽさがある。後継者となると祭りに絶対参加しなければならないが担い手だとその縛りがないように思える。(存続ということについて)荒馬が残れば良いと思う。地域が消滅してしまっても大川平荒馬は別の地域であっても残る。別の地域で残すという役割を担えるのではないかと思う。地元で残したいという思いもわかるが、少し考え方を考えることも出来るのかとは思ふ。

7.「卒業後の関わり方について」

行けるときは行きたいと思っている。(現時点では)一年しか参加できていないので地元の人が自分のことを覚えているかという懸念がある。もし来年行けて関係が構築出来ればまた考え方が変わると思う。

【資料4】大川平訪問1回目 Dさんへのアンケート調査

1.「大川平に関わりはじめたきっかけ」

ドンの演目にあったから。踊りがやりたくてドンに入ったので、踊り演目全部するつもりだった

2.「関わりを続けている理由」

お祭りに出るのが楽しいから。
地元に参加できるお祭りが無い(あると言えばあるけど毎年関われるわけではない)、特に伝統芸能が根付いているわけではないので、観客ではなくメンバーの一員として祭りに参加させていただけなのが嬉しい。

3.「荒馬をする際に意識していること」

気持ちをオープンにして楽しむこと。
現地の方は「若い人に楽しんでもらいたい」「自分たちの芸能に興味を持ってもらえて嬉しい」と思っていると思うので、変に遠慮せず楽しい！！というのを前面に出した方が喜んでいただけるのかなと思う。
踊りに関しては、現地では、個人的にはきもち現地に寄せて踊りたいと思うが、それが絶対に必要だとは思っていない。各団体っぽい踊り、でいいと思う。

4. 「外部の人が別の地域の芸能をすることで起こる変化について思うこと」

純粋な大川平が薄まるのかなとは思う。

純粋な大川平っていうのは「現地の大川平」のことで

世代が変わり、大川平をやる人が各地に増えることで、例えばドンの大川平、緒の大川平みたいに大川平亜種みたいなものが増える。

現地でずっと練習するわけではないので当然そうなる。

それを現地の保存会の人はどう受け止めてくれているのかなとは思っている。

5. 「大川平荒馬について何か問題を感じるか」

現地の高齢化。

今の学生、今後の学生の中で OB さんみたいに保存会に入って一緒に荒馬を続けていく人はあまり出てこないと思う。

ドン在籍中に毎年大川平に行って、祭りに参加して、それで終わりという人がほとんどだと思う。そうなると、やっぱり現地で大川平を継承していく人がいなくなる、息切れしてくるのではないかと。

6. 和太鼓ドンは大川平にとってどういう役割を果たしていると思うか

大川平京都支部(特に OD 世代)

他の団体よりも「大川平荒馬」を演目として続けているのでその色が強い感じがする。

今後「あくまでドンの一演目、お祭りの人数補填という役割に留まりますよ」となるかもはしれない。

【資料 5】大川平訪問 2 回目 E さんへの聞き取り

1. 「関わるきっかけ」

動画を見て比較的取り組みやすそうだった。実際やってみると難しかった。先輩方の熱量に押されて行こうと思った。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

現地の人たちがいい人たちでまた会いたいなと思ったことと、難しさを感じたので地元で学びたかった。

3. 「荒馬をする際に大切にしていること」

地元の踊りに近づけたいと思ったが、それぞれの世代の頭(演目ごとのリーダー)によって捉え方はやや異なるのでその時の方針に従っていた。拍の取り方や扇の動かし方など地元に行ってから違いを感じて、その点を意識して練習に取り組んでいた。

4. 「芸能が変化していくことに対して」

自分たちの間違った動きで祭り等に参加したらそれが正しいと思ってしまうのが怖いと感じた。伝統のあり方は変化しても、踊り自体は変えない方が良くと思う。

5. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

変化。地元の方が変える変化なら良いと思うが、外部の立場から変えるのは良くないと思う。

6. 「和太鼓ドンは大川平にとってどのような役割を果たしているか」

後継者とは思わない。イメージとして、卒業後もずっと続けていくというものがある。自分は卒業後も現地に遊びに行くことはあっても、深く関わることはしないと思う。何十年も先に荒馬をやっているか分からないし、そういう意味では後継者ではないと思う。自分が入って良い感じがしない。あくまで部外者なので簡単には入れるコミュニティではないと感じる。学生のうちは「和太鼓ドン」というくくりで関わられたが、卒業してその枠組みが外れると関わりにくいと感じる。純粋に荒馬に取り組む時間も減ってしまうこともその理由の一つにある。誰か個人と仲良くなったとして、会いに行きたいと思うことはあるかもしれないが荒馬を踊り続けて、(保存会に属するなど)存続の活動を手伝うとは考えにくい。

7. 「和太鼓ドンの役割について」

活性化、発展の手伝いをするポジション。現地で人数的に盛り上げるという部分もあるが、広報的な意味で広めるという意味。

【資料6】大川平訪問2回目 Fさんへの聞き取り

1. 「関わるきっかけ」

先輩に踊りをやろうと誘われたのが最初に始めようと思ったきっかけ。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

大川平にあってイメージが変わったこと。ツアーに行く前から踊り始めていたが、現地に行っていないから地元へ寄せようという考え方が分からなかった。実際に行くことで地元にいる人の思いや大切にしていることなどを知ることが出来た。他団体のメンバーと関わりを持つことも続けようと思ったきっかけの一つ。また来年も会いたいと思う中で全く違う地域でも同じ踊りを共有しているというところにおもしろさを感じていた。

「大川平らしさ」とは

口で言われても分からないことを実際に(地元の踊りを)見てわかるようになった。(荒馬)が農耕馬ということも現地で知ったし、(言語化するなら)「民俗芸能」というイメージ。地元の人々の踊りは(自分たちも)同じ動きをしているのにかっこよさだけでなく感動する。言葉にしづらいがそこに大川平らしさがあると思う。すぐ出来るものではなく何年もやっているからこそ出せる魅力だと思う。

3. 「荒馬をする際に大切にしていること」

お囃子の音をしっかり聞くようにしている。目立つのは踊り手なので、外から見るとってはそれでいいのかもしれないが、踊っている自分たちは一体感を意識して出来るようにしている。

「舞台用と地元の差について」

「らっせーらー」という掛け声に表れていると思う。舞台用の声は楽しさを演出しているが地元で出す声は激励のように感じる。声を出し合うことによって一体感も生まれていると思う。舞台はお客様の視線があるから同じ雰囲気巻き込もうという意識がある。

4. 「芸能が変化していくことに対して」

自分たちの舞台を見て地元に興味を持つきっかけとなるなら問題はないのではないかと考える。特に地元の人たちが広まることに寛容であると感じたのでそのように感じるのかもしれない。常に地元に行っているわけではないから仕方ない部分はあるが、披露する場や教える機会などがあれば地元らしさ、地元で大切にしていることなどは実際に行き知っているからこそ、しっかり伝えていかないといけないと思う。

5. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

現役とOBの関わり方。距離が出来てしまい関わりが作りづらくなっている。

6. 「後継者だと思ったことはあるか」

お祭りの期間だけでなくドンはずっと練習をしている。後継かは分からないけど練習量は多いと思う。その点で言えば貢献していると思う。後継者、担い手という言葉はしっくりこない。継承はしているが継承者ならもっと広めないといけないと思う。演目を披露して(大川平という演目に対しての)説明がないことも多々ある。そういった意味では継承者ではなく役割としては貢献という言葉が良い。

7. 「卒業後の関わり方について」

地元の人たちとしゃべるようになって、名前を覚えてもらえるようになったから、ずっと関わっていきたいと思うようになった。(継承の意味で)守っていきたいと思うことはないが、ドンのように活動することが守ることだと思っている。地元にいるわけではないのでそこまでの力はないと思うが、出来ることなら協力していききたい。

【資料7】大川平訪問3回目 Gさんへの聞き取り

1 「関わるきっかけ」

和太鼓ドンに入る時にサークルの魅力としてさまざまな場所に行く「旅」を紹介された。そこで関心を持ち、実際に先輩方の披露を見たときに改めてやりたいと感じた。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

先輩の「大川平は行けば行くほど様々な魅力を発見できる」という言葉が印象的だった。その段階で4年通いたいとうっすらと思うようになった。そして、実際行った時に祭りの雰囲気が好きだと感じた。祭りの時はみんな一つのこと(大川平荒馬)しか考えていないし、全然違う人たちが同じ一つのこと熱中しているのがすごくいいなと感じた。一年目の感動から頭(演目のリーダー)をやるなら大川平かなと思うようになり、頭になるなら毎年通いたいと感じた。

3. 「荒馬をする際に 大切にしていること」

地元で忠実という意識が強かったのは「荒馬大会」だった。最初に優勝したのは「ドンの大川平」だった。その評価基準は「地元よりかどうか」で判断されていたが、一回目の大会では大川平だけでなく今別荒馬の人も審査に参加していたため、踊りの滑らかさなどが評価されて、現地の大川平という要素が認められていなかったという話を聞いた。そこから「ドンらしさ」が正しいというような風潮になった。個人的にはそれが嫌だった。ドンらしさを極めたところで(今後の)荒馬大会ではそれは評価されない。せっかくドンは本流の荒馬をやっているのに独自路線に行くのはもったいないと感じた。舞台用と地元用の線引きを無くしたかった。説明をするのに亜流の大川平を披露すること、間違った大川平を披露するのが嫌だった。(自分は手綱だから)手綱を地元にするなら他のパートも地元用にしないで違和感があるなと思えば方針も地元でこだわるようになった。

4. 「芸能が変化していくことに対して」

意図的に変えることには嫌悪感がある。舞台栄えも大事だと思うからジレンマはある。(地元以外で自分たちの)披露で見る人は地元を知らないわけなので。

5. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

卒業生と現役と地元の熱量差。卒業生と地元の人の方が繋がりが長いから、現役が置いてけぼりにされている感がある。外部の人が保存会に入らないと成り立たない状態にあったという事は知っているが、改めて(自分たち外部が)保存会に入りたいと思うのは正しい感情なのか分からなくなった。大川平の役に立ちたいけど保存会という立場になると責任など考えないといけないことが増えるためそこまで深く関わる事が出来ないという風に考えている。先輩方と話していて大川平について様々な問題を知った。先輩経由でしかそのような問題は知ることができなかったということや問題が思ったよりも深刻でただ好きという感情だけではだめなのかというような複雑な感覚を抱いた。

6. 「和太鼓ドンは大川平にとってどのような役割を果たしているか」

後継者の定義がわからないが、全くの素人ではないからその意味では後継者なのかと思う。関わり続けることが一つ要因なのだと思う。地元の方は当然だが生まれてからずっと大川平をしているから自分は一生かけても敵わないと思う。地元の方に上手くなったねと褒

めてもらえることが一つのモチベーションにある。4年間続けることは普通のサークルからしてもすごいことで、卒業して離れていくことは自然な流れだと思う。関わっている限り後継者だと思う。もう通わなくなったり、空白の時間があったりする時は後継者ではない。

7. 「卒業後も関わり続けたいか そのきっかけ」

時間と体力の許す限りは関わりたい。卒業後も関わって良いという環境が整っているのがすごいと感じる。さっきも言ったが「大川平は行けば行くほど様々な魅力を発見できる」という言葉が印象的だった。学生の立場で分かることは正直たかがしれているが社会人の立場だと視野も広がり、もっと魅力を感じる事が出来ると思う。

【資料8】大川平訪問4回目 Hさんへの聞き取り

1. 「関わるきっかけ」

伝統芸能のサークルに所属する上でその芸能の本物を知らないとただのまねごとになってしまうと思い、その本質を知りたかった。その発祥の地やその土地に住む人を知りたかった。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

大川平に通い、土地や祭り芸能の魅力に気づくことが出来たし、地元の人々の踊りをみて深さを知った。地元の人との人間関係ができたからまた会いたいなという思いから関わり続けている。

「本質とは」

文化と社会と伝統芸能の結びつきに本質があると思う。初めて訪れたときに自然がきれいだったことが印象的だった。景色とかを実際に見て、芸能に流れているテンポ感がその土地の時間の流れと結びついていると感じた。大学生が始めても簡単には習得できない動きなどを知り、血のつながりの深さや人と人との関係や価値観の共有がしっかり行われているという風を感じた。それくらい密な関係が伝承には必要なのだと思った。地理的な部分を実際に見る事で本質を知ることができた。

3. 「荒馬をする際に大切にしていること」

披露するときよりも練習の時間を大事にしている。土壇場で舞台に立ったときに出る動

きだから自分の体にしみこませてなじませた動きを披露したかった。練習中に意識していたのは地元の人に教わったこと。これを繰り返し反芻してから人の前に立つことを意識していた。唐突に出てくる動きが地元の動きであってほしかった。

自分たちの披露を見て、地元に興味を持ってほしかった。自分たちの踊っている大川平荒馬を見たお客さんが地元について調べるなどというきっかけを作りたかった。基本的には舞台用と地元の踊りという風に線引きをしてはいなかった。もちろん多少の脚色はあったが。

4. 「芸能が変化していくことに対して」

手綱の動きが大学生の入ってくる前後で子どもたちの動きが変わっている、人数的にも目につきやすいのか、大学生の動きによってきているという話を聞いた。本来祭りは見世物として行われてきたものではないが、大学生たち外部の人間はそこに見栄えの追求などという観点を根底に持っている。どうしても(地元の子どもたちは)きれいに見えるような方によってしまう。(そのような話を聞いて)わざわざ伝統芸能の発祥の地に行くからには、最初の生まれた形を大事にしたいと思っていた。大川平は外の人が入ってこないと存続が難しいという状況にあったという前提があるが、もし外部の団体が入らなければ生まれたままの状態を維持していたかもしれない(と思うこともある)。伝統が人口減少などの要因により消えていくのは定められた宿命で、その自然の流れに外部が入っていくのはその流れを阻害する事になるのではないかという意見もある。魅力的な伝統があって、外部の人間が関わることによって、口承で紡がれてきたような伝統がデータとして残るようになる。外部の人間が介入して記録に残せるのであればその関わりも必要だと思う。

動きの変化について肯定はできないが、残しては行きたいけど変えたくはない。例えば観光事業になったというときに本来の良さが消えるというようなことはあってはならないと思う。変化に対しては時間をかけるべきだと思う。大学生が入ったことにより急に変化したのであれば自然の流れを阻害して、外の力のよって無理矢理変えていったように見える。今の大川平のように時間をかけて熟成した結果の変化であれば、伝統(芸能)自体が変化したという捉え方も出来る。名前を同じくして違うものが広まっていくのが一番恐ろしいと思う。広めるのであれば本物を習うべきだし、本流でありたかった(から現地に通った)。(大川平は)人の目に触れにくいのが京都で披露している自分たちは人の目につきやすく、初めて見た人にとってはそれが大川平荒馬となる。そのため地元と自分たちの間に差があれば間違っ

大川平が広まってしまうことになる。それを防ぐためには時間をかけて荒馬を学ぶ必要がある。

5. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

(荒馬を踊れる人たちだけでなく)大川平の人口が減ってしまうこと。荒馬が生まれた町だから無くなってほしくない。大川平荒馬を知って大川平地区を知り、人の温かさなどを知ることが出来た。景色なども含めて大川平が好きなので(人が少なくなることで)それが無くなるのが嫌だったから町全体に対して危機感を覚えている。

6. 「和太鼓ドンは大川平にとってどのような役割を果たしているか」

一時的に関わっている人間なのでそう(後継者)と思ったことはない。実際に大川平で暮らしているわけではないし、そうでない人が後継者を名乗ると伝統が揺らいでしまうような感じがする。(テレビのような事例から)広める立場、広報担当のような存在にあると思う。関わる人を増やす。もし大川平が無くなっても、祭りが出来なくなってしまっても、(自分たちが芸能に取り組むことで)その記録は残る。そのような活動で大川平に貢献できているから広める立場がしっくりくる。一年に一度しか行かないような立場なので担い手というのもどうかわからない。

7. 「関係人口として」

どんな関わり方でもいいなら(関係人口として関わり続けたい)。ドンに所属していたときは大川平に向き合う時間が十分にあった。社会人になるとその時間が無くなる。(以前のよう)にアクティブに動けない状態でもいいなら関わり続けたいと思う。(きっかけは)伝統芸能以外の所に魅力を感じたこと。人もそうだし観光地というか、遊びに行きたい一つの場所として大川平を思うようになった。伝統芸能(に打ち込みたい)という繋がりが薄れてきてからは、人に会うためとかその土地に赴くためというような部分にも魅力を感じるようになった。

【資料9】大川平訪問4回目 Iさんへのアンケート調査

1. 「関わるきっかけ」

サークルの大川平ツアー。演目をやっているのと、先輩たちの大川平熱がすごかったので

参加してみた

2. 「なぜ関わり続けているか」

大川平の人が好きだから。

3. 「荒馬をする際に意識していること」

演目は、地元の荒馬のように踊り手さんが気持ちよく跳ねられるようなお囃子を目指している。でも、自分が楽しんで叩くこともとても大切だと4年目でやっと気づいた。

4. 「大川平荒馬の問題点について」

地元の荒馬と学生の荒馬の差 温度感の違い。でも初めて大川平で荒馬を見る人からしたらそれが「大川平荒馬踊り」になるので、技術的な面も含めて本当に学生が参加して良いのか…？と考えてしまう部分もある。大人数の学生が参加することの良い点と悪い点での葛藤がある。

5. 「和太鼓ドンの役割について」

和太鼓ドンを通して、大川平を知ってもらおうきっかけになれる。外部の者として関わらせてもらっている立場の変化でいうと、その地域や人への気持ちというか愛というか、感謝もあるから、もっともっと大川平を知りたくなるし大切にするようになると思う。

【資料10】大川平訪問5回目 Jさんへの聞き取り

1. 「関わるきっかけ」

サークルに入って何か踊りをやりたいと思っていた。実際やってみて自分の触れたことのないことに挑戦するのが楽しかった。練習の中でのめりこみ、もっとうまくなりたいと思って地元にも赴いた。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

家族のように迎え入れてもらえることに感動した。人、地域に対する愛情に加え、一つの芸能を長い時間踊っていられる幸せを感じて毎年行きたいと思うようになった。一年目は決して多くの方と触れ合うことができたわけではなかった。回数を重ねるごとに親しくな

っていくのを感じた。

3. 「荒馬をする際に大切にしていること」

披露する対象による。基本的には芸能自体に興味を持ってもらうというスタンスでやっていた。広めるという点に関しては有意義だと思う。芸能をやっている団体だと謳っている上では忠実にすべきだと考えていた。

「地元らしさとは」

男性、女性それぞれのらしさが出る芸能だと思う。女性のしなやかさ、踊りの途中で馬の後ろに下がる、一歩引くというような日本の美学とされてきたものが表れていると感じる。男性は最初、女性に付き従っているが途中で激しさ、猛々しさという部分を出していて、お互いを引き出し合う芸能だと思う。お囃子もそのようなイメージがある。太鼓の荒々しさや笛の綺麗なメロディーなど、バランスよくそれぞれを引き立てる芸能だと感じる。

4. 「芸能が変化していくことに対して」

できるだけ地元でもともと受け継がれてきたそのままを習得したいという思いがある。祭りのときに踊るほうが自分より相手を意識していた。魅せるというよりは共同作業という感じ。ほかの人と一緒に一つのものを作り上げている感があった。

5. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

一言で表すなら熱量差。団体ごとに大川平へに行く意味合いが違うと思うが、受け継ぐ団体によって、(同じものを習っているのに)やっていることが違う。団体ごとの温度差というのが、今後人が増えていくうえで問題になると感じる。お囃子は運行全体にかかわるから厳しく教わると思うが、踊りは地元の方の優しさゆえか少し甘く評価されていると感じる。団体ごともだが、学年ごと、学生と卒業生という区分でもその差が問題に感じる。

6. 「和太鼓ドンは大川平にとってどのような役割を果たしているか」

後継者と思ったことはない。大川平の方々が何をもって継承者として認めてくれるのかわからない。地元の方は(優しいから)やっているだけで後継者、担い手と言ってくれるが、あくまで勝手に学ばせてもらっている身としては、継承者と名乗ることにはおこがましき

を感じる。関わらせてもらっている年数的にもそう感じる。担い手とするならば、芸能だけでなく地域の背景などまだ知らなくてはならないことが多くあるように感じる。

きっかけをもたらす存在と思う。ここ数年でドンと保存会が絡んでやるが増えてきたと思う。今までは卒業生の先輩方と保存会という印象だった。そういう意味では大川平と学生との繋がりのおかげ作りを担えているのではないかと思う。

7. 「卒業後も関わり続けたいか そのきっかけ」

芸能自体、祭り自体が好き。団体に属していない今、続けるためには地元に通うことが一番だと感じる。今まで関わらせてもらった地元の方に会いに行きたいというのも理由の一つ。現役たちが余計なことを気にせず楽しむために、卒業生の立場で何か出来ることがあるのではないかと感じるようになった。そういう先輩方を見てきたから自分たちの番ではないかと思った。

【資料11】大川平訪問6回目 Kさんへの聞き取り

1. 「関わるきっかけ」

ドンに入るときの披露を見て、かわいい衣装で踊っているのを見て自分もやりたくなった。実際取り組んでみても楽しかったので自然とツアーに行くようになった。

2. 「なぜ関わり続けているのか」

継続的に行こうと思ったのは2回目の後。それまではみんな行くから行くかくらいの気持ちだった。踊り以外にも運営や地元の人としゃべったり写真を撮ったり、もっと深く関わりたいと感じ始めてツアコン(ツアー中の団体内のリーダー)にも迷わず立候補した。

3. 「荒馬をする際に大切にしていること」

人に見せるということ。楽しませるという意識が強い。地元は内輪で楽しむという印象があるがその逆。外の人に対する意識がある。披露の時に踊るものと、地元で踊るものとは別物だと考えている。世代によって考え方が違うとは思いますが自分が居た頃は結構線引きしていることが多かったのでそう感じる。どっちが良いとかではないけれど(ドンの中でも)考え方の変遷はあると思う。自分が居た頃は、踊っている自分たちは楽しいけれどお客さんにとってはどうだろうという考え方を深めていた時期だったと思う。

4. 「芸能が変化していくことに対して」

どうしても変わってしまうものだとは感じる。出来るだけ外部の人間が地元近づけて踊れたら良いのでは無いかと思う。地元の中でも変化はしているので地元との乖離をしないようにするのが関係人口としての努力ではないのかと考えている。

「地元らしさ」とは何を意識しているか

元が田植えの時の踊りだということを意識しているので、地元で踊るときはちょっとした泥臭さをイメージしている。人に見せるのでなくお囃子に自然に乗るようなリズムを大事にしている。

「違うものが伝わっていくことについて」

違うものかもしれないが敬意を持っていればそれもありだと思う。自分たちの披露を見て興味を持ってもらった人が保存会の動画を見てくれるなら、広めるという点で地元貢献できていると思う。

5. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

高齢化。あれだけ外部からきていて地元で若い人がほとんどいないことが問題だと思う。

6. 「和太鼓ドンは大川平にとってどのような役割を果たしているか」

地元の人たちにとっての宣伝役。インフルエンサー的な立ち位置になれるのでは無いかと思う。卒業後に各地に行った中で荒馬の会や家族に(荒馬を)広めていけるのは広がりとして良いと思う。

「後継者という言葉について」

最近プロジェクト(関係人口・地域おこし協力隊マッチングイベント「青森発! ローカルプロジェクト市」のこと)が始まってから、後継者と思い始めた。今までは楽しく関わろうと思っていたがプロジェクトに参加してもっと深く関わりそうだと感じたし、公演とかあって誘われたら積極的に参加すると思う。現役の時も社会人一年目の時も後継者という考えはなかったが、社会人になっても大川平に行くことが一年の中でもポイントになっていて、深く関わりたいと思うようになって(後継者と)イメージをするようになった。関わる年数によって感じ方が変わってくる。踊りという軸だけではなく地域としてこの場所を守りたいという思いが強くなったから(後継者という言葉は)しっくりくる。

7. 「これからも関わり続けたいと思うきっかけ」

4回生のツアーが終わった後。最後に(学生として)ツアーで行って社会人になった後のことも考えて広い視点で参加できた。OBさんたちの関わり方にも憧れていたから。

【資料12】和太鼓ドン卒業生 西嶋一泰氏への聞き取り

立命館大学 2004 年度入学、2008 年度卒業、和太鼓ドンには 2004 年～2005 年の 2 年間所属し、その後は公演の補佐として関わっていた) (2020 年 10 月 22 日 電話にて実施)

1. 「関わるきっかけ」

和太鼓ドンに入ったこと。でも一年目は行かなかった。大川平に行って帰ってきた人の熱量がすごかった。ただ行っただけじゃなくて、しっかりと関係を作って帰ってきて、思い出を熱く語れるということにうらやましさを感じて 2 年目から参加することにした。イベントとかでは無いメインの祭りの中まで外から来た人も入り込んで関わっているのはなかなか無いことだし、大川平の人たちも優しいし、そういった面で惹かれていった。

「一番印象的な点について」

覚えようと思ったら一日でできるような踊りだと思っていたが、地元ではその踊りを 50 年、60 年と続けている人がいて、貪欲により良い荒馬を目指す姿を見て奥深さを感じた。間口は広いけれど、人によって個性があるのが好き。プロじゃなくて素人がやっているというのが民俗芸能の良さだと思う。素人の不器用さなどを何十年もかけて味に昇華しているというところに魅力を感じる。

人としても尊敬している。大川平に滞在中はプチホームステイのような感覚で様々なことを話し合い次の日にはまた荒馬の練習をしてという非常に濃厚な一週間を過ごした。祭りにがっつりと関わらせてもらっているからこそ、その気持ちに応えたいという思いが湧いてきた。

「素人とプロとは」

太鼓のプログループなどは様々な演奏に対応できる器用な体作りをして良いパフォーマンスができるようにしているが、民俗芸能をやっている人たちはそこに伝わる芸能に特化している。プロのように運動神経があるからと言うような理由で芸能をするわけではなく、そこに居るから芸能をしている。(民俗芸能の人たちは)自身の体と向き合って一番良いパフォーマンスが出来るように考えている。コンテンポラリーダンスとかコミュニティ

ダンスというようなアプローチに近い。そういったようなおもしろさを感じる。

2. 「コロナウイルスの影響について」

大川平に限らず、祭りが無くなることによって地域の中で温度差があった問題が浮き彫りになった。祭りに対して消極的な人たちが離れていくことになってしまう。一年ならまだリカバリーが効くがこれが続いていくと厳しい。祭りがあるからという理由で若い人が帰ってきたり、老人たちも集まったりしていたが、それが無くなるということはそのまま地域としての一体感が無くなるということになってしまう。

3. 「芸能に関して何か問題を感じるか」

顔が見える関係性をどこまで維持できるか。大川平に愛着を持って帰るという人口を如何にキープするか。地域に人を呼ぼうとすると窓口は一つで地域住民との関わりは薄く、労働力のように扱われることが多いが、大川平ではその窓口が分散している。学生さんではなく一人一人の個人の名前を呼ぶ。個人のつきあいがあるという関係性を維持出来るかが学生の人数が増えてきた昨今で一番の課題だと思う。

スケールを大きくすると、今別町がやばい。若い人たちが少ないので、いかに受け入れ体制を整えるかが肝心となると考えている。

4. 「芸能が変わることについて」

変わるのは仕方ないこと。関係人口が関わる前から時代のニーズに合わせて変わってきている。ただその変化の中に何を大切にしたいのかという意識があってほしい。そして、その変化が過去にあったという事実を関係人口が理解してほしい。知っていれば何かの時に振り返ったり魅力を再現したりという事が出来る。変化を受け入れながらも過去あった出来事を振り返ることも必要だと考える。

5. 「自身を芸能の後継者と捉えているか」

継続的に関わっている人が担い手になる。きっかけとしてのサークルでありサークル単位ではない。次に、受け継ぐ人となると継続的に関わっている人になるかと思う。一年単位で考えると祭りに参加している割合は学生が一番多い。ただ学生は毎年通う必要はない、と言うかそこに責任はない。ただ、継続的に関わっていくうちに祭りに対する責任感

や意識などが芽生えてくるのではないか。

【資料13】 荒馬保存会顧問 嶋中卓爾氏への聞き取り

(2020年10月23日 電話にて実施)

1. 「祭りを行う意義(なぜ続けるのか)なぜ続いたと思うか」

(荒馬は)先祖が築いた祭り。おそらく先祖は江戸時代頃からずっと続けてきた。私(個人)としてはその祭りを絶やしたくない(と言う思いでやっている)。

「その意識は地域で共有されていると思うか」

大川平というよりも今別町全体で荒馬を大事にして受け入れている。無くてはならないものとなっている。みんな絶やしたくないと思っている。その思いが祭りがここまで続いてきた理由の一つだと思う。

2. 「外部が入ってきた事による変化、そのことに対する抵抗感」

抵抗はなかった。よく来てくれたなという感じ。私の先輩たちにとってはこの地区だけでやった祭りだから抵抗感があったかもしれない。ちょうど高齢化が進んできていたというのもあって、若い人たち(和太鼓ドンのメンバーら)が来たのはむしろチャンスだと思った。

「保存会に和太鼓ドンのメンバーらが加入することについて」

私の次の世代のことで、良いアイデアだと思った。最初の頃は荒馬保存会京都支部を作れて話をしていた。それはなかなか実現しなかったが、今「荒馬の会」の活動をしてくれていて。

3. 「伝承に危機感を覚えているか」

今のところは皆さん(学生や卒業生)が一生懸命やってくれているから(あまり危機感はない)。ただコロナウイルスの影響がどうなるのかという点について危機感がある。これから先私たちが年いって、その後が問題。ただこうやって通ってくれるのであればまだ安心。

4. 「保存会以外の団体が大川平荒馬を披露、指導することについて」

変化していくのは仕方ない。和太鼓ドンらはしっかりと地元の荒馬を研究しようとしてくれている。

「それでも地元の荒馬とは変わってしまうことについて」

それは仕方のないことだし、特徴だと思う。大川平は大川平の荒馬があるし、今別には今別の荒馬がある。ただ、私たちの原点はこの大川平荒馬であるから、ドンの人たちにもちゃんとそれは守ってやってほしい。アレンジしたものをやるのは問題ない。祭りが有名になって広まって行って、今別に人が集まって地域全体を盛り上げて行ってほしい。

5 「後継者は誰を対象にしているか」

これからは学生も後継者として表わされるのではないか。今別(荒馬)の方だって祭りに来て盛り上げているのは和光(小学校)の子らだし、大川平も君らが参加してくれるし同じだ。

6. 「コロナウイルスの影響をどう捉えているか」

とにかく辛い。祭りに密になるなんてちょっと…。密になるのが祭りで、笑い合っ、飲み交わして…。寝るところとかも今までみたいにはいなくなる。祭りそのものが出来なくなると言うのが本当に辛い。コロナの影響が収まって、(感染には)気をつけながらもまた楽しく祭りがしたい。

「ゲリラ運行の目的について」

今まで荒馬運行が無かったことがなかった。とにかく絶やしたくなかった。今年もなんらかの形で行いたくてやった。合同運行は20年ちょっと前から始まったものだが、大川平での運行は途切れたことが無かった。

7. 「これからの継承のために必要なこと」

あなたたち(和太鼓ドンのメンバーら)とコミュニケーションを取っていくことと、大川平にいる若い人たちが荒馬を絶やさないという強い使命を持つこと。

【資料 14】大川平荒馬保存会 会長 田中健介氏への聞き取り

(第一回 2020年10月20日 電話にて実施)

1. 「祭りを行う意義について」

今現状で、やるべき意義は地域のため。自分たちがやりたいのもあるが、自分たちの下の子どもたちに荒馬を残していきたい。ずっと続いてきたことを絶やすわけにはいかない。(地域のためというよりは)こっちの方が言葉的に合っているかもしれない。今年はコロナでこういう結果になったが、本来ならばやらなければいけないことだと考えている。

2. 「外部が入ってきた事による変化、そのことに対する抵抗感」

(抵抗感について)俺らの世代はないと思う。20年前はあった。郷土芸能をやらせてくださいって言うのはあった。今20年経って言えるのは君ら(和太鼓ドンのメンバーら関係人口)が来てくれなければ(大川平荒馬を)守ることができなかった。人口もどんどん減っていて、来る人を拒まずずっと受け入れて行かないと祭り自体が出来なくなる。現時点ではそういう風に思っている(抵抗感を持っている)人は誰も居ない。

3. 「保存会以外の団体が大川平荒馬を披露、指導することについて」

全然(構わずに)全国に広めてほしい。それに対する違和感はない。他の団体はよく分からないし、確かに無形文化財に指定されて大事にしてきたという堅苦しい面もあるが、今はそういう時代ではなくて時代の流れに沿って、(大川平荒馬を)やれる人がやってどんどん広めていってほしい。それが担い手不足という問題の解決にもつながる。

「そのためには多少形が変わってしまっても良いと考えていますか」

形が変わるのはだめかなと考えている。確かに昔から比べてみれば、今の荒馬はだんだん踊りや衣装など現代風に変わってきているというのも事実。根本的な荒馬は変わってほしくない。ただ、なるべく指導する側も本来の荒馬を知った上で広めてほしい。

「地元の方々の披露する荒馬を知っている事が本来の荒馬を知っている事になるか」

そう。俺たちも自分の生まれる前の荒馬を知っているわけではないから、実際に現在行われている荒馬を見て、(大川平荒馬)に触れてほしい。

4. 「伝承に危機感を覚えているか」

危機感だらけ。果たしてこのまま来年も同じように祭りが出来るのか。保存会も高齢化していく中で、5年後、10年後どうなっているのかという事を考えても危機感だらけ。

「関係人口が参加してもそういった危機感は変わらないか」

やっぱり、一人でも二人でも地元で荒馬を踊れる人が増えないと厳しい。大川平の荒馬であって、他県の荒馬ではない。やるのも勝手だし伝えるのも勝手だが広めていく人には大川平の荒馬を知っていてほしい。

5. 「後継者は誰を対象にしているか」

地元の保存会や地元で踊れる人たち。彼ら(和太鼓ドンのメンバーら関係人口)がいなかったら続けてこれなかったのは事実だし、一緒に(これからも荒馬を)やればいいけど。いずれ荒馬ができなくなるだろう事を考えて、県外の人たちを受け入れている。保存会も彼らに伝えられることは伝えようとしているが、県外の人たちはどうしても動きが制限されて、(保存会のように県内もしくは地域外での)柔軟な対応が難しい。

7. 「コロナウイルスの影響をどう捉えているか」

最悪。(荒馬披露の)イベントとかがないのは仕方ないけど、祭りが無いのは、簡単に中止にしましょうというのは、今までどんな苦しい環境でもずっと続けてきたから大事件だと思う。仕方ない、仕方ないけど。来年もまだ出来るかどうか分からないのも不安。

「ゲリラ運行の目的について」

1週間前にサプライズで行った。運行がなくなるのはさみしいから、何かの形でやりませんかという話で地元の有志で声を掛け合った。保存会という枠組みではなかった。地域のためにやっている。今後の(コロナ禍での)取り組みはやれるかどうかわからなくてもとにかく(イベントや企画などを)計画することが大事。意思を持つ事。それによって周り一つになつて盛り上げていく。

8. 「これからの継承のために必要なこと(コロナ禍も踏まえた今後のあり方)」

担い手。担い手をどうやって見つけてどうやって増やしていくかという事に尽きる。大川平に住んで荒馬をする人を増やしたい。地元にはないと融通が利かない。30年後40年後を考えた時に、俺らの代に30代40代の若い連中はたぶんもういないと思う。でもその時の状況はあんまり考えたくないし、実際今考えても仕方ないから、さっきの(イベントを企画する話)じゃないけど今できることをやっていきたい。

(第2回 2020年11月19日 電話にて実施)

「後継者の定義について」

地元の人がやってくればそれがいいけど、今は次の世代に渡すのもきつい程先が見えない状態。次の世代は自分たちの子供だから自分たちの子供にやってほしいという思いはある。保存会がどうなるかわからないけど、地元にいるからこそ地元のことがわかる。荒

馬を練習するのはどこでやってもどこにしようとか関係ないだろうけど、やっぱり、地元で、ここ(大川平)でやるのが大川平荒馬だから地元が条件になる。

「存続の定義について」

どうだろうね。どこ(の芸能)でも地元でやっているからこそ伝統芸能だと思う。全国に広まっているが、守っていくべきは地元の、郷土の荒馬だと考えている。

「観光との関わりについて」

悪い意味での影響はないと考えている。どんどん全国に広めていこうという姿勢で保存会は動いていたから、以前の荒馬とは変わってきていると思うが、今は今の時代で、今のやり方で受け継いでいって全国、世界に広めていけるならそれはいいことだと思う。高齢化の重圧を受けている今別町という現状をみても、そういう(観光客の)目線は大事だし、県外の人がやっているからって(自分たちの荒馬が)変わるわけじゃないから、悪い印象は持っていない。

荒馬大会はここ数年で始まったことだが、今別町の行政が関わっている。合同運行は観光協会の方からの通達で始まった。村がやろうってことはなかったけど、大川平はすべてのイベントに参加していきましょって辛い思いしてやってきたのが報われて、全国に知られるようになったのだと思っている。特に抵抗はなく、見てもらって喜んでもらえるならどこでも(行って披露する)って感じ。

「外部が広報の役割を担っていることについて」

それを目的で県外の保存会メンバーを作っている。県外のイベントを断らないでいこうという考えがあった。もちろん誰でも入れるということではなく荒馬に貢献してくれている人や、熱心に取り組んでくれている人、長年通ってくれている人を保存会メンバーとして受け入れている。保存会メンバーを増やすにあたって学生はやめようというような規約を設けている。自分たちを県外の人、他人という意見でなく、保存会の一人として意見を出すようにという願いはしている。

「大川平らしさについて」

人。人の暖かみ。大川平は特に決断力、団結力が強いと思う。保存会、青年会、神社の神

主、消防など皆同じメンバーでやってきている。十人十色と簡単に言うが、まとまりやすい違い方をしていると思う。荒馬をやることも町内会の役員をすることも仕事のようになっている。そういった意味でも団結力は強いと感じる。年齢の境界線はないのも特別だと思う。誰でもウェルカムという気風もある。こういったことは全部人のあたたかみから広がっていくのだと感じる。

京都に求められる観光のかたち—持続可能な観光都市を目指して—

芦田 奏穂

序章

2020年春、京都から観光客が消えた。インバウンド前年同月比99.9%減のわずか0.1%。「観光客がいない嵐山、祇園、京都」を1年前に想像できただろうか。社会学者のジョン・アーリは、『モバイル・ライブズ「移動」が社会を変える』において、社会のありようを次のように表現した。「人々は、今日かつてないほどの〈移動の途上〉にある¹⁾」と。しかし、未知のウイルスのパンデミックは社会の中心だった「人々の移動」を凍結させた。増え続ける観光客への対策をしている間に起こった新型コロナウイルス感染症による観光業の衰退。春の非現実的な静けさに包まれた京都は、まさに「誰も見たことがない京都」だった。閑散とした静かな京都に違和感を覚えるほど、京都は長い年月をかけて“観光都市”として大きな発展を遂げてきていたのだ。そんな中での新型コロナウイルスによる経済的な打撃はとて大きく、京都の観光地のみならず、全国的に閉業を余儀なくされた飲食店やお土産店の数は数えられないほどに膨れ上がった。経済の立て直しにはこれまで以上の時間を要することになるだろう。観光産業に過度な依存をし、観光に頼った経済発展は、一瞬にして崩れ去ってしまった。しかし、この崩壊を、京都が新たな都市へと発展し、生まれ変わるためのリセットの機会だと捉えることもできるのではないだろうか。ここ数年オーバーツーリズムに伴う様々な観光公害に悩まされていた京都にとって、今回のコロナ禍による観光客の減少は、観光都市としての在り方を考え直す良いチャンスになりうるのではないかと考えた。「持続可能な観光」とは、だれもが賛同する概念だが、具体的な在り方をめぐっての議論はまだ進んでいないように感じる。これをふまえ、本論では、「持続可能な観光都市」をテーマに、コロナ禍によってもたらされた危機は現代の観光にどのような意味があり、どのような観光が終わり、どのような観光が始まるのかを見定める。様々なことがオンラインでも実施可能であると分かった今、「観光は重要な産業である」と言い切れる強さが必要である。観光とは、現地に赴き、人と直接かかわることであり、移動と交流が本質²⁾だといえるだろう。その中で、オンラインを活用したバーチャル観光は本当に“観光”としての意味を成しているのだろうか。観光の本質と言われている“移動と交流”もなく、ただ“見ること”を“観光”と捉えることができるのか、この点については今後の課題となってくるだろう。本論で

は、「観光には人の移動と人との交流が伴うもの」だと定義して進めていく。アメリカの旅行専門誌である「コンデ・ナスト・トラベラー³」の読者投票による「世界で最も魅力的な都市」ランキングが先日発表された。驚くべきことに、京都が初めて1位に選ばれた⁴。この投票は2020年4月から6月にかけて行われたものであり、旅行が自由にできないこの状況下においても外国人の京都への興味は薄れていないということが明らかになった。つまり、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底するとともに、国際間の移動が自由に行えるようになれば、京都はまた以前のような活気ある観光都市に戻ることはできるのではないだろうか。そこで、今行うべきことは、観光客がいなくなった京都からどう立ち直るのか、そして同時に現在の課題を洗い出し、以前のような問題を繰り返し起こさないための対策を考えることである。

次章から、京都がどのようにして人気観光都市にまで発展したのかを江戸時代からの歴史と世界的な観光に対する考え方の変化、そして京都における近年の取り組みから探り、京都がこだわる「観光の質」の正体を明かす。また、京都観光総合調査⁵結果を分析し、日本人観光客と外国人観光客の動向についても調査する。その上で、新型コロナウイルスによって京都の観光業が受けている影響や現状を把握し、この先「持続可能な観光都市」に生まれ変わるために京都に求められる観光のかたちを見つけ出していく。

第1章 京都観光の歴史

京都の観光業はこの数年で急激な成長を遂げていた。もともとは観光都市として位置付けられていた都市ではなかった京都⁶がどのようにしてここまで成長することができたのだろうか。最大の理由として挙げられるのは、様々なTV番組や雑誌、さらには海外雑誌までもが京都を“観光都市”として取り上げるようになったことだろう。その結果、世界的に京都は“魅力的な街”、“あこがれの街”として定着するようになったのだと考えられる。実際に、アメリカの大手旅行雑誌である「Travel + Leisure⁷」における「世界の人気都市ランキング」で2014年⁸と2015年⁹の2年連続、1位に選ばれた。その他、同雑誌における2016年の「世界で最も文化的魅力の高い観光都市ランキング¹⁰」でも見事1位となり、「京都は日本古来の慣習や伝統文化が息づく日本の精神的な中心都市である¹¹」と講評されている。また、京都が“観光都市”として認識されているのは、平安建都以来の1200年もの歴史に培わ

れた伝統や文化、祭り、芸能、寺社寺院などの文化財や観光資源が豊富に残っている¹²からである。それと同時に、京都が「観光客数の獲得」という単なる「量の向上」へのこだわりを捨て、観光都市として「魅力的な街」、「あこがれの街」となることを目指す「質の向上」に目を向けたこともここまで発展できた理由の1つとして挙げることができるだろう。実際に、京都はいち早く観光産業の存在の大きさに気付き、後で述べる観光への取組を全国に先駆けて積極的に行った。本章では、江戸時代から昭和時代までの“観光”の位置付けや観光産業の発展、そして平成時代に入ってからからの京都の取り組みを把握する。

第1節 人気観光都市までの歴史

京都が“観光地”として認識され始めたのは、江戸時代中期頃¹³のことである。日本で最初に観光が始まったのは平安時代中期¹⁴であり、その時は巡礼の旅、信仰の旅、お参りが中心¹⁵だった。その頃京都の経済力は著しく低下しており、京都の商人たちは、大阪の経済力にはとても太刀打ちできないと自覚し始めた。そこで、本店機能を大阪に移し、主な商業の都市を大阪にした。その代わりに京都が力を入れ始めたのが観光業だった¹⁶。京都観光のためのガイドブックが充実し始めたのもこの頃からである。それまでの京都案内といえば、ほとんどが街中、つまり“洛中”のことしか書かれていなかった。次第に嵐山の美しさや東山の風景など、今日の観光地となる“洛外”についても書かれていくようになった。京都は、街の力である財力が衰えてきたころから観光業に目覚め、人気観光都市への発展を遂げたのだ。京都で観光ブームが始まったのは、江戸時代後期だと言われている¹⁷。これは、日本の観光が本格化してきた時と同時期¹⁸である。五街道や宿場などのインフラ整備が行われ、旅をしやすい環境になったからだと言われている。1872年（明治5年）には、第1回京都博覧会が開催され、1895年（明治28年）には、平安遷都1100年事業として平安神宮を建立し、その周辺部を岡崎公園として整備した。京都市の観光行政はこのあたりから始まった。そして、1927年（昭和2年）に京都駅前に施設案内所（観光案内所¹⁹）²⁰を設け、1930年（昭和5年）には全国に先駆けて市役所内に観光課を設置²¹するなど、積極的な観光復興の取組を展開してきた。これが、京都が観光都市へと発展する過程の始まりである。1956年（昭和31年）に制定された京都市市民憲章²²の中には、「わたくしたち京都市民は、旅行者をあたたくかくむかえましょう²³」と書かれており、観光客と共生する京都の姿を描いていることがわかる。高度経済成長期の中、観光客は増え続けた。1970年（昭和45年）の大阪万博を機に、入洛者数が前年の2,703万人から3,396万人へと増加している。次年度にあたる1971

年（昭和 46 年）に発表された「10 年後の京都の観光ビジョン」の中にはすでに「観光公害」という言葉が登場しており、1973 年（昭和 48 年）には当時の市長だった船橋氏²⁴が「マイカー観光拒否宣言²⁵」を提言するなど、京都市の観光政策はほかの都市に比べてかなり進んでいたことが分かる。

第 2 節 近年の取り組み

近年になると、日本では 2008 年（平成 20 年）に新しい省庁として「観光庁」が設立²⁶された。その後、「クール・ジャパン²⁷」、「観光立国²⁸」として、観光復興やインバウンド誘致²⁹に邁進した。もともとこの政策は、出国する日本人旅行者数に対して訪日する外国人旅行者数が少なすぎることが問題となり、取り組み始めたことだった。京都は、観光都市として今まで以上に発展するため、まずは具体的な数値にこだわり始めた。そこで、2010 年（平成 22 年）までの達成を目標とする「京都市観光客 5000 万人構想」を 2000 年（平成 12 年）に打ち出した。日本における観光庁の設立に先駆け、観光産業の必要性に気付いた京都は、観光戦略を早くから始めていた。当時の市長であった梶本氏³⁰は定例記者会見³¹で「2010 年に年間 5,000 万人の観光客が訪れる我が国を代表する『5000 万人観光都市』を実現する」と発言している。そこで、最初に手掛けた政策が「分散」戦略だった。「花灯路³²」というイベントの実施がこの政策の代表例である。これは、京都の観光名所である清水寺から高台寺、八坂神社へ抜ける観光客の導線に路地行灯を立て、夜の情緒あふれる雰囲気を楽しんでもらうためのイベントである。これだけだと観光客誘致としてはありきたりの事業のように思われるが、この事業の特徴はその実施時期だ。当時の京都で課題となっていたのが、観光客が京都を訪れる「時期の集中」である。京都を訪れる観光客は桜と紅葉の時期に集中し、夏と冬には観光客が来なかった。この「花灯路」の開催時期は 3 月と 12 月で、まさに“冬枯れ”の時期に設定されている。また、この事業が成功したため、8 月の“夏枯れ”の時期にも「京の七夕」という光のイルミネーションを始めた。これらの取り組みが功を奏し、観光客数の 5,000 万人達成目標を 2 年前倒しの 2008 年（平成 20 年）に達成³³した。以降は、「観光客」の「数」の確保ではなく、「観光スタイルの質」や「観光都市としての質」といった、「質」の向上を目指し始めた。当時からの市長である門川市長³⁴は、この達成について、これは、「市民や寺社、経済界などオール京都の取り組みの成果。見る観光から触れ合う観光へ、今まで以上に質を重視したい³⁵」と述べた。その後は、2010 年（平成 22 年）に「未来・京都観光復興計画 2010+5³⁶」という政策を打ち出し、世界が共感する観光都市を目指し

た。2014年（平成26年）からは、「京都市観光振興計画2020～世界があこがれる観光都市～³⁷」の策定により、これまで以上に「質」の向上を重視しつつ、感動の先にある「あこがれ」や「尊敬」を持ってもらえる京都の実現を目指している。京都には物質的なものづくり文化と精神的なものがたりづくり文化の両方を培ってきたという強みがあり、「日本の精神性を体現した上質な文化や奥深さを求めて、世界中から多くの方が京都を訪れる」というストーリーを描こうとしているといえるだろう。

第2章 京都の観光へのこだわり

本章では、これまでに述べてきた、京都が求めている「観光の質」とは一体何のことなのかを明らかにする。京都市産業観光局観光MICE推進室MICE戦略推進担当部長である三重野真代氏は、京都における「観光の質」を「旅行者の満足度を高めていくこと」、「現地消費額を増やしていくこと」、「市民生活と共存させていくこと」の3点だと述べている³⁸。京都における観光産業の変遷を考えるにあたって大きなポイントとなる「量より質」という方向性は、“京都特有の事情”から導かれたものだ。ここでいう“京都特有の事情”とは、受け入れキャパシティの観点から「これ以上、観光客を受け入れるべきなのか」という意見が出てきてしまったことである。つまり、京都でオーバーツーリズムが発生したことだ。オーバーツーリズムとは、「特定の観光地において、訪問客の著しい増加等が地域住民の生活や自然環境、景観等に対して受忍限度を超える負の影響をもたらしたり、観光客の満足度を著しく低下させるような状況³⁹」のことで、日本では、“観光公害”とも呼ばれている、過剰な混雑のことである。京都は年間観光客目標数を5,000万人と設定し、ただ単なる「数」にこだわって観光促進を図ったため、京都が本来耐えられる量以上の観光客が押し寄せてしまった。そこで京都市は2014年（平成26年）に次の目標として、外国人宿泊者数を年間300万人にすることを目指した。目標とする数値を訪問客数ではなく宿泊者数にすることによって、“あくまでも宿泊して京都市にお金を落としてもらおう”という質へのこだわりがここで見られる。門川市長は、“質の高い観光”を“触れ合う観光”とし、「体験型」、「滞在型」の観光の増加に力を入れている。また、2019年11月20日に行われた、「市民生活と調和した持続可能な観光都市」の実現に向けた今後の方向性について」の市長記者会見⁴⁰で、「本市では、2008年、私が所長に就任した早々ですが、観光客5000万人を達成して以降、量を求め

ないで質を高めて、量は結果として確保するという方針に、観光施策の大胆な転換を図ってまいりました。質の面では、京都観光の満足度を維持・向上していかうとした結果、例えば、平成 30 年の京都観光総合調査における京都観光の満足度は、日本人観光客 90.3%、外国人観光客は 97.6%という高い評価をいただいております。質の面ではいろいろありますが、日帰り観光より、宿泊観光。泊ってこそ京都という取り組みも一貫して進めております。その一方、近年の外国人観光客の急増等により、観光が市民生活にさまざまな影響を及ぼしているのも事実です。市民の皆様の暮らしを大事にしなければ、京都が京都でなくなる。市民の安心、安全、京都ならではの地域文化の継承を何よりも重視していかないといけない。こうした思いから、これまでの観光施策の成果を確認すると同時に、課題を今一度しっかりと全庁挙げて検証し、今後の施策に繋げていくため、本年（2019 年）5 月に「市民生活と調和した持続可能な観光都市」推進プロジェクトチームを立ち上げました。」と述べた。つまり、門川市長は、京都が持続可能な観光都市になるには、市民と観光客がお互いに気持ちよく過ごせる環境であるべきだと考えている。市民が多量の観光客に対して不満を抱えていたことは明白である。オーバーツーリズム（観光公害）への対策に加え、市民への配慮は京都が持続可能な観光都市であり続けるためには必要不可欠なことであり、京都はこれらへの対応も含めて「観光の質」と言っているのではないだろうか。

第 3 章 平成 30 年京都観光総合調査

第 1 節 調査結果

ここからは、京都市産業観光局から毎年発表される京都観光総合調査⁴¹の平成 30 年の結果をもとに京都における観光の現状を把握していく。平成 30 年の結果を参考にするのは、平成 31 年/令和元年からデータ算出方法が変更されたため、前年度と比較をして傾向を分析することが不可能になったからである。ここでの「観光客」の定義は次の通りである。「観光目的だけでなく、ビジネス、買物、イベント、観劇、スポーツ、友人知人訪問等の目的で入洛した人を指し、市外在住で通勤、通学以外の目的で入洛した人全て⁴²」。本節では、観光消費額、宿泊客数、外国人宿泊客数、観光客数、観光客満足度についての結果をそれぞれ分析していく。今回は、京都市観光客 5,000 万人構想を発表した平成 12 年、観光客数 5,000 万人を達成した平成 20 年、「travel + leisure」の人気ランキングで 2 年連続 1 位に選ばれ、

過去最高の観光客数を記録した平成 27 年、そして平成 30 年のデータをもとに比較分析を行い、その変動をグラフにまとめた。

第1項 観光消費額【資料 1】

観光消費額は、過去最高である 1 兆 3,082 億円を記録した。平成 28 年から 3 年連続で 1 兆円超えを記録している。平成 12 年が 4,399 億円であり、8 年後の平成 20 年には 6,562 億円まで増加した。ここでの増加は、単純に観光客数増加に伴う増加だと考えられる。その後、平成 27 年には、9,704 億円を記録している。ここから平成 30 年までの 3,378 億円の増加は、観光客数の増加は関係なく、宿泊客数の増加が主な理由であると考えられる。

第2項 宿泊客数【資料 2】

宿泊客数も過去最高である 1,582 万人にまで増加した。前年からは 25 万人の増加である。これには、宿泊施設の増加に力を入れたことが関係していると考えられる。平成 12 年は 942 万人、平成 20 年は 1,306 万人、平成 27 年は 1,362 万人であった。平成 20 年から平成 27 年にかけての増加が少ないのは、新型インフルエンザや東日本大震災の影響で、一時劇的な減少に見舞われたことが原因の 1 つとして考えられるだろう。

第3項 外国人宿泊客数【資料 3】

全体の宿泊客数 1,582 万人のうち、外国人の宿泊客数は、450 万人にまでのぼり、前年よりも 97 万人以上増加した。平成 12 年は 40 万人、平成 20 年は 94 万人、平成 27 年は 316 万人だった。全体の宿泊客数の増加が 25 万人だったのに対し、外国人の宿泊客数が 97 万人にまで増加したことには大きな意味があると考えられるだろう。しかし、同時に、「日本人の京都離れ」という問題が発生していることも示している。この「日本人の京都離れ」現象については、本章第 3 節で述べる。

第4項 観光客数【資料 4】

観光客数は 5,275 万人で、3 年連続の減少をした【資料 5】。平成 12 年は 4,051 万人、平成 20 年は 5,021 万人、平成 27 年は過去最高の 5,684 万人を記録していた。しかしここ 3 年間、徐々に観光客数が減少してきているのが現状である。それにも関わらず、観光消費額、宿泊客数（特に外国人宿泊客数）が増加しているのには大きな意味があると考えてよいだろう。この点についての分析は、本章第 2 節において行う。

第5項 観光客満足度

観光客へのアンケート調査を行う京都観光満足度調査⁴³では、日本人観光客、外国人

観光客ともに9割を超える満足度⁴⁴を維持している。日本人観光客は、90.3%、7点満点の満足度調査で平均値が5.8点であった。外国人観光客においては、満足度は97.6%と日本人観光客を超え、平均値も6.3点だった。このことから、観光客は京都観光に対して比較的高い評価をしていることが分かる。

第2節 平成30年の傾向分析

平成29年から平成30年の変化を比較すると、観光消費額と宿泊客数が大幅に増加したのにも関わらず、観光客数が減少⁴⁵していることが分かった。1年間で観光客数が5,362万人から5,275万人という87万人におよぶ減少、つまり実質的な「数」の減少が見られる。それにも関わらず、観光消費額については1,814億円増加していることから分かることは、宿泊客数の確保が京都の観光業に大きな役割を果たしているということである。これには、京都が目指す“宿泊観光”の推進対策が関係している。平成29年度の時点では3万室だった京都の宿泊施設は、平成30年度には4万6千室にまで増加⁴⁶し、それに伴い宿泊比率も過去最高の観光客数を記録した平成27年の24%から平成30年には30%に増加⁴⁷している。また、平成27年に観光客を対象に行われたアンケート調査において、京都に宿泊しなかった理由を「宿泊施設がなかったから」と答えた外国人観光客が15%だったのに対して、平成30年のアンケート調査では、9.4%まで減少⁴⁸したということは、宿泊施設の増加が宿泊比率を上げる点においてきちんと作用しているということだ。つまり、門川市長が目指した質の向上のための「泊ってこそ京都」の政策が実を結んだ。このことから、注目すべきは観光客数ではなく、“宿泊客数”であることが明らかになった。これらから分析すると、今後観光客数の復活が思わしくなくても、宿泊客数の確保が一定数できていれば、観光消費額の維持は可能であり、それに加えて実質的な「数」の減少に伴う混雑の解消、そして満足度の向上が望めるのではないかと推測できる。

第3節 日本人観光客の動向

外国人観光客に大人気になった京都では「日本人の京都離れ」の現象が起きていると言われている。平成29年から30年にかけて、日本人の日帰り観光客数は77万人減少、さらに宿泊客数の減少は72万人⁴⁹にのぼった。その中でも、平成30年は、特に大幅な減少が見られた。この年は大阪北部地震、西日本豪雨などの被害が原因となり、全国的に国内旅行をする日本人が前年に比べて12.5%減少⁵⁰した年であった。それにも関わらず、京都を訪れ

る観光客数は前年度比-3.2%にとどまっていたため、全国の減少と比較すると、京都での減少は比較的限定的であると言えるが、実際の観光客数に焦点を置くと、かなり大幅な減少が起きてしまっているのが事実である。満足度調査の結果を分析すると、やはり原因は街中や観光地の混雑にあるだろう。京都で起こっていたキャパオーバーによる混雑に嫌気がさし、京都を避けた旅行をする日本人が増加したのではないだろうか。また、日本人観光客の動向調査において注目すべき点は、入浴回数の増加に伴って人気観光地以外への訪問が増えているということである。このような日本人観光客の動向は、観光需要の分散化に寄与していると言える。よって、観光客の数にこだわらず、リピーターを確保することは、人気観光地で起こっている混雑の緩和につながると考えられ、これからの京都にとっては非常に重要な点となってくるだろう。

第4節 外国人観光客の動向

次に、外国人観光客の動向に注目する。訪日市場全体や関西国際空港の利用者と比較すると、京都は欧米からの観光客が占める割合が比較的高い⁵¹ことが分かった【資料6】。つまり、初訪日客が多い欧米諸国からの観光客は、訪問先として、京都を選ぶ傾向にあるということである。これは、京都がゴールデンルートに入っているからである。ゴールデンルートとは、「外国人観光客が東京、箱根、富士山、名古屋、京都、大阪などを巡る広域の観光周遊ルート⁵²」のことを指す。外国人にとって、京都は日本の文化的な中心地であるため、特に文化が異なる地域から訪れる観光客は「日本に行くなら京都に」という思いがあるのではないだろうか。しかし、それと同時に、アジア方面の旅行先として、タイと中国の人気が高い⁵³ことが分かる【資料7】。特にアメリカやヨーロッパの国などから、日本とタイ・中国を同じ“アジア”というくくりで分類されているのは、観光客の増加は期待できない。それらの地域との観光目的での“差別化”がこれからの京都の発展にとって重要なポイントとなってくる。また、2015年以降は、外国人観光客についても再訪日客の増加傾向がみられ、日本人観光客と同じように再訪日客は、中心地の観光地のみだけでなく、地方の観光地も周遊する傾向がある。つまり、観光客の分散化において、やはりリピーターを確保することは重要な点になるだろう。その中で、“京都”を拠点に（京都に宿泊して）周辺の地域を周遊してもらい、市内全体への経済効果を波及させるには、隣接する観光地との連携も重要になってくるだろう⁵⁴。

第4章 新型コロナウイルスとの直面

国連世界観光機構（UNWTO）によると、2020年、新型コロナウイルス感染症の影響で世界の96%の国々が海外旅行を制限した。90か国以上で国境を閉鎖、もしくは通過を制限し、44か国以上が感染国に滞在歴のある旅行者の入国を制限した。これは、世界が初めて経験する渡航制限だった。この規制が、今や世界GDP総額の10%以上を占める観光産業にどれだけの影響を与えたかは言うまでもない。

第1節 観光業への影響

2020年1月28日、奈良県の日本人バス運転手が新型コロナウイルスに感染したというニュースが報道された。中国からの団体旅行客を乗せて観光していたことによる、バス車内での濃厚接触が原因だと考えられている。「ついに日本にも。」そう感じた日本人は少なくなかったのではないだろうか。コロナ禍のそもそもの始まりは2020年1月だった。前年末から新型コロナウイルスの存在が噂されながらも、中国で人から人への感染が認められ、習近平国家主席が制圧を指示したのは1月20日のことだった。そして中国は1月27日から日本を含め、海外への団体旅行を中止し、同時に個人向けパッケージツアーの販売も禁止⁵⁵した。また、日本政府は1月31日、外国人の日本への渡航を制限する方針を発表した。これは、入国申請時から14日以内に湖北省に滞在歴のある外国人に対して当分の間入国を拒否するものだった。「風向きが大きく変わったのは2月17日のことだった⁵⁶」と語るのは、京都の中でも特に外国人観光客に人気のある旅館のマネージャーだ。その日以降、中国からはもちろん、様々な国や地域の予約客からキャンセルが入るようになったという。2月17日といえば、横浜港に停泊していたダイヤモンド・プリンセス号内で確認された感染者数が454人に達し、中国国外で確認された感染者数の総数を上回ったことがセンセーショナルに世界に報道された日であり、ASEAN加盟国で初めてタイの保健省が日本への渡航自粛を呼びかけた日である。この日を境に、東アジアで始まっていた「訪日忌避」の動きがさらに世界へと拡大し、国際社会に「日本は危険国」であるという認識が共有された。そして、各国から日本に対しての渡航制限がかけられ、訪日インバウンド需要は消滅した。京都も同様、外国人宿泊客数がほぼゼロとなった。しかし、この「空いている京都」、「外国人観光客のいない京都」はツイッターやインスタグラムで話題となり、普段であれば撮ることのできないよう

な「映える」写真が毎日のように共有された。京都はこの苦境を逆手に取り、例えば嵐山では、5つの商店街が合同で「スイてます嵐山」キャンペーンを開始した。「人間よりサルの方が多いか、久しぶり」などのキャッチフレーズで、近年減少傾向にあった日本人観光客の呼び戻しをはかった。その結果、2月と3月は外国人観光客がキャンセルした分を当日や宿泊日直前に予約してくる日本人観光客が埋めていた。第3章第3節で「日本人の京都離れ」について述べたが、その日本人観光客の「京都離れ」の理由は、日本人が京都に関心をなくしたからというわけではなかったということがこのコロナ禍によって明らかになったのだ。「機会があれば」と様子を伺っていた潜在的な京都のファンが「空いている京都」の噂を聞きつけて京都を訪れていた。そんな彼らが、苦境にあった京都観光のぎりぎりの生命線だった。近年のインバウンドブームの中ですっかり外国人観光客向けに塗り替えられたという苦言も多い京都だが、古都へのあこがれがまだ日本人の中に生きていたということだろう。これが京都ブランドの底力である。しかし、4月に入ると、新型コロナウイルスの感染が都市部で急速に拡大したことを受け、4月7日、7都道府県に対して「緊急事態宣言」が布かれ、京都は特別警戒都道府県に指定された。そして、ゴールデンウィーク中の感染拡大を防止するため、4月16日、全国に対して「緊急事態宣言」が発表された。途中で期間が延長され、京都は5月14日に解除となった。また、6月19日からは県をまたぐ移動も緩和された。現在はGo To Travelキャンペーンの影響で日本人客が戻りつつあるが、もちろん昨年の数字には及ばない。しかし、現状の需要は国内にしかないことを考えると、今は国内需要に目を向け、日本人観光客に響く価値の創作、提供が必要な時代になったといえるだろう。

第2節 京都の取り組み

今回のコロナショックが観光関連業者を苦しめているのは言うまでもない。そこで京都市は、ウィズコロナ時代における京都と外国人観光客の在り方を検討し、2020年7月に京都市観光協会（DMO KYOTO）が「消滅した観光需要を取り戻すためのロードマップ⁵⁷」

【資料8】を策定した。DMOとは、Destination Management/Marketing Organizationの略で、観光地域づくり法人のことである。つまり、地域の多様な関係者を巻き込みつつ、科学的アプローチを取り入れた観光地域づくりを行う舵取り役となる法人⁵⁸である。このロードマップでは、観光需要復興のための期間を4段階に分け、それぞれの時期で目標と対策の行動予定を定めている。第1段階は「国内観光の復興期」とし、Go To Travelキャン

ページ開始のもと、日本人の宿泊客数を月 10 万人にまで回復させること、そして海外情報拠点を通じた情報収集と発信の再開をすることを目標としている。まず、日本人観光客に焦点を当て、国内需要の回復を目指すことを第 1 の優先事項とした。第 2 段階では、「国内観光の隆盛期」とし、感染再発の懸念が払拭される時期における目標を定めている。具体的には、日本人の宿泊客数を月に 25 万人にまで回復すること、そして在日外国人に向けたプロモーションを開始することである。次の第 3 段階目は「アジア圏を中心とした国際観光の再開」、つまり、近距離圏からの国際観光が再開する時期としている。ここでは、日本人の宿泊客数を維持し、外国人の宿泊客数を月 10 万人にすること、そして海外メディアによる取材を支援、強化することを目標としている。最後の第 4 段階目では、「全世界に需要が復活」、ワクチンの普及により騒動が沈静化する時期としている。そしてここでは、日本人の宿泊客数を維持し、外国人の宿泊客数を月 20 万人にまで増加させること、それに加えて、今まで抱えていたオーバーツーリズムや観光公害がまた起きてしまわないよう対策を講じながら観光の復興に力を入れていくことを目標として定めている。ここで京都が「観光客数」ではなく「宿泊客数」を基準として目標を定めているのは、前述した、京都の「質へのこだわり」が影響しているのではないかと考えられる。また、それに加えて、新型コロナウイルス対策として、京都市は人の動きを把握しておく必要がある。例えば、人気観光地における時間別の込み具合を把握しておくことは、今の状況で求められている“密”を避けた観光には必須事項である。必ずしもロードマップで描いた通りには進まない可能性はあるが、目安や目標を作ることは、これからどう進んでいくべきかの検討を可能にするため、観光業界の人たちが前向きに進んでいける。それを促すことが DMO KYOTO としてできることだと考え、今回の策定に至ったという⁵⁹。DMO KYOTO は他にも新型コロナウイルス感染防止対策をしながら観光を楽しんでもらえるように様々な取り組みを始めている。まず、より一層「安心・安全」な京都観光を実現するための新型コロナウイルス感染症対策宣言（ガイドライン）を作成、そして同ガイドラインに基づく取り組みを推進する事業所に対して、「ガイドライン推進宣言事業所ステッカー⁶⁰」【資料 9】を配布した。また、感染症対策の設備投資を対象とした補助金の支給も行っている。それに加え、ウィズコロナ時代に、京都で安心、安全かつ快適に過ごすために、一人ひとりが大切にすべき「たしなみ」を日本たばこ産業株式会社とともに考案し、「京都まちけっと⁶¹（京都の「まち」と「エチケット」を組み合わせた造語）」として発信している。

第5章 京都に求められる観光のかたち

本章では、ここまでの調査結果とその分析をもとに、京都に求められる観光のかたちを見つけていく。京都はこれから、新しくそして今まで以上に魅力のある都市に生まれ変わる必要がある。新型コロナウイルスによる影響を生まれ変わるためのチャンスだと捉え、さらなる発展を目指していきたい。ここからは、「リピーター確保」をキーワードとし、国内需要、インバウンド需要共に対応した、一時的ではない“持続可能”な、次世代に続く観光都市のかたちを見つけていく。

「リピーター確保」の重要性は、第3章の日本人観光客、外国人観光客の動向調査の部分で述べた通りである。そしてこのリピーターの確保について、興味深い研究結果⁶²があった。それは、「リピーター化は3回目が勝負である」ということだ。観光客の動向を調査すると、1、2回目の滞在日数に大きな差はないが、3回目の訪問客から、長期滞在化が始まっている傾向があることが分かった。長期滞在をするということは、それだけ京都にお金を落としてくれることとなり、経済が動く。これが観光消費額の増加につながる。また、初来訪者は、寺社仏閣や歴史的建造物、自然、景観、街並みのような、“視覚的”なものを求めて観光に訪れる傾向がある。これは、彼らが持つ“京都のイメージ”をそのまま追求するためである。それに対してリピーターには、文化や歴史、おもてなし、食事など、体験を伴う“抽象的”な観光資源が求められており、より複雑な価値に対して期待を抱いていることも分かった。つまり、初来訪者とリピーターでは、感動してもらうために訴求する要素が異なるということである。リピーターを確保するためには、魅力的で、かつもう一度訪れたいくなるような有名観光地や観光資源を増やし続け、再来訪回数を増やすことが必要となってくる。それには、初訪日時に、「今回の旅では周りきれなかったからまた来よう」や、「次は〇〇にもいってみよう」という感情を促進することが重要になってくる。そして、そのあとはリピーターに向けた「質」の高い、体験を伴う観光を提供し、満足してもらう。“文化的な体験ができる”という点を京都観光の強みとすれば、さまざまなサービスの提供を発展させていけるのではないだろうか。多くの観光客にとって、京都は“憧れ”の対象である。京都だから体験できる本場での“ホンモノ”を感じてもらい、観光客に京都文化を魅了してもらおう。これは、他のアジア圏内の観光地との差別化にも繋がってくると考えられる。また、富裕層が宿泊以外でお金を消費したくなるようなサービスを提供する点も重要である。現在の状況として

は、ビジネスクラス、ファーストクラスを利用して訪れる所得水準の高い観光客は、他の観光客に比べて消費単価が高い傾向にあった。しかし、日帰り客を含めて、宿泊費以外の消費単価で分析を行うと、その傾向は見られなくなってしまった。つまり、所得が高い人ほど宿泊費は高くなるが、買い物代、飲食代は高くなり、他の観光客と大きな差があるわけではなかった。そんな富裕層が消費したくなるような物販や飲食サービスの開発を強化することも京都に求められているのではないか。

また、このリピーター確保に付随して目をつけなければならない点が「地域住民と観光客の共存」と「グローバル化への対応」だと考える。持続可能な観光都市の実現には、住民と観光客両者に利点がないと難しいというのは第2章の「観光の質」で述べた通りである。コロナ禍以前の京都の状況だと、圧倒的に住民に対する負担が大きすぎるのは言うまでもない。市バスの混雑問題、ゴミの環境問題、民泊の急増による夜間の騒音問題、歩行者の広がりによる交通問題を始めとするマナーや法令違反はごく一部にすぎず、嵐山の竹林で外国語による落書きが相次いだことや祇園での不法侵入、無断撮影、芸舞妓への接触が絶えないことなど、地域住民と直接的なトラブルに繋がりがねない様々な問題を抱えていた。もちろん、これらの問題に対応する際に費用を負担するのは京都市である。そのような状態が続くと、住民や京都市側が悲鳴を上げてしまう可能性があるだろう。そうなれば、せっかく発展した京都の観光業は廃れ、“あこがれの観光都市”というイメージを築き上げてきた今までの努力も水の泡となってしまう。そのような破壊を避けるためにも、今しっかりとした体制を整えていくべきである。観光客が少ない今のうちにインフラ整備を徹底し、国内需要はもちろん、インバウンドが再生したときにも同じことを繰り返してしまわない様に備えておく必要があるだろう。持続可能な観光都市になるために守るべきものは地域住民である。つまり、彼らが、観光客が原因で“京都という都市は住みにくい街になった”、と感じないようにしなければならない。観光客と観光従事者と地域コミュニティの信頼関係を構築し、共存できる環境を追い求め、発展していくべきだと考える。それに加え、京都のように、外国人観光客に人気のある観光地なら、グローバル都市、国際観光都市として発展していくことは必要不可欠である。外国人観光客による満足度は97.6%と非常に高いが、これは同時に、残りの2.4%の観光客が満足した京都観光ができていないということを示している。満足度調査結果を分析すると、外国人観光客が京都に対して不満を持っている点として上位にあげられているのが、“言語が通じない”ことだった。これに対して京都は、車内アナウンスや観光地の看板・案内・パンフレットなどに複数の言語対応を始めた。しかし、紙媒体やアナウン

スが充実することは言語が通じることになるのだろうか。そのような対策がなされ始めた後の外国人観光客を見ている、パックスツアーなどを通してツアーガイドを雇うことで言語の壁に対応している人が多いように感じる。外見的には他言語対応の対策をおこなっているが、放送されていることや書いてあること以外の情報のアクセスはいまだに難しい状況であることに変わりはない。観光従事者全員が日本語以外の言語を習得するべきだというわけではないが、これからも外国人観光客を受け入れていく国際的な観光都市になる上で、生の言語対応は必須の事項になってくるのではないか。また、このコロナウイルスの影響で、インバウンドが再生した後も、しばらくはツアーを組むよりも個人的な旅行として京都を訪れる人が増えてくると感じる。そうなれば、人と人のコミュニケーションが今まで以上に必要になり、それが満足度にも大きく関わってくるようになるだろう。多言語化が充実すれば、観光客も快適に京都観光を楽しむことが出来るのではないかと考える。それに加えて京都の観光従事者側も、伝えたいことを自分の言葉でしっかり表現することができれば、今までよりも気持ちよく観光客を受け入れることができ、それが1点目の共存しやすい環境を作ることに繋がるのではないだろうか。

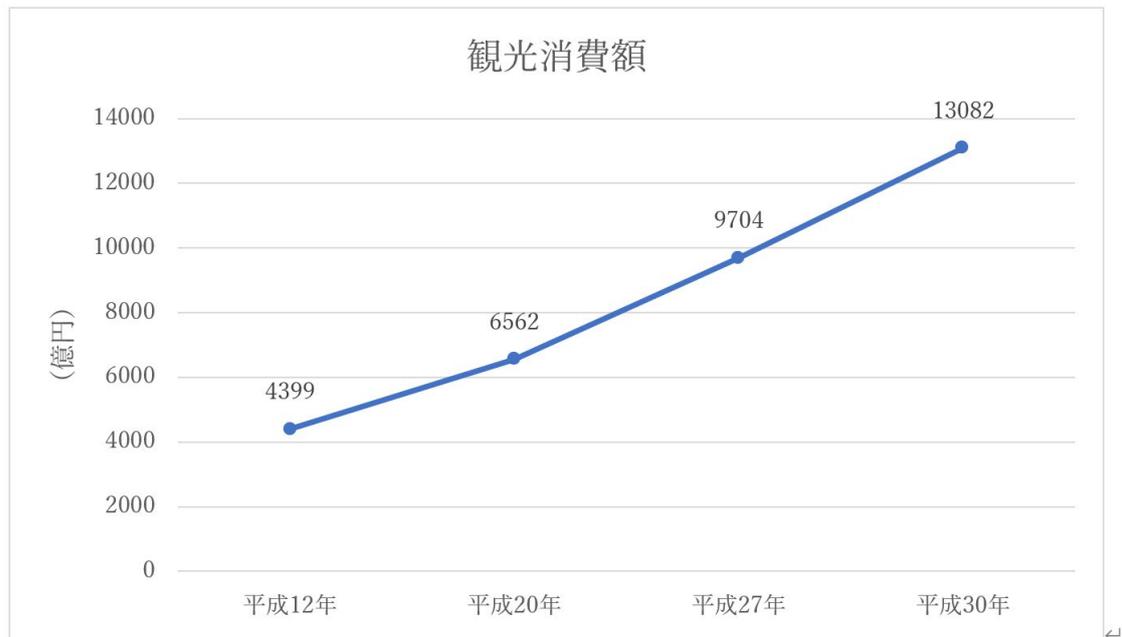
ここからは、リピーターを増やすことに焦点を置き、今後の京都の在り方を考えていく。リピーターを確保することは、つまり「京都のヘビーユーザー」を作ることである。観光地は、その地のファンによって支えられている。そのファンは、観光のために現地を訪れ、その街の魅力に気付き、感動することで生まれる。序章で定義したように、観光には人々の交流が伴うものだとなれば、観光地のブランド品、歴史的な街並み、そして、その魅力的な土地に暮らす人々との関わりによってリピーターは増えていく。そのリピーターは、地域の価値を評価し、繰り返し訪れることで、“観光客”という厳しい視線で批評を行う。観光地における満足度調査がその例だ。我々は、この厳しい視線を活用することで、よりよい環境を作っていくことができるのである。外部からの目線、つまり“観光客からの評価”が観光地として生き残れるかの鍵になってくる。下手に観光プロモーションを行う必要はない。京都は、観光客数を増やすためにこれまで様々なプロモーションを行ってきた。この下手なプロモーションこそが公害の原因であり、過去の失敗の根本的な要因だったのだ。しかし、これからの国内需要とインバウンド需要を再生させるためにまた様々な取り組みを始めようとしている。観光客の制御すらできなかった京都が新たな観光のプロモーションをしてはいけない。今求めているのはあくまでも、初来訪客ではなく「リピーター」なのだ。京都は、過去の観光客が再訪したくなるようなまちづくりを徹底して行うべきなのではないか。その

ためには、いつ来ても街が新しく生まれ変わっている、だからまた来たくなるといった、常に新しい生活文化を生み出していなければならない。“リピーターが喜んで再訪したくなる京都”を育てることが求められている。観光客が京都に「観光の質」を求めているように、京都も「京都を訪れる観光客の質」を求める時代が来ても良いのではないか。観光とは、異文化との交流を通じて自らを革新し、双方の文化を変容、発展させること⁶³である。それを通して、観光地の創造性が生まれ、多様な観光の未来を描くことになるのではないだろうか。

終章

「京都から観光客がいなくなる」これは、誰も予想していなかった事態である。本論では、この状況において、観光都市として生きてきた京都はどう生まれ変わるべきなのかに焦点を当てて論じてきた。京都がこだわる「質」の正体を追求し、京都がこれから持続可能な観光都市として発展していくためには何が必要なのかをこれまでの調査結果から分析した。そこで、「地域住民と観光客の共存」と「グローバル化への対応」に着目した上で、「リピーターの確保」に焦点をおいた新しい京都のあるべき姿を提言した。日本人観光客と外国人観光客の動向調査の結果、“リピーターを確保すること”がこれからの観光の発展につながるということが明らかになり、今の状況での国内需要を復活させる時代、そして今後のインバウンド再生の時代においても「リピーター」の存在は大きな意味を持つと考えたからだ。新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる世界的な渡航制限前は、いつ京都がオーバーツーリズムによって環境面、文化面、精神面ともに破壊するか分からない状態だった。このコロナ禍が、オーバーツーリズムでパンクしかけていた京都を救ってくれた。今までのような観光業に依存した経済発展は持続可能な観光都市には通用しない。京都は人気観光都市になろうと下手なプロモーションを行ったことで本来抱えきれないキャパシティを超えた観光客が訪れてしまうこととなり、崩壊しかけたのだ。今回明らかになった京都の課題は、「京都がみんなに好かれる観光地を目指した」ことにあると考えられる。これからは、あくまでもリピーターを確保することを重視し、持続可能な観光都市を実現させていくことが今の京都には求められているのではないだろうか。

資料



【資料 1：観光消費額の推移（京都観光総合調査より作成）】



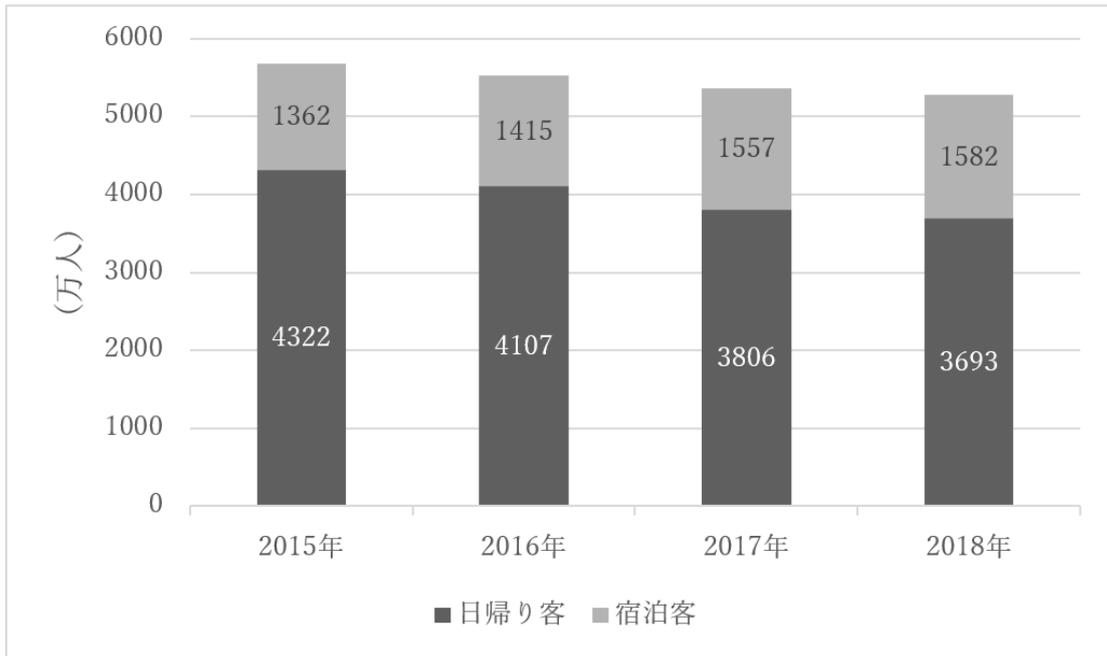
【資料 2：宿泊客数の推移（京都観光総合調査より作成）】



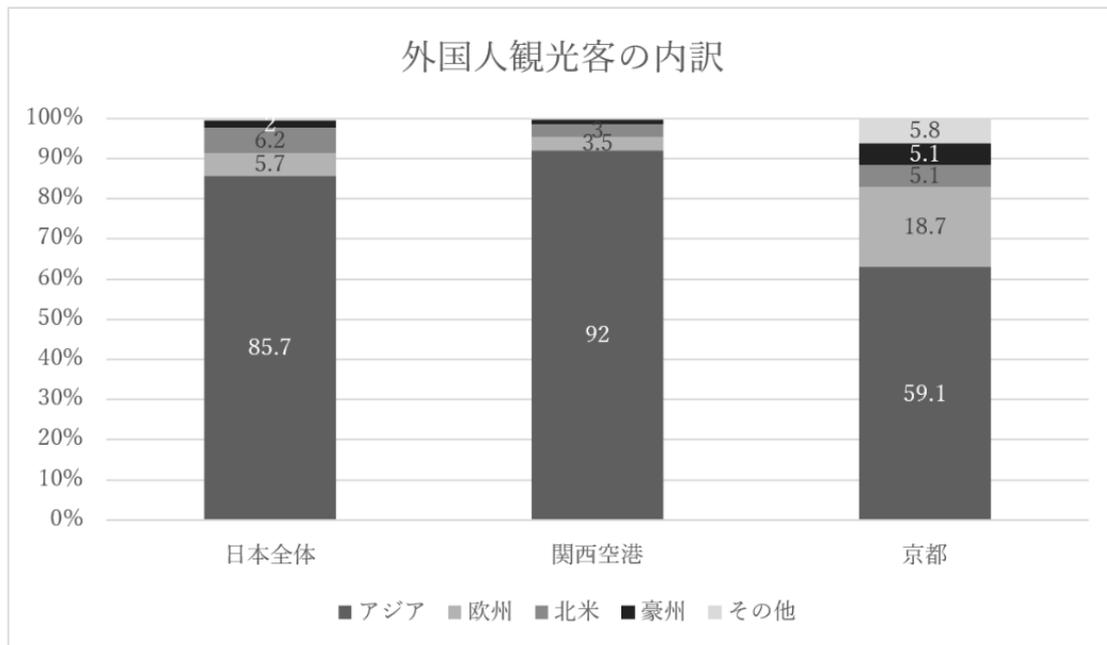
【資料 3：外国人宿泊客数の推移（京都観光総合調査より作成）】



【資料 4：観光客数の推移（京都観光総合調査より作成）】



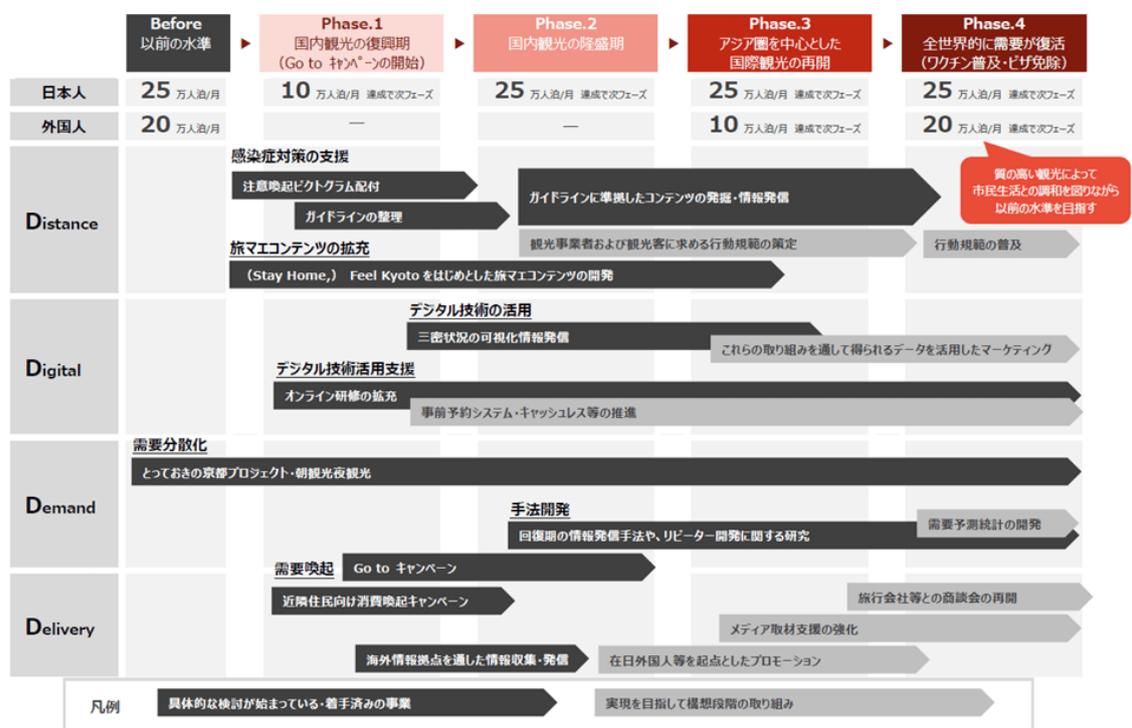
【資料 5：観光客数の推移（平成 27 年から平成 30 年）（京都観光総合調査より作成）】



【資料 6：訪日外国人観光客の内訳（平成 30 年京都観光総合調査より作成）】

	タイ	中国	日本	シンガポール
イギリス	22%	14%	7%	11%
フランス	25%	18%	9%	6%
ドイツ	27%	20%	6%	11%
イタリア	23%	24%	11%	7%
スペイン	22%	20%	12%	6%
アメリカ	10%	24%	13%	5%
カナダ	9%	31%	11%	4%
オーストラリア	13%	11%	7%	17%

【資料7:外国人観光客の国外旅行先(JNTO 訪日旅行データハンドブック 2018 より作成)】



【資料8:ウィズコロナ時代への適応を目指した京都観光における事業展開(ロードマップ)について (京都市観光協会より)】



【資料 9: ガイドライン推進宣言事業所ステッカー(京都市公式サイト京都市情報館より)】

注

- ¹ アンソニー・エリオット、ジョン・アーリ著 遠藤英樹監督訳『モバイル・ライブズ 「移動」が社会を変える』2016.11、ミネルヴァ書房。
- ² 寺崎竜雄「現場に学ぶ「持続可能な観光の本質」」、『観光文化』2020.8、日本交通公社。
- ³ 1987年にアメリカのコンデナスト社から旅行情報の専門誌として創刊され、現在はイギリスやアメリカ、イタリア版も発行されている。ビジネス、観光両方の旅行者をターゲットにした紙面づくりをおこなっている。
- ⁴ 京都市公式サイト 京都市情報館 お知らせ 『アメリカの旅行雑誌「コンデ・ナスト・トラベラー」で京都が世界第1位の人気都市に選ばれました』
<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000275856.html>(2020年10月26日最終閲覧)
- ⁵ 京都市が観光客数やその満足度、外国人観光客の動向等を把握するために行っているもの。1970年より広く活用されてきた。
- ⁶ 井上章一、鹿島茂『京都、パリ この美しくもイケズな街』2018.9、プレジデント社。
- ⁷ 1971年創刊のアメリカを代表する旅行雑誌。
- ⁸ Travel + Leisure World's Best Award / Top Winners 2014
<https://www.travelandleisure.com/worlds-best-cities-2014-winners-list>
(2020年5月7日最終閲覧)
- ⁹ Travel + Leisure World's Top 10 Cities 2015
<https://www.travelandleisure.com/worlds-best/worlds-best-cities>
(2020年5月7日最終閲覧)
- ¹⁰ World's Best Cities for Culture 2016
<https://www.travelandleisure.com/culture-design/best-cities-for-culture>
(2020年5月7日最終閲覧)
- ¹¹ 京都市観光産業局 お知らせ 『アメリカの旅行雑誌「トラベル・アンド・レジャー」で京都が世界で最も文化的魅力の高い観光都市として紹介されました』
<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/cmsfiles/contents/0000213/213227/oshirase.pdf>
(2020年3月26日最終閲覧)
- ¹² 井口貢、池上敦編著「京都・観光文化への招待」内 上田誠『京都観光の現状—5000万人観光都市と政策ネットワーク』173頁、2012.4、ミネルヴァ書房。
- ¹³ 前掲注6
- ¹⁴ 前田勇（立教大学観光学部教授）「観光はいつうまれたか」
- ¹⁵ 和歌山県観光連盟 わかやま観光情報

www.wakayama-kanko.or.jp/worldheritage/kumanokodo-isegi/index.html

(2020年7月26日最終閲覧)

¹⁶ 前掲6

¹⁷ 鳥居本幸代『京都人のたしなみ』、2019.2、春秋社。

¹⁸ 前掲注6

¹⁹ 村山祥栄「京都が観光で減びる日 日本を襲うオーバーツーリズムの脅威」2019.12、ワニブックス。

²⁰ 京都市 歴史都市・京都創生策Ⅱ<観光編>

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/cmsfiles/contents/0000035/35089/kanko.pdf>

(2019年12月7日最終閲覧)

²¹ 前掲注17

²² 京都市民が他人に迷惑をかけないという自覚に立って、お互いに反省し、自分の行動を規律しようとするもの。国際文化観光都市の市民である誇りをもって、京都を美しく豊かにするために市民の守るべき規範として1956年に定められた。

²³ 前掲注6

²⁴ 船橋求己氏。就任期間は昭和46年2月26日から昭和56年7月26日。

²⁵ 1973年11月当時の船橋市長が提言したもの。京都で1960年代後半からマイカー観光客が増え、それまでに経験したことのない騒音や排気ガスに加えて交通事故が多発した。自然環境破壊が懸念され、社寺等の駐車場整備が文化遺産破壊にも繋がるとして、マイカーの利用抑制を行った。

²⁶ 中井治郎『パンクする京都 オーバーツーリズムと戦う観光都市』、2019.10、星海社。

²⁷ 「かっこいい日本」、「感じがいい日本」という意味を表す語。語源は、1997年にイギリス首相のブレアがイギリスの産業界の創造力強化を促進したクールブリタニア宣言にあるという説もある。日本の創造的な産業やサービスが海外で高く評価されている現象のkと。アニメや漫画、コンピューターゲーム、芸能などのエンターテインメント、ファッションやキャラクター商品、食文化、伝統工芸、宅配便、旅館などが挙げられる。日本政府は2010年(平成22年)6月に経済産業省内にクール・ジャパン室を設置した。海外に進出する企業の支援なども行っている。

²⁸ 国内の特色ある自然環境、都市光景、美術館・博物館等を整備して国内外の観光客を誘い込み、人々の落とすお金を国の経済を支える基盤の一つにすること。

²⁹ 前掲注6

³⁰ 榊本頼兼氏。就任期間は平成8年2月26日から平成20年2月24日。

³¹ 京都市公式サイト 京都市情報館 榊本市長記者会見(2000年1月17日)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000013361.html>

(2020年3月26日最終閲覧)

³² 京都・花灯路 <https://hanatouro.kyoto.travel/index.html> (2020年10月25日最終閲覧)

³³ 京都市産業観光局観光部観光企画課 市長記者会見資料 「入洛観光客数5000万人達成について」

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/cmsfiles/contents/0000062/62177/20090512-1.pdf>

(2020年3月26日最終閲覧)

³⁴ 門川大作氏。現京都市長。平成20年2月25日より就任。

³⁵ 京都新聞 (2009年5月12日)

³⁶ 京都市公式サイト 京都市情報館 「「未来・京都観光復興計画2010+5」及び「京都市MICE戦略」の策定について」

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000098836.html>

(2020年3月26日最終閲覧)

³⁷ 京都市公式サイト 京都市情報館 「「京都観光振興計画2020」及び「京都市MICE戦略2020」」

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000186495.html>

(2020年3月26日最終閲覧)

³⁸ Guest House Communications 「京都市の観光行政を戦略部長に聞いてきた、「量より質」への転換で解決すべき5つの課題」

<https://ghc-111.jp/news/5.html>

(2020年3月26日最終閲覧)

³⁹ JTB総合研究所 観光用語集

⁴⁰ 京都市公式サイト 京都市情報館 門川市長記者会見 (2019年11月20日)

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000260053.html>

(2020年3月26日最終閲覧)

⁴¹ 京都市産業観光局 『平成30年 京都観光総合調査結果のポイント』

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/cmsfiles/contents/0000254/254268/gaiyoban.pdf>

(2019年12月7日最終閲覧)

42 京都市産業観光局 『京都観光総合調査 平成 30 年』

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/cmsfiles/contents/0000254/254268/30tyosa.pdf>

(2019 年 12 月 7 日最終閲覧)

43 京都観光協会 データから見る京都観光の現状と満足度の実態

<https://www.kyokanko.or.jp/report/20190902/>

(2020 年 3 月 26 日最終閲覧)

44 ここでの満足度とは、自身の京都観光について「大変満足」、「満足」、「やや満足」と答えた人の割合を指す。

45 京都市産業観光局 『平成 29 年 京都観光総合調査結果【概要】』

<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/cmsfiles/contents/0000240/240130/29gaiyou.pdf>

(2019 年 7 月 18 日最終閲覧)

46 前掲注 42

47 前掲注 42

48 前掲注 42

49 前掲注 41

50 京都市観光協会 『京都観光総合調査等を活用した 京都観光の最新動向詳細分析結果について』

<https://www.kyokanko.or.jp/news/20190725/>

https://www.kyokanko.or.jp/wp/wpcontent/uploads/kyoto_tourism_survey_20190725.pdf

(2019 年 12 月 5 日最終閲覧)

51 前掲注 50

52 ジャパン・ワールド・リンク インバウンド用語

<https://japanworldlink.jp/inbound-words/golden-route/>

(2019 年 12 月 5 日最終閲覧)

53 前掲注 50

54 国土交通省観光庁 『【訪日外国人消費動向調査】 2019 年 4-6 月期の全国調査結果（1 次速報）の概要』

<http://www.mlit.go.jp/commorn/001299606.pdf>

(2019 年 12 月 7 日最終閲覧)

- ⁵⁵ 中井治郎『観光は減びない 99.9%減からの復活が京都から始まる』2020.10、星海社.
- ⁵⁶ 前掲注 55
- ⁵⁷ 京都市観光協会 ウィズコロナ時代への適応を目指した京都観光における事業展開（ロードマップ）について <https://www.kyokanko.or.jp/news/20200714/>（2020年10月18日最終閲覧）
- ⁵⁸ 国土交通省 観光庁ホームページ
https://www.mlit.go.jp/kankocho/page04_000048.html（2020年11月9日最終閲覧）
- ⁵⁹ 前掲注 55
- ⁶⁰ 京都市公式サイト 京都市情報館 「ガイドライン推進宣言事業所ステッカー」交付について <https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000273149.html>（2020年10月18日最終閲覧）
- ⁶¹ 京都観光オフィシャルサイト 京都まちけっと
<https://ja.kyoto.travel/withcorona/newmanner/>（2020年10月18日最終閲覧）
- ⁶² 京都観光協会 リピーター化は3回目が勝負？京都における外国人観光客の「質」向上につながる「おもてなし戦略」<https://www.kyokanko.or.jp/report/column20180831/>
（2020年3月26日最終閲覧）
- ⁶³ 宗田好史『インバウンド再生 コロナ後の観光政策をイタリアと京都から考える』、2020.10、学芸出版社.

第1章 はじめに

第1節 研究目的と先行研究

漬物とは、野菜を塩または味噌等に漬けてならした食品である。かつては、米や雑穀の飯を食べるために必須の副食であり、同時に、野菜の保存法として極めて優れた加工食品であった¹⁾。

その中でも、山紫水明の地で豊かな地下水に恵まれた京都では、多種多様な野菜が生まれ、京漬物と呼ばれる独自の漬物文化が発展した²⁾。現在では、京漬物は「和菓子和並んで、京土産の人気を二分する」³⁾と言われるほど、京都の代表的なお土産の1つとして人気を得ている。また、京都吟味百撰にも選定されており、重要な京ブランドの1つとも言える。

このように、京漬物は副食や保存食ではなく、贈答用といった嗜好品としての価値を築いている。

京都の食文化に対するイメージ調査について述べた先行研究は、饗庭、永岡、冨田、南出、大谷(2004)が挙げられる。京都府内外の人や京料理に携わっている料理人へのアンケート調査から分析し、現代の人々が持っている京料理のイメージと京料理の魅力について考察した。その結果、京料理のイメージは料理そのものではなく、盛りつけ、季節感、景観なども含めた華やかさや高貴さ等の情緒性が感じられ、それに対する嗜好性もあることが示唆された。また、京料理に携わる人は「京」というブランドイメージに頼りすぎることなく、京料理に受け継がれてきた伝統文化の再認識が必要であると主張し、京料理は食べる側の京の伝統文化に対するイメージが先行した料理であることが明らかとなった⁴⁾。

しかし、京都のガイドブック等には京都の代表的な食文化として、京漬物が挙げられているのにも関わらず、京漬物に対する研究は、製造工程に関する研究や成分に関する研究が多く、京漬物に対する認識やイメージについての研究は管見の限りみられない。

そこで、本稿では聞き取り調査とアンケート調査を行い、実際に京漬物はどういう認識をもたれて存在しているのかを製造業者と消費者目線から明らかにしていく。

まずは、なぜ京都で漬物文化が開花し、京ブランドの1つとして価値を築いてきたのか、

歴史を振り返って明らかにしていく。その歴史を踏まえ、聞き取り調査とアンケート調査を行い、京漬物に対する認識を明らかにし、今後京漬物はどのように存在していくべきなのかを考察する。

第2節 研究方法

上記の研究目的を達成する方法として、京漬物に関する文献・資料の調査と分析、及び京漬物の製造業者への聞き取り調査と消費者へのアンケート調査を実施した。

まず、漬物の歴史を振り返り、京都で漬物文化が開花し、現在もなお漬物のブランドとして残っているのかを明らかにする。

そして、聞き取り調査については、100年以上の歴史を有する老舗企業の「株式会社京都なり田」、「有限会社田中漬物店」と、1962年(昭和37年)に創業した「株式会社もり」の経営者及び従業員に聞き取りを行い、京漬物に対してどのような認識を持って経営をしているのかを明らかにする。

また、アンケート調査については10代から70代の男女60人に、京漬物のイメージについてのアンケートを行い、消費者目線での年代差等における京漬物に対する認識の比較調査を実施した。

第3節 研究対象地域

研究対象は、京都府京都市北区に本店を構える「株式会社京都なり田」と、東山区に構える「有限会社田中漬物店」、右京区に構える「株式会社もり」の3店舗とする。図1中の青・赤・黒い点は、京都なり田本店・田中漬物店・京つけものもり本店の位置を示す。各店舗の詳細は、第3章の第2節で述べる。

京都市の市街地は、794年に日本の首都であった平安京以来の碁盤目状の都市構造を特徴としており⁵⁾、平安時代から江戸時代まで1000年の長きにわたり都であり続けたため、千年の都とも呼ばれている⁶⁾。

市街地の周辺部では、壬生菜や聖護院大根など特色のある京野菜などの農業生産が営まれ、北山では全国的にも有名な磨き丸太の生産等、個性的な農林業が営まれている⁷⁾。

北区の上賀茂の地域は、京の三大漬物のすぐきの原料であるすぐき菜の栽培地域であり、地元住民の口伝のみによって栽培が受け継がれてきた⁸⁾。また、左京区の大原の地域は、しば漬の原料である赤紫蘇の産地である。大原は、山に囲まれた地形のため、別の種

の花粉が飛来しないことから、日本で一番紫蘇の純粋種に近いと言われている。また、盆地特有の気候である朝露の湿気が、赤紫蘇を育てるのに適しているため、しば漬の名産地としてあり続けている⁹⁾。左京区の聖護院の地域は、千枚漬の原料である聖護院かぶらの栽培発祥の地である。しかし現在は、京都府亀岡市や南丹市日吉町等が聖護院かぶらの主な産地となっている¹⁰⁾(図2)。

第2章 京漬物とは

第1節 京漬物の誕生

京漬物とは、京都府産の野菜を京都の伝統的手法、また京都で育まれた感性を漬物として商品にしたものである¹¹⁾。

漬物は、素材を塩や味噌といった調味料、あるいは糠等を複合的に用いた調味液に漬け込んだ食品を指し、米食を主とした日本の食卓にとって重要な副食の1つとして存在している¹²⁾。

元祖は海水漬けとされており、食塩を利用することにより野菜を長期に保存することが可能となることから、乾物等と同様に最も古い保存食品と言われている¹³⁾。京つけもの西利の記述によると、平安時代の宮中の儀式や宴に多くの漬物が使われていたといわれており、春の漬物が14種類、秋の漬物が35種類あったとされ、瓜などの野菜から野草や山菜まで、様々な種類に富んでいた¹⁴⁾。室町時代の頃には、「香の物」という言葉が、京の都に発し、やがて江戸に広がり、江戸市民の漬物の名として広く愛用されていた。その後、江戸時代に入ると嗜好に応じて、漬物の調味や刻み方などに工夫をこらし、漬物は今日のように多様化した。当時の香の物は、主要な副食の1つであり、漬物のない食卓は考えられないほど存在感のあるものであった。京都や江戸、大阪では「香の物屋」が繁盛し、寺社の縁日には地方の名産や季節の漬物が並べられていた¹⁵⁾。その中でも、「京もの」が特に人気であり、壬生産の水菜漬け、上賀茂のすぐき漬の人気が高く、江戸中に知れ渡っていたと言われており¹⁶⁾、漬物が進物用としても商い対象になっていたとも言われている¹⁷⁾。

京都が漬物の名産地になり得た理由の1つは、「京の床冷え」といわれる冬の寒さにあると考えられている¹⁸⁾。周囲を山に囲まれた盆地という土地柄は、海が遠く海産物の入手

が厳しいことから野菜作りが発達し、保存食を工夫する文化が生まれた。また、内陸盆地ならではの、冬は寒さが厳しく夏は暑いという気候も、漬物の発酵に適していたとも考えられている¹⁹⁾。

更に京都は、伝統野菜をはじめとする京野菜の種類が豊富であることから、漬物の種類も多様である。京都は、かつて日本の首都であったため、貴族文化の中心にあった。その為、外国の文化や新しい作物を受け入れる窓口としても機能していた。外国からの使節によって、高品質な野菜の種や高い技術などが集まりやすい環境であったことから、多種多様な野菜が現在まで受け継がれており²⁰⁾、現在京都の各地で行われている漬物は40種類以上にのぼっている²¹⁾。このような理由から、京都で漬物が徐々に発展していき、「京漬物」として現在まで受け継がれている。

第2節 京の三大漬物

漬物は、漬液や漬床などによって、塩漬け、醤油漬け、味噌漬け、粕漬け、麴漬け、酢漬け、糠漬け、辛子漬け、もろみ漬け、その他の漬物の10種類に分類されている。さらに、これらの大分類から原料野菜や、刻み方、調味などによって多様化した各種漬物に分けられる²²⁾。その中でも、京都には乳酸菌発酵で酸味を醸成した漬物が多く、千枚漬、すぐき、しば漬がその代表的な例として挙げられる²³⁾。

上記の千枚漬、すぐき、しば漬を京の三大漬物と呼び、京都の代表的な漬物とされている²⁴⁾ (写真1、写真2、写真3)。京都吟味百撰にも認定されており、原産野菜を国産のみとし、漬物本来の素材を生かしたものとして提供している²⁵⁾。

まず京都の冬の味覚の1つと言われている、千枚漬は聖護院かぶらを薄く切って昆布と一緒に漬け込んだ漬物である。滋賀近江のかぶらを洛東の聖護院に蒔いたのが始まりであり、漬け方も最初は単にかぶらに刻みを入れ、塩漬けにしたものであった。その後、幕末に、御所の料理職人の手によって、聖護院かぶらを薄く切り、塩漬け後に昆布と調味料で味を調べ、宮中の献立に加えられた。これが、宮廷人の称賛を受け、千枚漬と名付けられたのである²⁶⁾。現在は、砂糖、酢などの調味料を使って漬けている製法が主流であるが、元来は昆布と塩だけで本漬けを行い、乳酸菌発酵させる漬物である²⁷⁾。

次にすぐきは、冬の京漬物として千枚漬と並び称される伝統的なものであり、京都の上賀茂でのみ古くから漬け込まれている特殊な漬け方で作られている。現在、一般的には「すぐき漬」と呼ばずに、単に「すぐき」と呼ばれている。すぐきの始まりは江戸時代初

期といわれており、当時は、上賀茂神社の社家の間でのみ作られ、御所への献上品として、一般の人々のもとには出されることのない、最高級の漬物とされていた。江戸末期には、上賀茂神社の付近の一带の農家で漬けられるようになり、明治時代には京都の町に広く出まわるようになった。すぐきは、塩だけを用い、下漬け、本漬け、天秤押し、追漬け、室といった特殊な過程で漬けられる²⁸⁾。特に、「天秤押し」と「室」がすぐき漬けの特徴と言われている(図3、図4)。てこの原理を利用して重石をかけすぐきのかさを減らし、この室と呼ばれる木炭や電気を熱源とした加熱室の中で、1週間乳酸菌発酵をさせることで、すぐき独特の酸味を生み出している。この伝統的な製法である天秤押しは、上賀茂地区の冬の風物詩とも言われている²⁹⁾。

最後に、京都の洛北・八瀬大原で古くから漬け込まれてきた、京漬物がしば漬である。平家一門が壇ノ浦で破れた後、洛北大原にある寂光院で仏門に帰依した建礼門院を慰めようと、付近の人々が、紫蘇の葉と種々の野菜を漬け込んだものを献上し、建礼門院がしば漬(紫葉漬)と名付けたのがはじまりといわれている³⁰⁾。現在は、梅酢や醤油など調味料で味付けされたものが多く出回っている。しかし、元来は八瀬大原の近郊でとれる加茂なす、茗荷、紫蘇などを刻んで塩漬けにして作られていた。そして、乳酸菌発酵をさせることで、ほどよい酸味と紫蘇と茄子の色によって赤紫色の鮮やかなしば漬が誕生したのである³¹⁾。

第3節 京都吟味百撰に認定されている京漬物

京都吟味百撰とは、京都府食品産業協会が、京ブランドにふさわしい食品を「京ブランド食品」として認定することにより、他産地との差別化をはかり、京都府食品産業の振興及び観光への寄付を目的として選出された、京都ならではの食品のことである³²⁾。認定された食品は、京菓子、京のパン、京とうふ、京納豆、京の珈琲、京ゆば、京の缶詰、京そうざい、京おかき、京あられ、京の酒、京かまぼこ等があり、京漬物もその1つである。選定に関しては京都府、学識経験者、消費者、生産者団体、流通、業界団体代表者などが厳正に審査を行っている。ただしすべての京漬物が認定されているというわけではなく、一部の製造業者の千枚漬としば漬、すぐきの京の三大漬物のみが認定されている。図5は、京都吟味百撰のロゴマークであり、図6は認定シールであるが、決められた商品のみ貼ることができ、消費者に京ブランド食品の知覚品質を約束し、安心感を提供する証としている³³⁾。

第3章 製造業者における京漬物の認識

第1節 聞き取り調査の目的

第2章まで京都で漬物文化が開花したことについて振り返り、漬物自体副食として重要な役割を担っていながらも、その中でも京都で漬物が江戸時代の頃から発展し、進物用としても人気を得ていたということがわかった。この時代から、京都で漬物文化が開花し始めたと考える。

しかし、「京漬物」という名が誕生した理由や、京漬物が京都を代表するお土産といった嗜好品・京ブランドの1つとして確立していった理由が明らかになっていない。また、現在の製造業者にとってどういう認識を持って京漬物を販売しているのかも解明できていない。

そこで、本章では京漬物の製造業者に聞き取り調査を行い、京漬物という名が誕生した理由を明確にし、現在の京漬物に対してどのような認識を持って経営をしているのかを明らかにしていく。

第2節 製造業者の概要

対象製造業者は、戦前に創業した老舗企業である「株式会社京都なり田」の高谷氏と「有限会社田中漬物店」の岸氏、そして戦後に創業した「株式会社もり」の森氏の3店舗の経営者及び従業員に聞き取り調査を行った。

まず1店舗目、1804年創業の京都なり田は、京都市北区に店舗を構えている老舗である。本店は上賀茂神社の近隣にあり、その他にも下京区に2店舗ある。すぐきを主要商品としている。

次に2店舗目の田中漬物店は、1911年創業の京都市東山区に店舗を構えている老舗である。円山公園と平安神宮の間に位置しており、きゅうりのしば漬を主要商品としている。

最後の3店舗目の京つけものもりは、1962年創業の京都市右京区に本社を構えているお店である。本社以外にも、太秦に本店があり、嵐山や錦市場、亀岡市等京都府内に16店舗ある。また、亀岡市には自社農園があり、そこで漬物に使用する野菜を育てている。青しそ大根が主要商品である。

上記の3店舗から聞き取り調査を行い、各製造業者の京漬物に対する認識について明ら

かにしていく。

第3節 嗜好品として認識されている京漬物

表1は、今回聞き取り調査を実施した3店舗に対する質問事項とその回答をまとめたものである。これを基に、各製造業者の京漬物に対する認識を明らかにしていく。

まず質問1の「いつから京漬物という名が付いたのか」では、京都なり田ともりは、江戸時代の頃から京都という地で漬物が発展してきたため、その発展と共に人々にも京漬物と呼ばれるようになっていったのではないかと考えていた。また、田中漬物店では「昭和45年の大阪万博が開催された頃は、京漬物という言葉はなく現在のようにお土産として確立されていなかった。そこで、京菓子に対抗するために京漬物という言葉を作ったことが始まりだと先代から聞いた。」と述べていた。これらの話から、江戸時代京都で漬物文化が発展していたのにも関わらず、「京漬物」という名は1970年(昭和45年)頃までなかったと考えられる。また、お土産といった嗜好品として確立するために、製造業者たちによって「京漬物」と名付けられ、人々にも広まっていったということが推測される。つまり京漬物という名は、嗜好品として認識をしてもらうために、名付けられた可能性が高い。

しかし、質問3の「創業時と現在の経営方法の違い」から、京漬物も当初は庶民的な漬物として販売していたことがわかった。田中漬物店は「お味噌汁、ご飯、魚のお供に出すような庶民的な漬物を作っていた。」と述べており、もりも「創業時は、買い物籠に新聞紙で包んだ沢庵を、包装せず持ち帰るような商売だった」と述べていた。これらから、京漬物も副食といった、家庭で食べる庶民的な漬物として販売されていたことが明らかとなり、製造業者側も最初は嗜好品として意識していなかったと考える。しかし、田中漬物店もりも「お土産として確立したことにより、京漬物自体が嗜好品扱いとなり、高級でもいいから産地や漬け方、材料にこだわるようになった。」や「遠方のお客様のお土産としての販売ができるようになった。」と述べており、京漬物が嗜好品として意識されるようになってから、製造業者側も一般的な漬物との差別化を図って販売しているということが考えられる。

この具体的な差別化の1つとして、パッケージの変化が挙げられる。質問4の「パッケージ等に変化はあったか」から、各製造業者はパッケージにもこだわっているということがわかった。京都なり田は「時代の流れと共に、パッケージも少しずつ変化しているものもあるが、なり田のロゴマークでもある鈴や受け継がれてきた味は変わってない。京漬物は確かに嗜好品であるが、常にお客様にとって身近なものでいたいと願っている。」と述べており、

田中漬物店では「お土産としての地位を確立し始めた頃に、漬物を包装するということを始めた。」、そしてもりは「包材の進化と共に京菓子などと肩を並べて、進物品にまで値打ちが高まったと考えられる。」と述べていたことから、各製造業者は嗜好品として捉えている京漬物に対して、パッケージをこだわることで、一般的な漬物との差別化を図っていると考えられる。

図7と図8は、京都なり田の旧パッケージと新パッケージの写真である。図7は、2007年から2017年まで使用していたパッケージで、図8は2018年から現在も使用しているパッケージである。この図から、商品名の部分に変化していることがわかる。この変化について、京都なり田の高谷氏は、「以前は浅漬け全てを『ぶぶづれ』のパッケージで統一するようになっていた。『ぶぶづれ』とは、京都でお茶漬けを『ぶぶづけ』と呼び、そのお供にという意味合いで、この名前が誕生した。しかし、一つ一つの商品にきちんと商品名を付けることで、お客様が一目見て何の商品かわかってもらうために、新しく表示を変えた。」と述べていた。

このように、お土産といった嗜好品としての認識が強くなっていったことで、これまで「ぶぶづれ」といった京都特有の言い方にしていたパッケージを、一般的にわかる商品名のパッケージに変えたということがわかった。つまり、「ぶぶづれ」という京都府民の馴染みのあるパッケージにし、購入対象者を京都府民等といった身近な人々にしていたのを、お土産として認識されるようになったことで、より多くの人にわかってもらえるようなパッケージに変化させたのではないかと考える。

このように、大阪万博の開催といった人の流れや交通網の変化、保存技術の向上といった時代の変化により、京漬物という名が誕生し、製造業者は京漬物を嗜好品として認識するようになったと考える。そして、パッケージ等をこだわることで、一般的な漬物との差別化を図り、嗜好品として価値を見出しているのではないだろうか。

しかし、一部の製造業者では、京漬物に対する認識が変わりつつある。質問5、質問6で、京都なり田ともりは、京ブランドに対するこだわりや京漬物に誇りを持っていると述べていた。対して、田中漬物店では「昔は、京漬物はオシャレであるという思いはあったかも知れないが、そうではなく、愛着が持てる漬物を作ることを大切にしている。京漬物・京ブランド自体にこだわりはなく、美味しいものを作ることを一番大切にしている。」と述べており、京ブランドに対してこだわりを持っていない製造業者もいるということがわかった。

このように、製造業者にとって京漬物は嗜好品としての認識が強いことが明らかとなっ

た。しかし、一部の製造業者では、漬物本来の美味しさを提供することを重要視する方針に変わりつつあるということも明らかとなった。

第4章 消費者における京漬物の認識

第1節 アンケート調査の概要

前章で、製造業者の京漬物に対する認識を明らかにした。本章ではアンケート調査の結果を用いて、消費者目線での京漬物のイメージを知り、京漬物に対してどのような認識を持っているのかを考察していく。以下、本稿の調査で明らかになった消費者の京漬物に対する認識の実態をまとめる。

アンケート調査は、2020年9月25日金曜日から2020年10月16日金曜日にかけて、質問用紙を配布し回答を得た。回答者は男女60人で、10代3人、20代16人、30代9人、40代8人、50代15人、60代3人、70代6人から回答を得られた。その内、男性の回答者数は23人、女性は37人である。回答者の年代の実数を図9に示した。20代の回答数が最も多く、次に多い年代は50代であり、30代、40代、70代、10代、60代の順に続く。

質問事項は、1性別、2年代、3居住地、4京漬物のイメージ、5京漬物と聞いて何の漬物を思いつくか、6京都のお土産として漬物を購入するか、7普段、漬物を食べるか、8漬物を購入する際に、京漬物にこだわるかの8項目を設定した(資料1)。質問4~8は自由記述の形式にし、消費者の京漬物に対するイメージをより具体的に明らかにした。

また、回答者60人の居住地については、京都府内、京都市内、京都府以外に分け、図10に示した。回答を得られた60人のうち、京都府内が38人、京都市内が16人、京都府以外が6人である。京都府以外では、滋賀県と和歌山県からの回答を得ることができた。

第2節 各質問項目の結果

まず質問4では、消費者が京漬物に対してどのようなイメージを持っているのかを把握するために、この質問を設定した。図11は質問4の回答結果であり、味覚や食材機能に関する回答を「味」、値段に関する回答を「値段」、歴史や伝統に関する回答を「伝統」、前述以外の回答を「その他」の項目に分類した。なお複数回答可としたため、回答者がのべ64人となった。

一番多かった回答は、年代や性別を問わず、「あっさりして美味しい」「素材が良い」「上品な味わい」といった「味」の項目であり、京漬物に対して、美味しさや食材機能に関してのイメージが強いということがわかった。

次に多かった回答は、「高価」や「高級品」といった「値段」に関するイメージであった。3番目に多かった回答は、「伝統的である」「歴史がある」という「伝統」の項目である。その他の項目には、「ブランドである」や「お土産の定番」「老舗が多い」という回答があった。20代の回答者からは、「京漬物を知らない」「他の漬物との違いがわからない」といった意見もあり、世代によって京漬物の認知度に差があることも明らかとなった。

質問5の京漬物と聞いて何の漬物を思いつくかについては、図12のとおりである。この質問も複数回答可としたため、回答者がのべ85人となった。

一番多かった回答は「千枚漬」であり、85人中38人が回答していることがわかった。その次に、「しば漬」「すぐき」の順に回答が多かった。

この結果から、ほとんどの回答者が京の三大漬物の「千枚漬」「しば漬」「すぐき」を代表的な京漬物と認知しているということがわかった。しかし、図13、図14、図15から、千枚漬は全世代からの認知度はあるが、しば漬、すぐきに関しては10代から20代の回答が少なく、しば漬、すぐきは若い世代よりも年代層が高い消費者に認知されていることがわかった。また、壬生菜と回答している人も多く、その他には「大根」「かぶら」「白菜」という回答が見受けられた。「大根」等と回答した人は、10代から20代の男女に多く見受けられた。

また、京都府以外の回答者6人中、3人は「京漬物と聞いても何が違うかわからない」といった意見であり、京都府民に比べて京漬物の認知度が低いということがわかった。

質問6の京都のお土産として京漬物を購入するかについては、いいえと回答した人の方が多く、60人中31人で、はいと回答した人は29人であった。しかし、はいといいえの差はあまりなく、ほぼ同等の結果だと言える。はいの回答者は、男女共に30代から70代が多く、いいえの回答者は10代から20代が多いということがわかった(図16、図17)。

はいと回答した理由として、一番多く挙げられていたのは、「京都の名産・手土産として喜ばれるから」「京都らしいから」という意見であった。その他にも、「美味しいから」「ご飯に合うから」「嵩張らない」等といった意見も多くあった。

次にいいえと回答した理由として、「京菓子の方を購入する」という意見が最も多かった。京菓子の中でも、「抹茶のお菓子などの商品を購入する」や「八つ橋を購入する」という意

見があった。これらの回答から、京都の土産には京菓子を購入する人が多くいるということがわかった。またその他には、「冷蔵だと手間がいる」「温度管理が大変である」という保存方法に対する意見や「年代的に喜ばれない」という意見も挙げられていた。

質問 7 の普段漬物を食べるかについては、回答者 60 人のうち、「毎日食べる」と回答した人は 10 人であり、次に「時々食べる」と回答した人が 36 人で、「ほとんど食べない」と回答した人が 14 人であった(図 18)。「毎日食べる」と回答した人は、30 代以上の回答者が多く、10 代や 20 代の回答者は 1 人もいないことがわかった(図 19)。また、「ほとんど食べない」と回答した人は 20 代が多く、他の世代に比べて、若い世代には漬物はあまり食されていないことが明らかとなった(図 20)。

「毎日食べる」と回答した人の理由としては、「ご飯に合うから」「おかずとして食べる」「毎日食べても飽きない」という意見があった。

一番回答数が多かった「時々食べる」の理由としては、「食卓に出たら食べる」「冷蔵庫に常に入っている」「ご飯のお供として食べる」という理由が多かった。他にも、「塩分が高いため時々食べる」といった意見も挙げられていた。また、「家で糠漬けをするため」という意見もあり、家庭で漬けている人もいるということもわかった。

「ほとんど食べない」という理由では、「食べる機会がない」「好きではないから」「高価だから」という意見が多くあった。

質問 8 の漬物を購入する際に京漬物にこだわるかについては、いいえと回答した人が多く、60 人中 51 人で、はいと回答した人は 9 人であったことから、年代を問わずほとんどの回答者が漬物を購入する際に、京漬物に対してのこだわりはない、ということがわかった(図 21)。はいの回答者 9 人の内、8 人が女性であり、女性の方が男性よりも京漬物に対するこだわりがあるということがわかった。また、居住地別にみると 9 人中 8 人が京都府民であることもわかった(図 22)。

はいと回答した人の理由としては、「自分の出身地の誇りのある産物だから」や「京都人だから」という意見があった。またその他には、「季節ごとに色々な種類を楽しめられるから」や「あっさりとした京漬物を選んで、購入したいから」という京漬物の種類の豊富さや味味の良さに関する意見も挙げられていることがわかった。

いいえと回答した人の理由では、「銘柄にこだわりはない」と「京漬物と一般的な漬物との違いがあまりわからない」という意見が一番多かった。「違いがわからない」という意見に関しては、10 代 20 代の男女の回答者から多く挙げられていた。他にも、「高価だから」

という意見も挙げられていた。

第3節 各質問項目の分析と考察

質問4の京漬物のイメージに関する回答では、年代や性別を問わず、美味しさや食材機能に関する回答が最も多かった。これらは、京料理特有の薄味のイメージから、「あっさり」や「上品な味わい」という回答が多いのではないかと考える。京都は薄味と言われ、基本的にまったりとした味の文化だと言われている。また京料理は、素材を食べる料理と言われていることから³⁴⁾、上記のようなイメージを持たれていると考えられる。また、京都は山紫水明の地と言われるように、良質な野菜や美味しい水に恵まれていることから、食材の良さに対してのイメージを持っている人も多いということも考えられる。

そして次に多かった、「高価」「高級品」というイメージに関しては、京漬物自体、小売店や百貨店、一部のスーパーでしか販売されていないことから、消費者たちは日常的に購入する機会が少ないため、高級品として捉えられているのではないかと考える。

また、表2・表3はスーパーと京漬物の専門店で販売されている漬物の金額をまとめたものである。スーパーで販売されている漬物は、平均300円前後の金額が多いのに対して、専門店は平均500円以上するものが多いことから、京漬物は値段が高いというイメージが持たれるのではないかと考える。

質問5の京漬物と聞いて何の漬物を思いつくかについては、ほとんどの回答者が、京の三大漬物の「千枚漬」「しば漬」「すぐき」を挙げていた。多くの京都府民の回答者が代表的な京漬物を回答していたことから、京漬物に対して一般的な漬物と違うという認識をしていると考える。質問4にもあったように、多くの回答者が京漬物に対して「あっさりしている」「上品である」といったイメージを持つ理由の1つとして、千枚漬のイメージが影響しているのではないかと考えられる。千枚漬のあっさりとした味わいや、純白で鮮やかな色彩が、回答者達に上記のようなイメージを持たせるのではないだろうか。

しかし、他の世代に比べて10代から20代といった若い世代に関しては、「しば漬」「すぐき」という回答が少なく、「大根」等といった回答が多かった。この結果から、若い世代にとって、しば漬、すぐきといった代表的な京漬物の認知度は低いと考えられる。

また、京都府民以外の回答者の半数が、「京漬物と聞いても何が違うかわからない」と回答していた結果から、他府県民は京漬物の特徴を理解せずに認識していると考えられる。

質問6では、回答者60人のうち約半数が、京都のお土産として京漬物を購入することが

わかった。特に、40代から50代の男女の回答者が多く、比較的年代層が高い消費者にお土産として人気であるということが明らかとなった。「京都の名産・手土産として喜ばれるから」「京都らしいから」という回答理由から、京漬物は、お土産として多くの消費者に喜ばれ、且つ京都らしさを表す食べ物として認識されていると考える。また、質問4でも「高価」「高級品」というイメージが多かったことから、京漬物は日常的に購入するものではなく、贈答用といった特別な機会に購入するものだと考える。これらから、消費者にとって京漬物は嗜好品として捉えていると考える。

対して、10代から20代の男女の多くの回答者が、お土産に京漬物を購入しないということがわかった。理由としては、「抹茶のお菓子・八つ橋の方を購入してしまう」「年代的に喜ばれない」という意見が挙げられていた。これらから、若い年代層の消費者には、気軽に食べやすいお菓子を選択するということがわかり、漬物自体あまり馴染みのある食べ物ではないということもわかった。質問5でもあったように、若い世代の「しば漬」「すぐき」といった回答が少なかった理由も、他の世代より京漬物を購入しに行く機会がないため認知度が低かったのではないかと考えられる。また、保存方法に対する意見も多いことから、お菓子を購入する人が多いということが推測される。

質問7では、「毎日食べる」「時々食べる」と回答した人が、60人中46人ということがわかり、漬物を食べる習慣がある人が多いということが明らかとなった。

「食べる」と回答した人の意見として、「ご飯のお供になるから」「おかずの一品になるから」という意見が圧倒的に多く、漬物は現在もなお副食として重要な食材であると考えられる。

しかし、かつて漬物は、重要な副食として必ず食卓に並んでいるものとされてきたが、46人中「毎日食べる」と回答した人が10人だったことから、漬物を毎日食べる習慣が無くなっていることが考えられる。

また、「毎日食べる」の回答者に10代から20代はおらず、「ほとんど食べない」の回答者は20代が一番多かった。この結果から、若い世代の消費者にとって、漬物はあまり馴染みがない食べ物だと考える。「ほとんど食べない」の回答者の意見の中には「食べる機会がない」があり、この意見は20代の回答者から多く挙げられていたことから、食事スタイルの変化によって、若者は漬物を食べる習慣があまりないのではないかと考えられる。

質問8では、ほとんどの回答者が、漬物を購入する際に京漬物にこだわらないことがわかった。質問7で、約半数以上の人々が普段漬物を食べていることが明らかとなったが、質問

8より、京漬物にこだわらずに購入している人が多いことから、京漬物は消費者にとって普段から食べるものではないと考えられる。つまり、京漬物は日常的に購入するものではなく、1つのブランド品として捉えられていると考える。

また質問6で、お土産として京漬物を購入する人は約半数いることが明らかになったことから、私用に漬物を購入する際には京漬物にこだわらないが、贈答用としては京漬物を選ばれることがわかった。これらから、京漬物は嗜好品として認識されていると考える。

以上のアンケート調査より、消費者にとって京漬物は、嗜好品・高級品として認識されているということがわかった。

漬物は本来保存食や副食として位置づけされているが、京漬物に関しては、お土産(贈答用)として購入されていることから、家の食卓で食べるといった日常的なものではなく、贈答品や嗜好品として捉えられていると考える。

また、ほとんどの回答者が京漬物に対して、「上品な味わい」「高級品」「伝統がある」といった特別なイメージを持っていたことから、一般的な漬物と違う認識を持っていることが明らかとなった。

しかし、10代から20代の消費者に関しては、京漬物に対して上記のようなイメージを持っているのにも関わらず、他の世代に比べて、京漬物を食べる習慣や購入する機会が少ないことから、嗜好品として認識していても、他の漬物との違いといった京漬物の具体的な知識は低いのではないかと見える。またこれらの結果から、若者の漬物に対する関心も低く、漬物離れをしているとも考えられる。

第5章 おわりに

本稿では、製造業者と消費者の目線から京漬物に対する認識について検討した。その結果、製造業者、消費者共に京漬物を嗜好品として認識していることが明らかとなった。

漬物は本来副食として人々の食卓に欠かせないものであったが、京漬物はすぐきや千枚漬のように、昔から贈答用や上品な味わいのある漬物が発展していたことから、当時から他の漬物よりも高級品・嗜好品として存在していたと考えられる。それが、現在の人々にまで影響し、嗜好品として認識されているのではないかと考える。

それに加え、製造業者達が「京漬物」という名を広めるために、嗜好品として公知していたことがわかり、現在もなおパッケージ等にこだわることで他の漬物との差別化を図っ

ている。そのため、消費者にとっても京漬物は高級品や伝統のある食べ物といった嗜好品として認識されていると考える。

しかし、聞き取り調査から一部の製造業者では、嗜好品としてではなく、漬物本来の位置づけである副食としての販売に変化しつつあるということがわかった。各製造業者が、今後京漬物を残していくためには若い世代に継承していく必要があると述べていた。若い世代に継承していくためには、嗜好品としてではなく、漬物本来の位置づけである副食として販売をする必要があると考える。それにより、若い世代にも馴染みのある食べ物として認識され、さらに多くの消費者に京漬物を提供できると推測される。つまり、京漬物の存続と発展の為に、製造業者の認識が変化しているのではないかと考える。アンケート調査からも、10代や20代といった若者の漬物離れや他の世代に比べて京漬物の認識が低いことが明らかとなったため、それを回避するために製造業者の認識が変わりつつあるのではないだろうか。

更に、田中漬物店の岸氏が「コロナ禍で原点に振り返り『食べてほっこりする家庭の味』という先代の味を守っていくことを大切にし、お漬物本来の魅力を伝えることを大事にしている。」と述べていた。このように、現在のコロナ禍の影響により、観光客等の人の動きが減衰したことによって、嗜好品としてではなく、日常的に食べる副食として販売する重要性を改めて感じ、経営方法の見直しが加速しているのではないかと考えられる。

上述した点を踏まえて、今後京漬物が発展していくためには、「嗜好品」としてだけではなく、漬物離れが進んでいる若者に対して、より購入しやすく、親しみやすい漬物としても販売するべきだと考える。そうすることにより、京漬物の需要の喚起と共に伝統の味や製法を次世代へ受け継いでいき、今後も京都の代表的な食文化として深く根付いていくのではないだろうか。

本稿では、3店舗の製造業者に聞き取り調査を実施したが、より明確な製造業者の認識を知るためには、聞き取り調査の対象店舗を増やす必要があると考える。また、アンケート調査についても、京都府民以外の回答者も増やすことで、各地域の消費者の京漬物に対する認識の実態も明らかになると考える。引き続き今後の動向に注目したい。

注

1) 朝倉聖子「日本の漬物文化：その変遷と特色」2016年、国土館大学博士論文、1-345

- 頁。
- 2) 京つけもの西利ホームページ「京漬物の歴史」
(<https://www.nishiri.co.jp/knowledge/history/>) (最終閲覧日、2020年12月13日)
 - 3) 柏井壽『京都の路地裏 生粋の京都人が教えるひそかな愉しみ』株式会社幻冬舎、2014年、96頁。
 - 4) 饗庭照美、永岡美沙、富田圭子、南出隆久、大谷貴美子「イメージ調査から見た現代の京料理」『日本調理科学会誌=Journal of cookery science of Japan』37巻2号、2004年、189-197頁。
 - 5) 京都市ホームページ「京都市情報館・京都都市のかたちの変遷」
(https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/toshi_hensen.html)
(最終閲覧日、2020年12月13日)
 - 6) 京都市ホームページ「京都市情報館」
(<https://www.city.kyoto.lg.jp/>) (最終閲覧日、2020年12月13日)
 - 7) 京都市ホームページ「京都市情報館・第1章京都市の歴史的風致形成の背景」
(<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/cmsfiles/contents/0000071/71658/2703keikaku1.pdf>) (最終閲覧日2020年12月13日)
 - 8) 京都市ホームページ「京都市情報館・すぐき菜」
(<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000029286.html>)
(最終閲覧日2020年12月13日)
 - 9) 土井志ば漬本舗ホームページ
(<https://www.doishibazuke.co.jp/cgi/websys.cgi?SUBMODULE=expl&uri=tokusen1>)
(最終閲覧日2020年12月13日)
 - 10) 植村善博・上野裕『京都地図物語』古今書院、1999年、94-97頁。
 - 11) 経済産業省特許庁「地域団体商標登録案件一覧」
(<https://www.jpo.go.jp/system/trademark/gaiyo/chidan/shoukai/ichiran/5009699.html>) (最終閲覧日2020年12月13日)
 - 12) 前掲1)、2-3頁。
 - 13) 宮尾茂雄「日本の漬物」『日本乳酸菌学会誌』13巻1号、2002年、2-22頁。
 - 14) 前掲2)
 - 15) 小川敏夫『漬物と日本人』日本放送出版協会、1996年、105-110頁。
 - 16) 前掲2)
 - 17) 樋口清之、國分綾子『つけものと京の暮らし』株式会社大安、1979年、73頁。
 - 18) 前掲17)、81頁。
 - 19) 京つけものもづめホームページ「京漬物が人気の理由」
(<https://kyo-tsukemono-mozume.jp/contents/column05.html>)
(最終閲覧日2020年12月13日)
 - 20) 前掲19)
 - 21) 前掲17)、78頁。
 - 22) 前掲15)、136-138頁。
 - 23) 前掲15)、47頁。
 - 24) 京都府漬物協同組合公式ホームページ「京の三大漬物」
(<http://www.kyo-tsukemono.com/future/>) (最終閲覧日2020年12月13日)
 - 25) 京都吟味百選「京つけもの」
(<http://www.kyo-hyakusen.com/items/?id=1>) (最終閲覧日2020年12月13日)
 - 26) 淡交社編集局『京のつけもの 味わいと老舗ガイド』株式会社淡交社、1993年、8-10頁。
 - 27) 京都なり田ホームページ「京都の三大漬物」

- (https://www.suguki-narita.com/about_narita/03_kyoto_tukemono.html)
(最終閲覧日 2020 年 12 月 13 日)
- 28) 平井達雄「京都の漬物」『調味科学』14 巻 2 号、1981 年、103-105 頁。
- 29) 京都なり田ホームページ
(<https://www.suguki-narita.com/>) (最終閲覧日 2020 年 12 月 13 日)
- 30) 前掲 28)、103 頁。
- 31) 前掲 15)、50-51 頁。
- 32) 一般社団法人 京都府食品産業協会
(<http://www.syoku-kyoto.com/introduction/brand/>)
(最終閲覧日 2020 年 12 月 13 日)
- 33) 京都吟味百選
(<http://www.kyo-hyakusen.com/index.html>) (最終閲覧日 2020 年 12 月 13 日)
- 34) 千澄子、後藤加寿子『京料理 KYORYORI』株式会社 KADOKAWA、2015 年、23 頁。

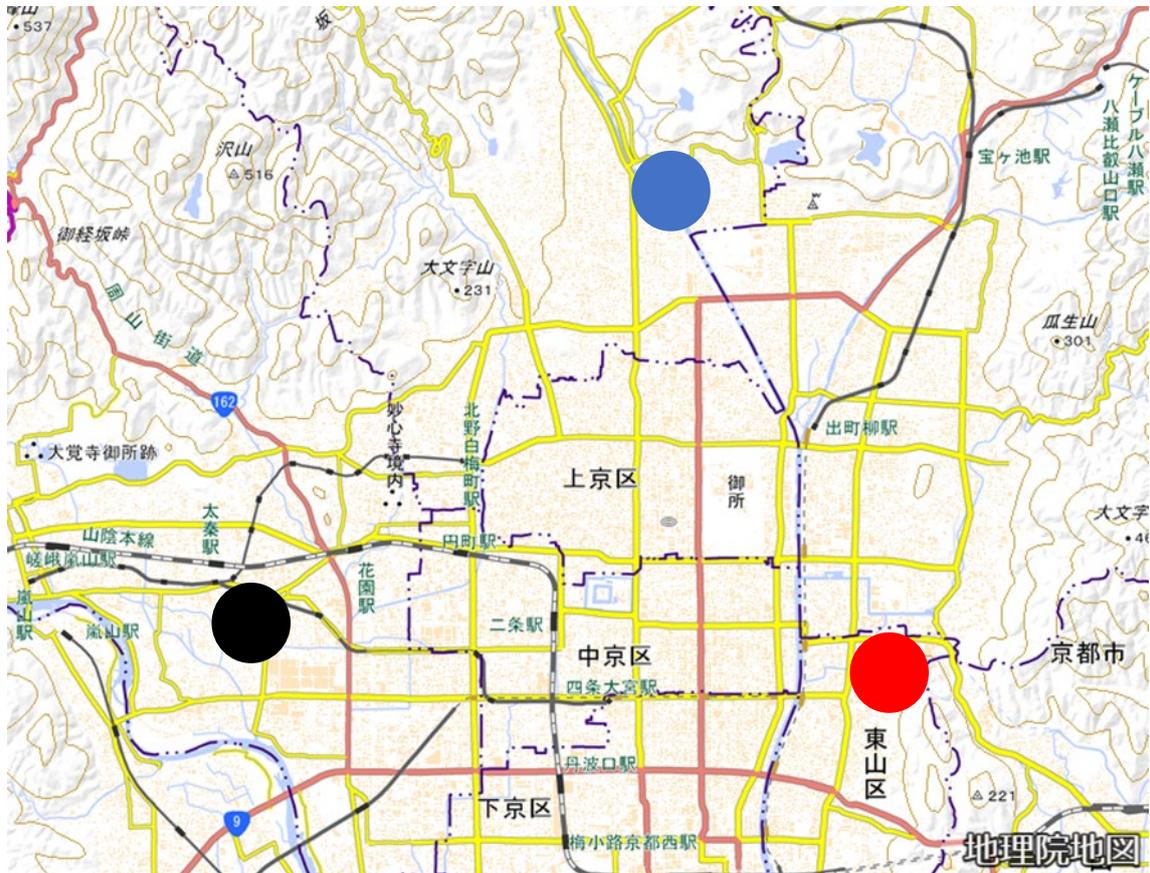


図1 対象地域

(地理院地図より筆者加筆(<https://maps.gsi.go.jp/>))(最終閲覧日 2020年11月29日)



図2 京都市におけるすぐき・しば漬・千枚漬の原料の主な産地
(地理院地図より筆者加筆(<https://maps.gsi.go.jp/>))(最終閲覧日 2020年11月29日)



写真1 京つけものもりの「千枚漬」
(2020年12月4日筆者撮影)



写真2 田中漬物店の「すぐき」

(2020年12月4日筆者撮影)



写真3 田中漬物店の「しば漬」
(2020年12月4日筆者撮影)



図3 すぐき漬製法「天秤押し」

(京都なり田ホームページ

(https://www.suguki-narita.com/about_narita/01_otsukemono.html)より転載

最終閲覧日 2020年12月13日))



図4 すぐき漬製法「室」

(京都なり田ホームページ

(https://www.suguki-narita.com/about_narita/01_otsukemono.html)より転載

最終閲覧日 2020年12月13日))



京都吟味百撰

図5 京ブランド認定食品(ロゴマーク)
(京都吟味百撰より転載(<http://kyo-hyakusen.com/>))
(最終閲覧日 2020年12月13日)



図6 京ブランド認定食品(認定シール)
(京都吟味百撰より転載(<http://kyo-hyakusen.com/>))
(最終閲覧日 2020年12月13日)

表1 各製造業者への聞き取り調査結果

質問1, いつから京漬物という名が付いたのか		
【京都なり田】	【田中漬物店】	【京つけものもり】
<p>漬物が広く食されるようになったのは、天下泰平の時代を迎えた江戸時代である。庶民の生活が豊かになり、野菜や調味料の種類も増え、都市部では「香の物屋」が繁盛していた。京の市中にも多くの「香の物屋」が誕生し、その中でも上賀茂産の「すぐき漬」は専門店が生まれたほど、圧倒的な人気を誇っていた。他にも「千枚漬」は京都発祥であり、「しば漬」も京都の大原が始まりの地だと伝えられている。このように、京漬物の発展と共に、人々に広く知れ渡るようになった。</p>	<p>昭和45年の大阪万博が開催された頃は、京漬物という言葉はなく、現在のようにお土産として確立されていなかった。そこで、京菓子里に對抗するために、京漬物という言葉を作ったことが始まりだと先代から聞いた。そして、企業側もパッケージ等を工夫し、高度経済成長期の頃に、お中元お歳暮・旅行のお土産といった嗜好品としての地位を確立していったことから全国に名が広まった。</p>	<p>詳しい過程はわからないが、200年以上も創業している老舗の漬物屋が、現在まで京都という地で漬物を盛り上げてきたおかげで京漬物と呼ばれるようになったのではないかと推測される。</p>
質問2, 京漬物の定義		
【京都なり田】	【田中漬物店】	【京つけものもり】
<p>一般的には京都産の野菜から作られた漬物であることが原則。千枚漬の原材料「聖護院かぶら」、すぐき漬の「すぐき」、賀茂茄子、万願</p>	<p>京都産のお野菜を使って加工したものを京漬物としている。</p>	<p>昔は京野菜を使っているものを京漬物と呼んでいた。しかし、現在では多種多様な漬物が開発されているため、京野菜とは限らなくな</p>

<p>寺唐辛子、壬生菜等、京野菜を使った漬物を「京漬物」と呼ぶ。</p>		<p>った。しかし、三大漬物には定義があり、すぐきは鴨川で採れたもの、しば漬は大原の赤しそを使ったもの、千枚漬は亀岡産と滋賀産で採れたかぶらを使って漬けたものとしている。</p>
--------------------------------------	--	---

質問 3, 創業時と現在の経営方法の違い

【京都なり田】	【田中漬物店】	【京つけものもり】
<p>創業当時より経営に関しての違いはない。しかし、時代の流れと共に、情報の発信等の違いはあり、PC やスマホのオンラインショップですぐに購入でき、電話一本で注文もできるようになった。「求味専心」を掲げて美味しいものをお客様にお届けすることを一番としている。</p>	<p>創業時はお味噌汁、ご飯、魚のお供に出すような庶民的な漬物を作っていた。Q1にもあったように、お土産として確立したことにより、京漬物自体が嗜好品扱いとなり、高級でもいいから産地や漬け方、材料にこだわるようになった。(贈答用に変化)しかしコロナ禍で原点に振り返り、「食べてほっこりする家庭の味」という先代の味を守っていくことを大切し、お漬物本来の魅力を伝えることを大事にしている。</p>	<p>創業時は、創業者の森春生が独立し、主に寿司屋を中心に漬物と生姜を配達すると共に、小さな店舗で、森輝子(春生夫人)が店番と製造の手伝いをするところから始まった。当時は、買い物籠に新聞紙で包んだ沢庵を、包装せず持ち帰るような商売だった為、今とは随分と状況が違う。その後、高度経済成長期になり、包材、保存技術の向上と交通網の充実により商売範囲が広域になってきた。そして、京都観光が盛んになり、遠方のお客様のお土産としての販売ができるようになった。</p>

質問 4, 昔は漬物自体、日常の食卓で食べる副食として販売されてきたが、現在京漬物は、贈答用(お土産)として人気である。なぜ贈答用に変化したのか。

また、貴社はそのためにパッケージ等に変化はあったか。		
【京都なり田】	【田中漬物店】	【京つけものもり】
<p>なり田は贈答用に変化したわけではない。根底には、お客様の日々の食卓を支えたい・お手伝いしたいという思いがある。しかしながら、京都に来られる観光客の増加によって、ありがたいことにお土産用や贈答用が所望されるようになった。時代の流れと共に、パッケージも少しずつ変化しているものもあるが、なり田のロゴマークでもある鈴や受け継がれてきた味は変わっていない。京漬物は確かに嗜好品ではあるが、常にお客様にとって身近なものでいたいと願っている。</p>	<p>昭和45年頃にお土産としての地位を確立し始めた頃に、漬物を包装するというのを始めた。きゅうりのしば漬をメイン商品にしてきたが、それをデザインされた包装紙に包むことによって差別化を図った。昔は、浅漬が主流ではなく、乳酸発酵させた漬物だったため、漬物自体の色が鮮やかではなく、くすみ色だった為、包装紙や木の箱にすだれといったパッケージにこだわっていた。しかし、交通網や冷蔵庫の発達のおかげで、日持ちしない浅漬が主流となり、それによってパッケージもシンプルのものに変化した。浅漬の色が鮮やかで綺麗なため、それを指し色にしている。</p>	<p>漬物は本来、各家庭で漬けられていたが、経済成長と共に作られなくなり、購入するものになった。ここからが漬物屋の始まりで、その当時漬物が進物になることなど考えもしなかったと思われる。しかし、希少な京野菜を使用した薄味で繊細な京漬物は、包材の進化と共に京菓子などと肩を並べて、進物品にまで値打ちが高まったと考えられる。このことは自然に高まったのではなく、お土産に購入されるように、また贈答品として購入してもらえるように苦労を重ねてきた先人の功績が大きいと思う。これからも時代に合った味付け、包装、食べ方等を提案しつつ京漬物ブランドを守りながら、進化していきたい。</p>
質問5、貴社の京漬物へのこだわり、他社との違い		
【京都なり田】	【田中漬物店】	【京つけものもり】
<p>「求味専心」をモットーに日々精進してきた。なり田</p>	<p>昔は、京漬物はオシャレであるという思いはあったか</p>	<p>弊社のこだわりは美味しい野菜からしか美味しい漬物</p>

<p>は上賀茂ですぐきをつくり始めた300年以上も前から、ただひたすらに味を求めてきた。慢心をおそれ、常に味を磨いてきた先人たちの姿勢を守り継ぐこと。なり田の漬物のほとんどは旬の野菜を使ったものであり、季節の区切りや旬が曖昧になりつつある時代だからこそ、なり田では露地で栽培する野菜を基本に、季節を感じられる漬物づくりにこだわっている。他社との違いを比較するよりも、「お客様のために」がなり田のこだわりなのかもしれない。</p>	<p>も知れないが、そうではなく、愛着が持てる漬物を作ることが大切になっている。京漬物・京ブランド自体にこだわりはなく、美味しいものを作ることを一番大切にしている。</p>	<p>はできないということをお大切にしている。その為に、自社農園を持つことになり、亀岡自社農園で自らが、漬物に合う野菜作りに精を出している。このことが、他社との違いにも通じており、差別化ができているものと確信している。漬物に関しての安心安全面では、基本的には自身の子供に食べさせたい漬物作りを基本に置いている。</p>
--	--	---

質問6、貴社は京ブランドに対してのこだわりはあるか

(京都という名に対してのこだわり)

【京都なり田】	【田中漬物店】	【京つけものもり】
<p>1804年より京都上賀茂の地で創業してきたため、こだわりも誇りもある。そして、先人たちより受け継いだ製法を守り続けているからこそ、なり田と言えば「すぐき」、「すぐき」と言えばなり田だと認識してくださる方もいる。「すぐき」に絶対の</p>	<p>京漬物・京ブランドにこだわりはない。しかし消費者は、京漬物をブランド品として見ていると考えられる。京漬物は他県で売られている漬物より垢抜けしていると考えている人が多いからではないか。</p>	<p>現在地方で販売している京都以外のお漬物とは一線を画していると感じている。このことは、量販店における価格競争に巻き込まれた漬物と品質競争により、高品質・高価格の京漬物とは違うと考えている。これが正しく京ブランドの価値を</p>

自信を持っていることは、創業よりブレずに貫いてきたことである。		築いてきたものと自負するところである。これからも流石と言われるような漬物作りに邁進していきたい
---------------------------------	--	---

質問7, 今後京漬物を残していくために取り組まれていること

【京都なり田】	【田中漬物店】	【京つけものもり】
<p>「ここに帰ればいつも本当の日本(味)がある。日本人が日本人に戻れる本物のやすらぎとゆとりがある」京漬物を届け、提案し続けていくことが、京漬物を原点とするなり田の使命であること。先人から受け継いだ歴史をしっかりと守りながら、未来へと受け継ぐ。今という時代になすべきことを真剣に考え、丁寧に取り組んでいくこと。京漬物を未来へ残していくためにも、その魅力や健康志向が高まった今の時代に求められる情報を日々発信していく必要性があるのではないか。</p>	<p>美味しい漬物を作るためには、良質なお野菜を作ることが大切であることから、畑仕事を始めた。美味しい京漬物を守っていくために、良質な原料や昔ながらの伝統的な漬け方・技法を残していく、そしてなによりお漬物が好きな人が作り、思いを継承していくことを大切にしている。</p>	<p>漬物を食べる習慣が少なくなった現在の人たちに対して、あらゆる種類の漬物を開発し、若い人にも目を向けてもらえるようにする。組合全体では給食のメニューとして漬物を出す取り組みも行っている。</p>

(聞き取り調査より筆者作成)



図7 京都なり田の旧パッケージ

(2020年10月9日株式会社京都なり田高谷氏からの提供より)



図8 京都なり田の新パッケージ

(京つけもの通販 京都なり田(<https://www.suguki-narita.com/onlineshop/>)より転載
(最終閲覧日 2020年12月13日))

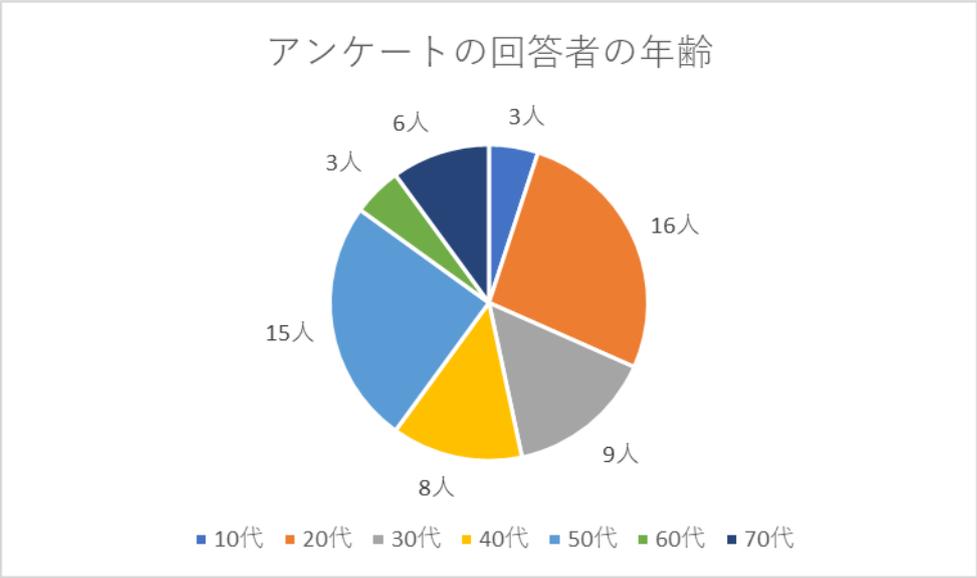


図9 アンケートの回答者の年齢
(アンケート調査より筆者作成)

令和 2 年 9 月 25 日(金)

「京漬物の認識に関するアンケート」

立命館大学文学部京都学専攻 4 回生の上野まどかと申します。

現在、「消費者目線での京漬物のイメージ」をテーマとする卒業論文の執筆を進めています。この研究を行うにあたり、消費者の方々の意見を知るため、アンケートを実施させていただくこととしました。

つきましては、大変お手数ですがアンケートにお答えいただければ幸いです。

なお、ご回答いただきましたデータについては、今回の卒業論文のみで利用することとし、それ以外の用途で活用することはありません。

問 1： 性別

男 女

問 2： 年代

10 代 20 代 30 代 40 代 50 代 60 代 70 代

問 3： 居住地

京都府内 京都市内 京都府以外 _____ 県・府・都・道

問 4： 京漬物のイメージは？

(例：上品である、伝統がある、高価等)

問5： 京漬物と聞いて、何の漬物を思いつきますか？

問6： 京都のお土産として漬物を購入しますか？また、その理由をお答えください。

はい いいえ

理由 _____

問7： 普段、漬物を食べますか？また、その理由をお答えください。

毎日食べる 時々食べる ほとんど食べない

理由 _____

問8： 漬物を購入する際に、京漬物にこだわりますか？また、その理由をお答えください。

はい いいえ

理由 _____

アンケートは以上です。
ご協力頂き、誠にありがとうございました。

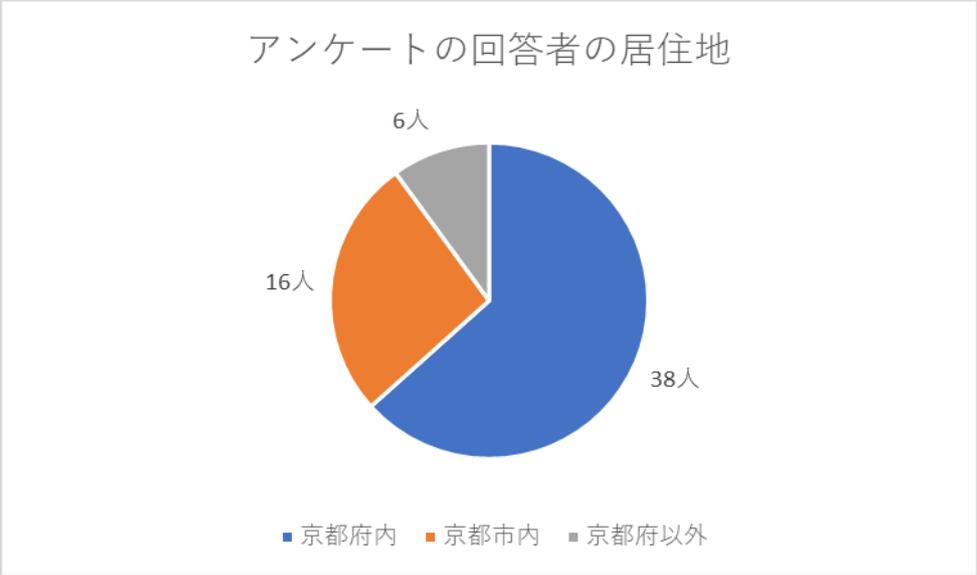


図10 アンケートの回答者の居住地
(アンケート調査より筆者作成)

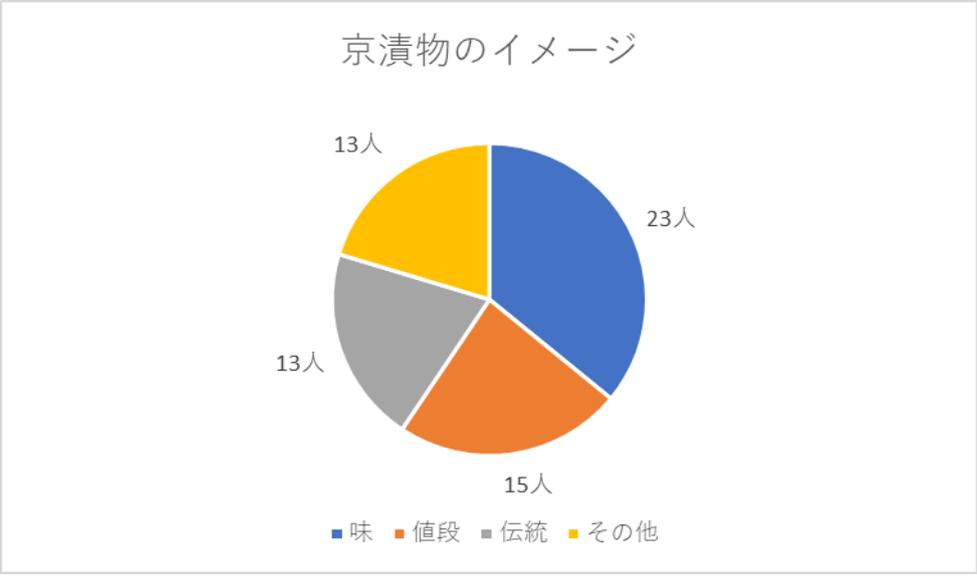


図11 京漬物のイメージ
(アンケート調査より筆者作成)

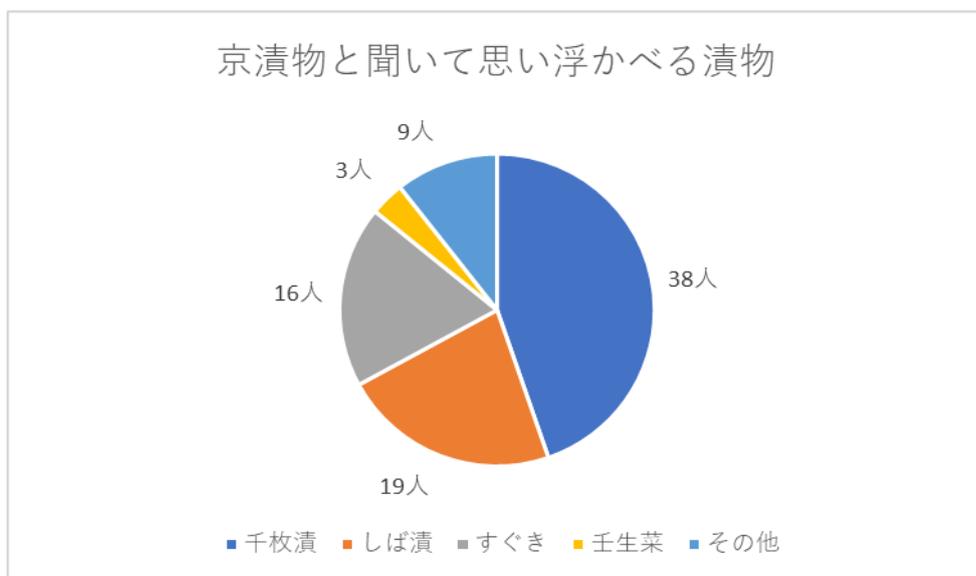


図 12 京漬物と聞いて思い浮かべる漬物
(アンケート調査より筆者作成)

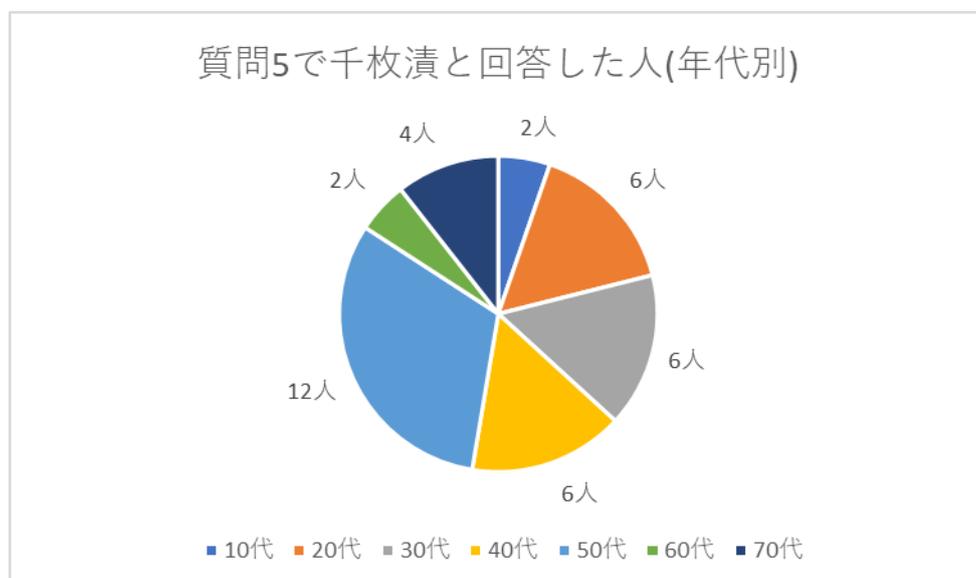


図 13 質問5で千枚漬と回答した人(年代別)
(アンケート調査より筆者作成)

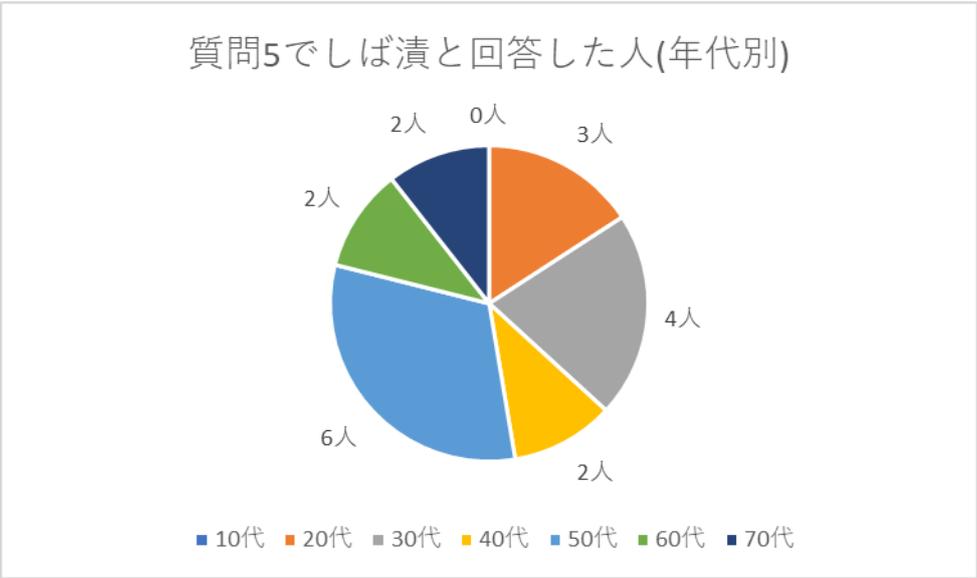


図 14 質問 5 でしば漬と回答した人(年代別)
(アンケート調査より筆者作成)

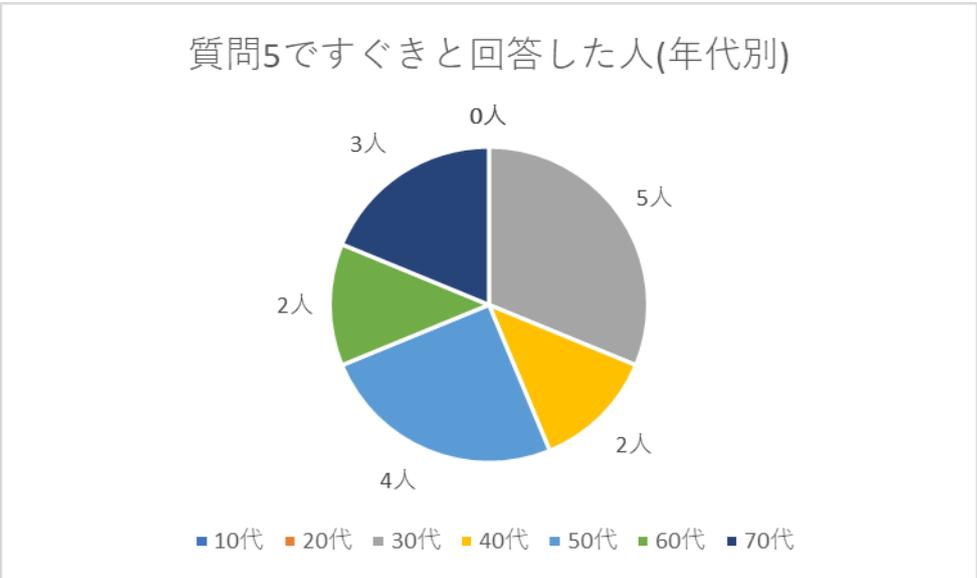


図 15 質問 5 ですぐきと回答した人(年代別)
(アンケート調査より筆者作成)

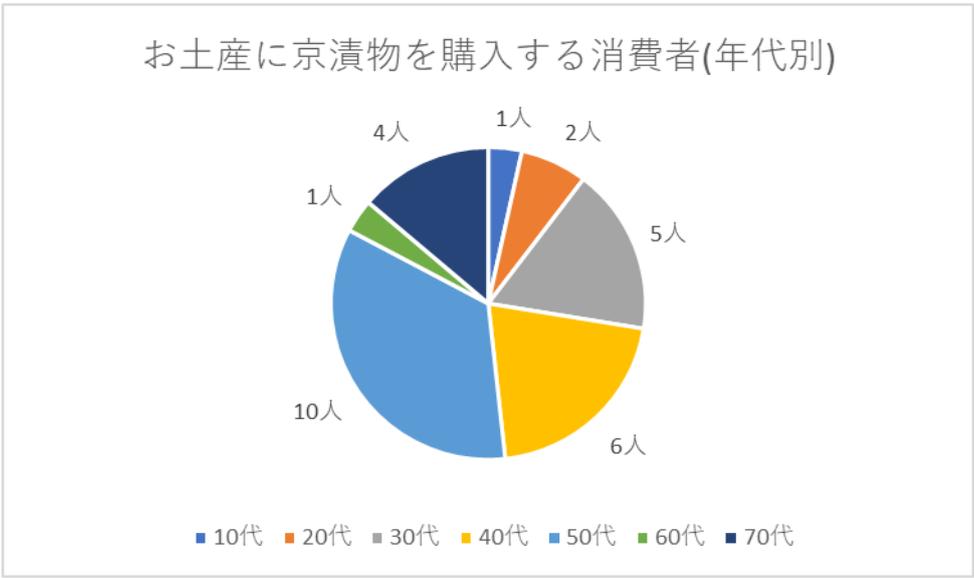


図 16 お土産に京漬物を購入する消費者(年代別)
(アンケート調査より筆者作成)

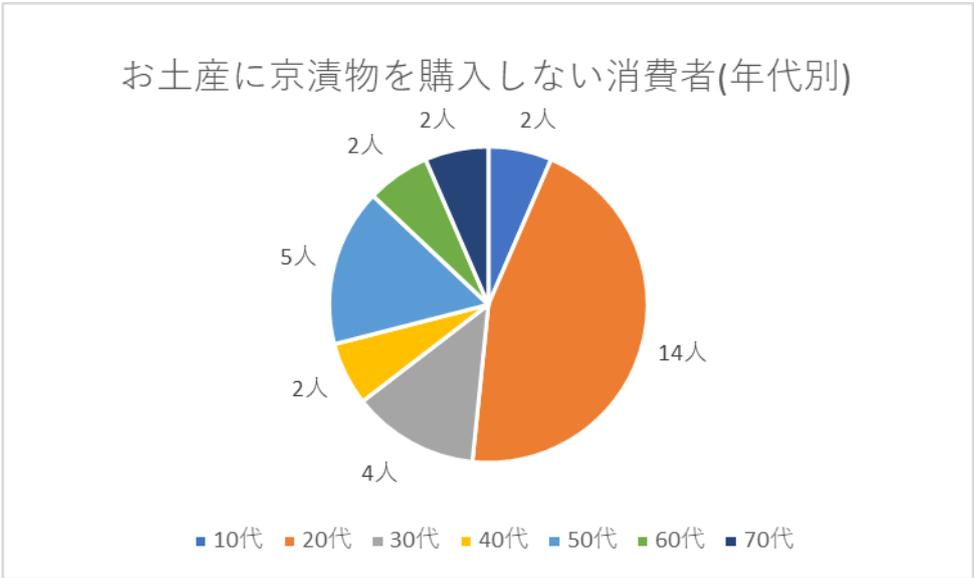


図 17 お土産に京漬物を購入しない消費者(年代別)
(アンケート調査より筆者作成)

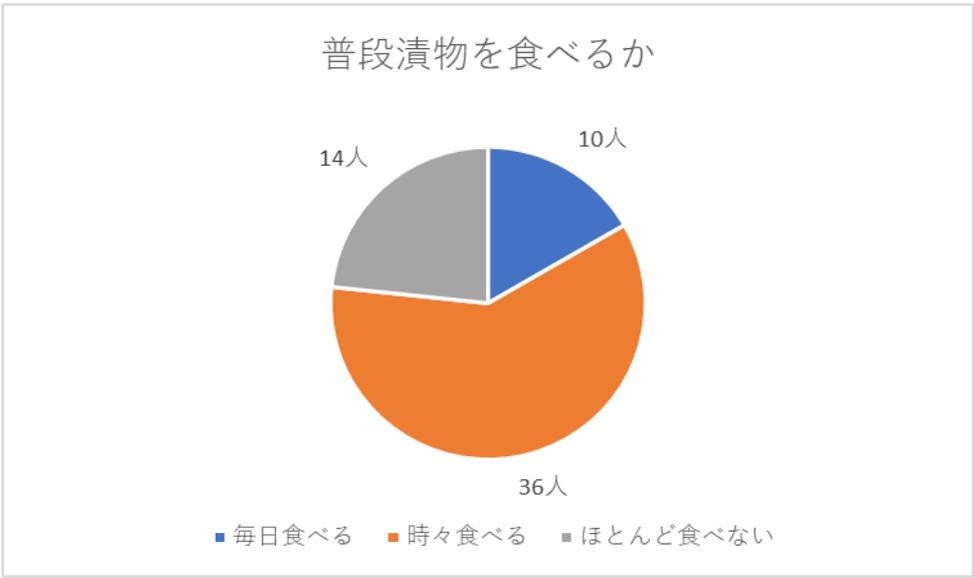


図 18 普段漬物を食べるか
(アンケート調査より筆者作成)

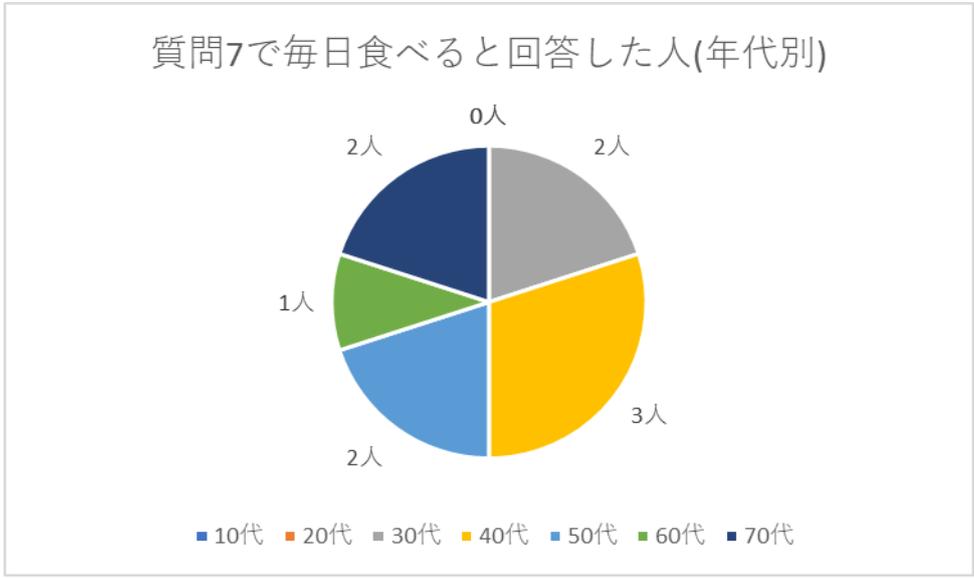


図 19 質問7で毎日食べると回答した人(年代別)
(アンケート調査より筆者作成)

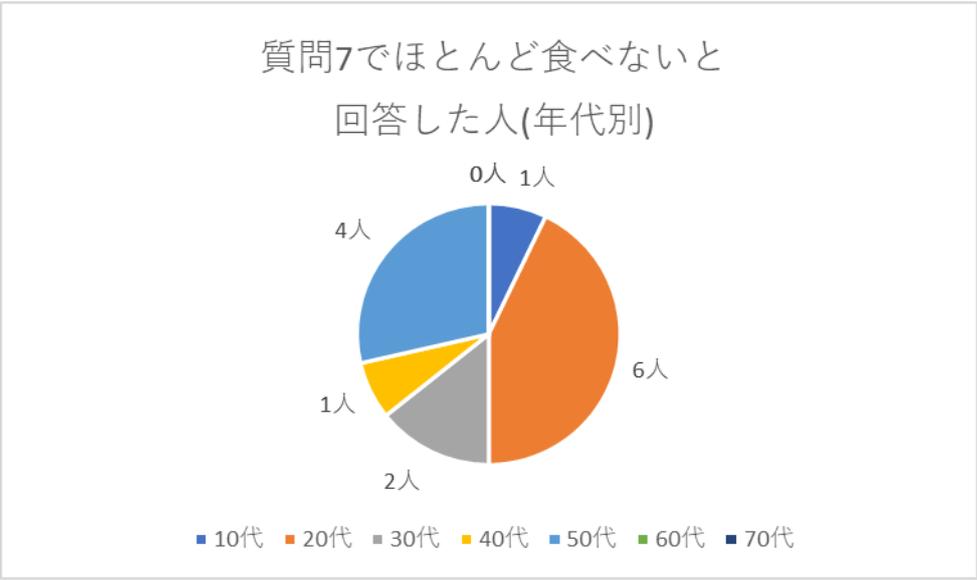


図 20 質問7でほとんど食べないと回答した人(年代別)
(アンケート調査より筆者作成)

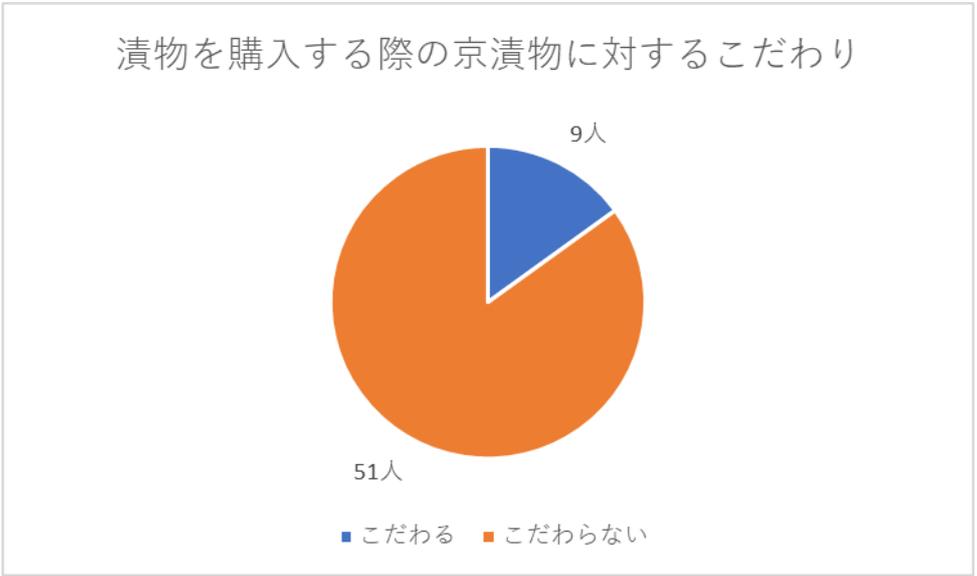


図 21 漬物を購入する際の京漬物に対するこだわり
(アンケート調査より筆者作成)

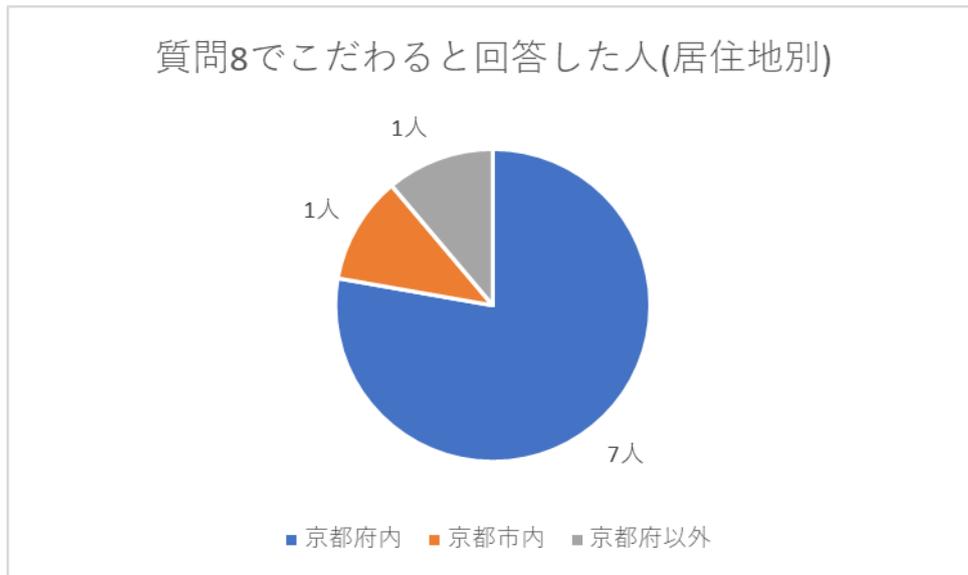


図 22 質問 8 でこだわると回答した人(居住地別)
(アンケート調査より筆者作成)

表 2 スーパーの漬物売り場での漬物の金額一覧(一部)

スーパーマツモト	
マルケイ・刻み千枚漬	321 円
やまう・生しば漬	192 円
マルマタ・刻みすぐき	213 円
やまじょう・こぶ仕立て大根	321 円
やまじょう・刻みみぶな	267 円

(2020 年 10 月 20 日現在、スーパーマツモトにて調査)

表3 京都なり田・田中漬物店・京つけものもりの漬物金額一覧(一部)

【京都なり田】		【田中漬物店】		【京つけもの もり】	
千枚漬	864 円	千枚漬	1080 円	千枚漬	691 円
賀茂志ば	648 円	生しば	540 円	刻みしば漬(大)	756 円
すぐき 250g	1080 円	丸すぐき	1080 円	すぐき	972 円
山家漬ゆず	518 円	昆布大根	540 円	青しそ大根(大)	648 円
白菜あっさり漬	540 円	刻み壬生菜	540 円	京みぶな漬	540 円

(京都なり田、田中漬物店、京つけものもり公式ホームページより筆者作成

(<https://www.suguki-narita.com/onlineshop/>、

<https://tanakatsukemono.com/onlineshop/index.php>、

<http://www.kyoto-mori.com/>))(最終閲覧日 2020 年 12 月 13 日)

会との上手な関わり方を常に模索しているような印象がある。普段私たちが抱えているような悩みや不安、人に言いづらい部分を、登場人物が私たちの代わりにストレートに伝えてくれている。村上春樹は作品を通して、私たちにそういった「自我」があることを深く理解し、それを受け入れて「共生」していくことの大切さを伝えていると言えるだろう。

注

- (1) 本論文で使用した本文のテキストは村上春樹『ノルウェイの森(上)』(講談社、二〇一四年三月)、『ノルウェイの森(下)』(講談社、二〇〇七年十二月)に収録されたものである。
- (2) 村上春樹『猫を棄てる―父親について語るとき―』(文藝春秋、二〇二〇年四月、十五〜十七・三六・七六・七七頁)
- (3) 2に同じ。二五・五六・七六頁
- (4) 清水良典『村上春樹はくせになる』(朝日新聞社、二〇〇六年一〇月、九頁)
- (5) 本論文で使用した本文のテキストは村上春樹『ねじまき鳥クロニクル 第一部 泥棒かささぎ編』(新潮社、二〇一九年三月)、『ねじまき鳥クロニクル 第二部 予言する鳥編』(新潮社、二〇一九年二月)、『ねじまき鳥クロニクル 第三部 鳥刺し男編』(新潮社、二〇

一九年十一月)に収録されたものである。

(6) 本論文で使用した本文のテキストは村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド(上)』、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド(下)』(新潮社、二〇一〇年四月)に収録されたものである。

(7) 本論文で使用した本文のテキストは村上春樹『海辺のカフカ(上)』(新潮社、二〇一二年十一月)、『海辺のカフカ(下)』(新潮社、二〇〇五年十一月)に収録されたものである。

(8) 本論文で使用した本文のテキストは村上春樹『騎士団長殺し 第一部 顕れるイデア編(上)』、『騎士団長殺し 第一部 顕れるイデア編(下)』(新潮社、二〇一九年三月)、『騎士団長殺し 第二部 遷ろうメタファー編(上)』、『騎士団長殺し 第二部 遷ろうメタファー編(下)』(新潮社、二〇一九年四月)に収録されたものである。

(9) 一八〇八年に成立した。刊行されず、写本により伝えられてきた。

(10) 一七六八年に成立、一七七六年に刊行。

(11) 河合隼雄『ユング心理学と仏教』(岩波書店、一九九七年十二月、一八三〜一九三頁)

のを感じている。直子とクミコのふたりに共通するのは、「もう一人の自分」や「影」のような「違和感」を抱えていることだ。また、それを自分の中で上手く位置づけることができていない。

第二章では、『ノルウェイの森』の「井戸」に注目し、『ねじまき鳥クロニクル』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

『海辺のカフカ』など、他の作品に出てくる「井戸」にも焦点を当てた。それらに共通することとして、「井戸」の中で「無」と一体化すると、「肉体」と「魂」を分離させることができると考えられる。そして「魂」は、「リンボ」という生と死の中間地点を漂い、自分の「自我」を認識する。

直子やクミコが抱えていた「違和感」とは、「自我」ではないかと推測した。それらは日常では「死」の世界、つまり「井戸」の中に沈められている。そのため、「自我」がときどき無自覚に顔を出し、混乱を生み出している。しかし、その「自我」を呑みこむことによって、「本当の自分」になれる。

第三章では、村上春樹の最新長編小説『騎士団長殺し』に触れ、村上春樹が上田秋成をどう捉えているのか考察した。まず、村上春樹は『春雨物語』について、上田秋成の思想性が重視されると説明している。そして、『春雨物語』の一篇「二世の縁」は、上田秋成が晩年に達成した、かなりシニカルな世界観が反映されていると評価

している。また、作品紹介に付随して、仏教にも触れている。僧が入定するというのは悟りを開くための行為で、生死を超えた境地へと到達させるために、自ら選んで死んでいくということである。しかし、涅槃に達するということは、ただ死ぬこととは違い、肉体は消滅したとしても、魂は生死を超えた場所に移っており、肉体はあくまでもかりそめに過ぎないとしている。

『ノルウェイの森』における「井戸」とは、上田秋成の「二世の縁」でいう「悟りを開く」ということではないだろうかと考えた。「井戸」に落ちずにいることは誰にとっても正しいことではない。「生」と「死」の世界の境界線をなくし、ふたつの領域を行き来することによって、「無意識」を「意識」させる。そうすることで、生死を超えた境地へと到達し、「もう一人の自分」や「影」と言われている、容認しがたい潜在的な本質である「自我」を認識することができる。そして、それを受け入れ「共生」することが重要だとしている。

以上から、村上春樹の作品には上田秋成の思想性が色濃く反映されていると考えられる。村上春樹は『ノルウェイの森』において、「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」と定義している。村上春樹の作品に出てくる「もう一人の自分」や「影」といった、自分の「無意識」の中にある「自我」は、一種の「生きづらさ」のようなものではないかと考える。登場人物は、周りの人々や社

仏教では、心は「心真如」と「心生滅」のふたつの領域にわけられる。「心真如」とは無意識の領域のことで、「心生滅」とは有意識の領域のことを指す。悟りを開くのは、この境界線をなくすための行為で、このふたつの領域の間は「アラヤ識」と呼ばれている。この領域を行き来することによって、「無意識」を「意識」させる。それが「涅槃に達する」ことであり、「生死を超えた境地」へと到達できる。《注 11》

『海辺のカフカ』では、自ら「死」を選び、「魂」となって生と死の中間地点「リンボ」を漂っていた。そして、「死」の世界、つまり「無意識」に沈んでいる「自我」を「意識」することで、「本当の自分」になれるとしている。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』では、暗闇の中にいることで、逆の立場にあるものごととの差異がなくなり、それらを隔てる壁も自動的に消滅していた。これは、「生」と「死」の世界の境界線をなくすための行為といえるのではないか。

また、『ノルウェイの森』で直子が話していた「井戸」とは、上田秋成の「二世の縁」でいう「悟りを開く」ということではないだろうか。「井戸」に落ちることによって、「違和感」を認識することができる。この「違和感」とは、容認しがたい潜在的な本質、「自我」である。直子は「井戸」に落ちずにいることは誰にとっても正

しくない主張した。「無」と一体化して「自我」を認識し、それを受け入れ「共生」することの重要性を、村上春樹は数々の作品を通して読者に伝えているのではないだろうか。

おわりに

本論文では、村上春樹の『ノルウェイの森』を中心に取り上げ、村上春樹が数々の作品において、ちりばめている主題について考察した。また、その思想に影響を与えた人物について考察した。

第一章では、直子が「阿美寮」に入ることになった原因について考察した。直子は「もう一人の自分」の存在を認識している人々が「阿美寮」で暮らしていると説明していた。そこが「外の世界」との違いで、その「歪み」を矯正するのではなく、「歪み」に馴れるのだとしている。

また、『ねじまき鳥クロニクル』の主人公「僕」の妻クミコにも焦点を当てた。クミコも自分の中に「何かちよつとしたもの」が潜んでいるような気がしている。また、「僕」もクミコと交わったときに「奇妙に覚めたもの」を感じており、クミコの体を「かりそめの肉体」ではないかと思っている。そして、「僕」はクミコに「影」のようなも

うしてしっかりと身体を浄めてから、土の中に入ります。そして

僧はその暗闇の中で断食をしながら読経し、それに合わせ
て鉦を叩き続けます。あるいは鈴を鳴らし続けます。竹筒の空
気穴を通して、人々はその鉦や鈴の音を聞くことができます。
しかしそのうちに音が聞こえなくなります。それが息を引き取
ったしるしになります。それから長い歳月をかけて、その身体
は徐々にミイラ化していきます。三年三ヶ月を経て掘り起こす
というのがいちおうの決まりになっているようです」

「何のためにそんなことをするのですか？」

「即身仏そくしんぶつとなるためです。そうすることによって人は悟りを

開き、自らを生死を超えた境地へと到達させることができま

す。それがまた衆生を救済することに繋がっています。いわ

ゆる涅槃ねはんです。掘り起こされた即身仏は、つまりミイラは寺

に安置され、人々はそれを拝むことによって救済されます」

「現実的には一種の自殺のようなものですね」

(中略)

「涅槃に達する―それはつまり、ただ死ぬというのとは違うも
のですね？」

「違うものです。私も仏教の教義にたいして詳しいわけではあ
りませんが、私が理解する限りでは、涅槃は生死を超えたところ
にあるものです。肉体は死滅したとしても、魂は生死を超え
た場所に移っていると考えることもできるでしょう。この世の
肉体というのはあくまでかりそめの宿に過ぎませんから」(傍
線引用者)

僧が入定するというのは「悟りを開く」ための行為で、「生死を
超えた境地」へと到達させるために、自ら選んで死んでいくという
ことである。しかし、「涅槃に達する」ということは、ただ死ぬこ
とは違い、肉体は消滅したとしても、魂は「生死を超えた境地」
に移っており、肉体はあくまでもかりそめに過ぎないとしている。
村上春樹が上田秋成の『春雨物語』を「ただの怪異譚ではない」
と評価し、彼の思想性が色濃く反映されていると説明していること
や、「二世の縁」を具体的に引用していることから、村上春樹は上
田秋成に影響されているのではないかと推測できる。また、上田秋
成は仏教について深く捉えていた節がある。

とり、卑いやしい下働きのようなことをして生計をたてるようにな

る。そして「入定の定助じょうすけ」という名を与えられる。村の人々

はそのあさましい姿を見て、仏法に対する敬意を失ってしま
う。これが厳しい修行を積み、生命をかけて仏法をきわめたも
ののなれの果ての姿なのか、と。そしてその結果、人々は信仰
そのものを軽んじるようになり、寺にもだんだん寄りつかなく
なる。そういう話だった。免色が言ったように、そこには作者
のシニカルな世界観が色濃く反映されている。ただの怪異譚で
はない。

まず、村上春樹は『雨月物語』《注10》と『春雨物語』の違いに
ついて、『春雨物語』は上田秋成の思想性が重視されていると説明
している。そして、『春雨物語』の一篇「二世の縁」は、上田秋成
が晩年に達成した、かなりシニカルな世界観が反映されていると評
価している。また、シニカルな世界観の裏には、上田秋成の複雑な
生い立ちが関係しているとの見解を示している。そして、村上春樹
自身がどのように「二世の縁」を捉えているのかが明白にわかるよ
うな、作品紹介をしている。最後には「ただの怪異譚ではない」と

締めている。

「二世の縁」の話はさらに続く。

私は免色に尋ねた。「仏教の知識があまりないので、細かい
ところがよく理解できないのですが、僧が入定するというのは
つまり、自ら選んで棺に入って死んでいくわけですね？」

「そのとおりです。入定するというのはもともとは『悟りを開
く』ということですので、それと区別するために、生入定いきにゆうじょうと
言うこともあります。地中に石室をつくり、竹筒を地上に出し
て通風口を設けます。入定をする僧は地中に入る前に一定期間

木食もくじきを続け、死後腐敗したりせず、きれいにミイラ化するよう
に身体を調整します」

「木食？」

「草や木の実だけを食べて生活することです。穀物を始め、調
理したものはいっさい口にしません。つまり生きているあいだ
に、脂肪分と水分を極力身体から排出してしまうのです。きれ
いにミイラになれるように、身体の組成を変えるわけです。そ

返され、寺に祀られます。禪定することを『入定にゅうじょうする』と言います。おそらくもともとは立派な僧であったのででしょう。その魂は願い通りに涅槃ねはんの境地に達し、魂を失った肉体だけがあとに残されて生き続けてきたようです。主人公の家族は十代にわたってこの地に住んできたのですが、どうやらそれよりも前に起こったことのようにです。つまり数百年前に」

(中略)

「それでその生きたミイラのような僧が掘り出されたあと、話ほどのように展開していくのですか？」と私は尋ねた。

「話はそのあとずいぶん不思議な展開を見せます」と免色はなんとなく言いにくそうに言った。「上田秋成が晩年に到達した独自の世界観が、そこには色濃く反映されています。かなりシニカルな世界観と言つていいかもしれない。秋成は生い立ちが複雑で、少なからず屈託を抱えて人生を送った人でしたから。」

電話を切ったあと、私は居間の椅子いすに座り、上田秋成の

「二世の縁」を読んだ。(中略)でもそのような細かい違いを別にすれば、私が体験したのはその話とそっくり同じ出来事だった。あまりに似ているので、呆然ぼうぜんとしてしまうほどだった。

掘り出されたミイラはからからに干ひからびているものの、まるで執念のように手だけを動かしかし鉦を打っている。恐ろしいまでの生命力がその身体からだを、ほとんど自動的に動かしているのだ。おそらくその僧は念仏を唱え、鉦を叩きながら入定していったのだろう。主人公はそのミイラに服を着せかけ、唇に水をふくませてやる。そうするうちに薄い粥かゆを食べるようになり、次第に肉もついてくる。最後には、普通の人と変わらない見かけにまで回復する。しかしそこには「悟りを開いた僧」の気配はまったく見当たらない。知性も知識もなく、高潔さのかけらも見当たらない。そして生前の記憶はすっかり失われている。どうして自分が地中にそんな長い年月入っていたのかも思いつけない。今では肉食をし、少なからず性欲もある。妻をめ

「これと同じような出来事というのは、つまり真夜中にどこから鈴の音が聞こえてくるということですか？」

「正確に言えば、そこで聞こえてきたのは鉦かねの音です。鈴ではありません。鉦太鼓で探す、というときの鉦です。昔の小さな仏具で、撞木しゅもくという槌つちのようなもので叩たたいて音を出します。念仏を唱えながら、それを叩くのです。真夜中に土の下からその鉦の音が聞こえてくるという話です」

「それは怪談なのですか？」

「怪異譚かいいたんと言ったほうが近いでしょう。上田秋成あきなりの『春雨はるさめ物語』という本をお読みになったことはありませんか？」と免色は尋ねた。

(中略)

『『春雨物語』は秋成が最も晩年に書いた小説集です。『雨月物語』の完成からおおよそ四十年を経て書かれています。『雨月物語』が物語性を重視しているのに比べると、ここでは秋成の

文人としての思想性がより重視されています。その中に『二世にせの縁えだし』という不思議な一篇があります。その話の中で主人公はあなたと同じような経験をします。主人公は豪農の息子です。学問好きな人で、夜中に一人で書を読んでいると、庭の隅の石の下から、鉦の音のようなものが時折聞こえてきます。不思議に思って明くる日、人を使ってそこを掘らせてみると、中に大きな石があり、その石をどかしてみると、石の蓋ふたをした棺ひつぎのようなものがあります。それを開けると、中には肉を失い、干し魚のように瘦やせこけた人がいます。髪は膝まで伸びています。手だけが動いていて、撞木でこんこんと鉦を打っています。どうやらその昔、永遠の悟りを開くため自ら死を選び、生きたまま棺に入れられ、埋葬された僧であるようです。これは禅定ぜんじょうと呼ばれる行為です。ミイラになった死体は掘り

なんだ。(傍線引用者)

「リンボ」というのは、生と死の世界のあいだにある中間地点である。自ら「死」を選んだ「私」は、仮のかたちをとって「魂」として、「リンボ」にいる。現実世界とは別に、となり合わせの世界があると説明しているが、これは「井戸」の底の「こちら側」、つまり「死」の世界のことではないだろうか。「死」の世界は「自分自身の内にあるものの投影」であり、迷宮となっている。しかし、「自分自身の一部」であることを認識することによって、威嚇に見えていたものが自分の心の中にある恐怖に見えてくる。

「あなたはなにかを切りとったり捨てたりするようなことはないの。私たちはそれを捨てるんじゃないで、自分の中に呑みこむだけ」

「僕はそれを自分の中に呑みこむ」

「そう」

「それで」と僕はたずねる。「僕がそれを呑みこんだとき、いったいなにが起こるんだろう?」

(中略)

「たぶんあなたはすっかりあなたになるの」と彼女は言う。(傍線引用者)

そして、自分自身の恐怖を切りとったり捨てたりするのではなく、自分の中に呑みこむことによって、「本当の自分」になれる。この考え方は、直子が「阿美寮」に入っている人々の特徴としてあげていたものである。直子は「歪み」を矯正するのではなく、「歪み」に馴れるために「阿美寮」に入った。

直子やクミコが抱えていた「違和感」とは、「自我」ではないだろうか。それらは「心の闇」の部分、つまり「井戸」の中に沈められている。

次章で、これらの考えがどこからきているのか、考察する。

第三章 容認しがたい「自我」と「共生」

村上春樹の最新長編小説『騎士団長殺し』(新潮社、二〇一七・

二)《注8》では、上田秋成『春雨物語』の一篇「二世の縁」《注9》について、詳細に記されている。

って進んで死んだ。しかし私はまだ次の世界には入っていない。
つまり私は移行する魂だ。移行する魂にかたちというものはな
い。私はただこうして仮のかたちをとっているだけだ。」(傍線
引用者)

「この僕らの住んでいる世界には、いつもとなり合わせに別の
世界がある。君はある程度までそこに足を踏み入れることができ
る。そこから無事に戻ってくることもできる。注意さえすれば
ね。でもある地点をこえてしまうと、そこから二度と出てこれな
くなる。帰り道がわからなくなってしまう。迷宮だ。迷宮とい
うのはそもそもどこから発想されたものか知っているかい？」

(中略)

「迷宮という概念を最初につくりだしたのは、今わかってるか
ぎりでは、古代メソポタミアの人々だ。彼らは動物の腸を―ある
いはおそらく時には人間の腸を―引きずりだして、そのかたち
で運命を占った。そしてその複雑なかたちを賞賛した。だから迷
宮のかたちの基本は腸なんだ。つまり迷宮というものの原理は
君自身の内側にある。そしてそれは君の外側にある迷宮性と呼
応している」

「メタファー」と僕は言う。

「そうだ。相互メタファー。君の外にあるのは、君の内にあるも
のの投影であり、君の内にあるものは、君の外にあるものの投影
だ。だからしばしば君は、君の外にある迷宮に足を踏み入れるこ
とによって、君自身の内にセットされた迷宮に足を踏み入れる
ことになる。それは多くの場合とても危険なことだ」

「森に入ってしまったヘンゼルとグレーテルみたいに」

「そう。ヘンゼルとグレーテルみたいに。森は畏^{わな}をしかけてい
る。君がどれだけ用心して工夫しても、目ざとい鳥たちがやって
きて目じるしのパンくずを食べてしまう」(傍線引用者)

森はときには頭上から、ときには足もとから僕を脅そうとす
る。首筋に冷たい息を吐きかける。千の目の針となって肌を刺
す。様々なやりかたで、僕を異物としてはじきだそうとする。で
も僕はそんな脅しをだんだんうまくやりすごせるようになる。

ここにある森は結局のところ、僕自身の一部なんじゃないか―
僕はあるときからそういう見かたをするようになる。僕は自分
自身の内側を旅しているのだ。血液が血管をたどって旅するの
と同じように。僕がこうして目には見えているのは僕自身の内側で
あり、威嚇のように見えるのは、僕の心の中にある恐怖のこだま

いる。僕らが自我や意識と名づけているものは、冰山と同じように、その大部分を闇の領域に沈めている。そのような乖離が、

ある場合には僕らの中に深い矛盾と混乱を生み出すことになる」
(傍線引用者)

昔は、「現実世界」と「心の闇」の境界線はなく、ひとつに混じり合っていた。しかし、今ではそのごく自然な心の状態を、闇の領域に沈めてしまった。そのため、「心の闇」の部分に隠されている「自我」が、ときどき無自覚に顔を出し、混乱を生み出している。

「心の闇」の部分とは、「井戸」であるのではないかと考える。『ねじまき鳥クロニクル』や『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』でも、「井戸」などの暗闇の中で「無」と一体化し、「肉体」と「魂」を分離させていた。

では、その「井戸」の先に何があるのか考察したい。

『ねじまき鳥クロニクル』では、「僕」が「夢」の中で壁抜けをし、「井戸」の底に行く構造になっている。

夜明け前に井戸の底で夢を見た。でもそれは夢ではなかつ

た。たまたま夢というかたちを取っている何かだった。

部屋の暗闇の中に廊下の光がさつと差し込むのと同様に、僕らは壁の中に滑り込んだ。(中略)僕は壁を通り抜けているんだ。僕はどこかからどこかに移るために、壁を通り抜けている。でも壁を通り抜けている僕には、壁を通り抜けることがものすごく自然な行為に思えた。

(中略)そして僕は壁を抜けた。目を開けたとき、僕は壁のこちら側にいた―深い井戸の底に。(傍線引用者)

「僕」は、「井戸」の底で「夢」というかたちをとって、壁の「こちら側」に移動した。「こちら側」とは何を示しているのか、『海辺のカフカ』での一場面をみってみる。

「なあ、君はリンポというものを知っているかい？リンポというのは、生と死の世界のあいだに横たわる中間地点だ。うすぼんやりとしたもの淋しいところだ。それがつまり、私が今いるところだ。今のところはこの森だ。私は死んだ。私は私の意志によ

ました。その言葉はご存じですか？よく日本の昔話に出てきますが、魂が肉体を一時的に離れて、千里の道のりを越えてどこか遠くに行き、そこで大事な用事をすませて、それからまた元の肉体に戻ってくるというやつです。『源氏物語』にも「生き霊」りょう

がよく出てきますが、それに近いのかもしれませんが。死んだ人の魂が肉体を出るというだけではなく、生きている人にも――思いさえ強ければということですが――それと同じことができるのです。あるいは日本には魂についてのそういう考え方が、古代から土着的に自然なものとして根付いていたのかもしれませんがね。

(傍線引用者)

「しかしこの話のもっとも興味深い点は、六条御息所は自分が生き霊になっていることにまったく気がついていないということにある。悪夢に苛まれて目を覚ますと、長い黒髪に覚えのない護摩ごまの匂しいが染みついていて、彼女はわけがわからず混乱する。それは葵上のための祈禱に使われている護摩の匂いだった。彼女は自分でも知らないあいだに、空間を超えて、深層意識のトンネルをくぐって、葵上の寝所に通っていたんだ。これ

は『源氏物語』の中ではもっとも不気味でスリリングな場面のひとつだ。六条御息所はのちに自分が知らぬうちになした所業を知り、自らの深い業ごうを恐れ、髪を切り出家した。

怪奇なる世界というのは、つまりは我々自身の心の闇のことだ。19世紀にフロイトやユングが出てきて、僕らの深層意識に分析の光をあてる以前には、そのふたつの闇の相関性は人々にとっていちいち考えるまでもない自明の事実であり、メタファ―ですらなかった。いや、もっとさかのぼれば、それは相関性ですらなかった。エジソンが電灯を発明するまでは、世界の大部分は文字通り深い漆黒の闇に包まれていた。そしてその外なる物理的な闇と、内なる魂の闇は境界線なくひとつに混じり合い、まさに直結していたんだ――こんな具合に」

大島さんは両方の手のひらをびたりとひとつにあわせる。

「紫式部の生きていた時代にあつては、生き霊というのは怪奇現象であると同時に、すぐそこにあるごく自然な心の状態だった。そのふたつの種類の闇をべつべつに分けて考えることは、当時の人々にはたぶん不可能だっただろうね。しかし僕らの今いる世界ではそうではなくなりました。外の世界の闇はすっかり消えてしまったけれど、心の闇はほとんどそのまま残って

の「ハードボイルド・ワンダーランド」と、主人公の意識の核の世界
「世界の終り」の二つの世界が存在する。

「私」が「やみくろ」という敵の巣の中心を通って、脱出を図って
いる時に起こったことを、このように記している。

進むにつれて、私の体が私に属していないという意識はますます強まっていった。たぶんそれは自分の体を見ることができないせいだろうと私は思った。手のひらを目の前まで持ってきたとしても、それが見えないのだ。

自分の体を見ることができないというのは何かしら奇妙なものだった。ずっとそういう状態にあると、そのうち体というものがひとつの仮説にすぎないのではないかという気になってくるのだ。(中略)魂が肉体から分離したものでないとしたら、いたい魂にどんな存在理由があるというのだ？(傍線引用者)

歩きつづけているうちに、自分が目を開けているのか閉じているのかがだんだん不確かになってきた。目を開けているときの暗闇と目を閉じたときの暗闇が、まったく同じなのだ。私はためしに目を開けたり閉じたりしながら歩いてみたが、最後にはどちらがどちらなのか、正確に判断することができなくなっ

しまった。人間のあるひとつの行為と、それとは逆の立場にある行為とのあいだには、本来ある種の有効的な差異が存在するのであり、その差異がなくなってしまうえば、その行為 A と行為 B を隔てる壁も自動的に消滅してしまうのだ。(傍線引用者)

暗闇の中にいることで、「私」は「かりそめの肉体」であるのではないかと感じるようになっていく。「魂」は「肉体」と分離できるからこそ存在価値があるとしている。

また、暗闇の中では、逆の立場にあるものごととの差異がなくなり、それらを隔てる壁が自動的に消滅している。

『ねじまき鳥クロニクル』でも再度出てきた「肉体」と「魂」を分離させることは何を意味しているのか、考察する。

『海辺のカフカ』(新潮社、二〇〇二・九)《注7》では、「乖離」についてこのように説明している。

妙な表現かもしれませんが、入れ物としての肉体だけがとりあえずそこに残されて、留守を預かり、様々な生体レベルを少しずつ下げて、生存に最低限必要な機能を維持し、そのあいだ本人はどこかべつのところに出かけて、何かべつのことをしているみたいに見えました。(《幽体離脱》という言葉が私の頭に浮かび

ために用意された、ただのかりそめの殻かに過ぎないのではない
か、と僕はふと思った。(傍線引用者)

ここでも、「意識」と「肉体」がうまく結びついておらず、その原因は「井戸」だということがわかる。「肉体」は「意識」を収めるためのかりそめの殻でしかないと思っている。「かりそめの肉体」という表現は、第一章でも触れたように、クミコの「違和感」を発見したときにも使われている。

そして、「井戸」で暗黒の中にのみ込まれた「僕」は、「無」と一体化し、「意識」は「肉体」を抜け出していく。

僕はその完璧かんぺきな暗黒の底にしゃがみこんでいた。目にするこ

とができるのは無だけだった。僕はその無の一部になっていた。

(中略)

そしてまた少しずつ、僕の意識はその肉体を抜け出していった。(傍線引用者)

「意識」が「肉体」から離れた「僕」は、自分を「空き家」と重ねる。

僕は自分をもっと空き家という存在にびったりと重ね合わせようとした。僕は自分が柱であり壁であり天井であり床であり屋根であり窓でありドアであり石であると思う。そうした方が理にかなっているように思えたからだ。目を閉じ、僕という肉体を汚れたテニスシューズを履き、奇妙なゴーグルをつけ、不器用に勃起した肉体を離れる。肉体を離れるのはそれほど難しいことではない。そうすることによって僕はずっと楽になり、居心地の悪さを捨てることができる。僕は雑草のはえた庭であり、飛ぶことのできない鳥の石像であり、水の涸かわれた井戸だった。(傍線引用者)

「かりそめの肉体」から離れた「僕」は、「井戸」と一体化する。そうすることが、自分にとっては楽で、居心地の悪さがなくなる。他の作品にも着目してみる。

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(新潮社、一九八五・六)《注6》では、主人公(「私」)が生活している現実世界

に捕まり、殺される代わりに閉じ込められた「井戸」。もうひとつは、「僕」の家の、入口が完全に塞がれ行き止まりになっている路地の奥にある、空き家の庭にある「井戸」だ。

まず、間宮中尉がノモンハンの「井戸」の中で感じたことをみてみる。

暗闇の中で自分の体の状態を調べるというのはなかなか難しいものです。私には自分の体を見ることもできません。それがどんな風になっているかを目で確かめることもできません。自分の感じる感覚だけで、その状態を見極めなくてはならないのです。ところが深い暗闇の中になると、自分の今感じている感覚が本当に正しい感覚なのかどうか、それがよくわからなくなってくるのです。何かしら自分が誤魔化され、欺あざむかれていているような気さえするのです。それはとても奇妙な感じですよ。

(中略)それから私は体を地面の上に起こそうとしました。しかし私は自分の体を起こすことができませんでした。私の体はすべての感覚をなくしてしまったように感じられました。意識はちゃんとあります。しかしその意識と肉体がうまく結

びついていないのです。(傍線引用者)

「井戸」のような暗闇の中になると、自分の感じている感覚が本当に正しい感覚なのかどうかが変わらなくなる。自分が誤魔化され、欺かれていたのではないかと思ひ、奇妙に感じる。また、「意識」と「肉体」がうまく結びついていないことがわかる。

また、空き家の「井戸」の中で、「僕」はこのように感じている。

そこにあるはずの自分の体を自分の目で見ることはできないというのには不思議なものだった。暗闇の中でただじっとしていると、自分がそこに存在しているという事実がだんだんうまく呑み込めなくなってくるのだ。(中略)

でもいくら努力しても、僕の肉体は、水の流れにさらわれていく砂のように、少しずつその密度と重さをなくしていった。まるで僕の中で無言の熾しれつ烈な綱引きのようなことが行われていて、僕の意識が少しずつ僕の肉体を自分の領域に引きずり込みつつあるようだった。この暗闇が本来のバランスを大きく乱しているのだ。肉体などというものは結局のところ、意識を中に収める

直子はポケットから左手を出して僕の手を握った。「でも大丈夫よ、あなたは。あなたは何も心配することはないの。あなたは闇夜に盲滅法にこのへんを歩きまわったって絶対に井戸には落ちないの。そしてこうしてあなたにくっついてる限り、私も井戸には落ちないの」

「絶対に？」

「絶対に」

「どうしてそんなことがわかるの？」

「私にはわかるのよ。ただわかるの」直子は僕の手をしっかりと握ったままそう言った。そしてしばらく黙って歩きつづけた。

「その手のことって私にはすごくよくわかるの。理屈とかそんなのじゃなくて、ただ感じるのね。たとえば今こうしてあなたにしっかりとくっついてるとね、私ちつとも怖くないの。どんな悪いものも暗いものも私を誘おうとはしないのよ」

「じゃあ話は簡単だ。ずっとこうしてりゃいいんじゃないか」と

僕は言った。

「それ—本気で言ってるの？」

「もちろん本当だよ」

(中略)

「あなたがそう言ってくれて私とても嬉しいの。本当よ」と彼女

は哀しそうに微笑しながら言った。「でもそれはできないのよ」

「どうして？」

「それはいけないことだからよ。それはひどいことだからよ。それは—」と言いかけて直子はふと口をつぐみ、そのまま歩きつづけた。(中略)

「それは—正しくないことだからよ、あなたにとっても私にとっても」とずいぶんあとで彼女はそうつづけた。(傍線引用者)

「井戸」は見当もつかないくらいおそろしく深く、「世の中のあらゆる種類の暗黒を煮つめたような」濃密な暗黒がたまっている。そして、その「井戸」が何処にあるのかは誰にもわからず、ときどき人が落ちて死ぬ。その死に方とはひどいもので、声を限りに叫んでも誰も誰にも聞こえず、誰かがみつめてくれる見込みもない。そこで一人ぼっちでじわじわと死んでいく。ただ、その「井戸」に落ちずにいることは、誰にとっても正しいことではない。

見当もつかないくらいおそろしく深く、何処にあるのかは誰にもわからないが、そこに落ちずにいることが正しくない「井戸」とは何であるのか、考察したい。

『ねじまき鳥クロニクル』では、ふたつの「井戸」が出てくる。ひとつは、「僕」の知り合いの間宮中尉が、戦場「ノモンハン」で敵兵

多くの事物と同じように。でも直子がその井戸の話をしてくれたあとでは、僕はその井戸の姿なしには草原の風景を思いだすことができなくなってしまった。実際に目にしたわけではない井戸の姿が、僕の頭の中では分離することできない一部として風景の中しつかりと焼きつけられているのだ。(中略)僕に唯一わかるのはそれがとにかくおそろしく深いということだけだ。見当もつかないくらい深いのだ。そしてその穴の中には暗黒が一世の中のあらゆる種類の暗黒を煮つめたような濃密な暗黒が一つまっている。

「それは本当に——本当に深いよ」と直子は丁寧に言葉を選びながら言った。彼女はときどきそんな話し方をした。正確な言葉を探し求めながらもゆっくりと話すのだ。

「本当に深い。でもそれが何処にあるのかは誰にもわからないの。このへんの何処かにあることは確かなんだけど」

(中略)

「でもそれじゃ危くってしようがないだろう」と僕は言った。

「どこかに深い井戸がある、でもそれが何処にあるかは誰も知らないなんてね。落っこっちゃったらどうしようもないじゃないか」

「どうしようもないでしょうね。ひゅうううう、ポン、それでお

しまいだもの」

「そういうのは実際には起こらないの?」

「ときどき起こるの。二年か三年に一度くらいかな。人が急にいなくなっちゃって、どれだけ探してもみつからないの。そうするとこのへんの人は言うの、あれは野井戸に落っこちたんだって」

「あまり良い死に方じゃなさそうだね」と僕は言った。

「ひどい死に方よ」(中略)「そのまま首の骨でも折ってあっさり死んじゃえばいいけれど、何かの加減で足をくじくくらいですんじやったらどうしようもないわね。声を限りに叫んでみても誰にも聞こえないし、誰かがみつ付けてくれる見込みもないし、まわりにはムカデやらクモやらがうようよいるし、そこで死んでいった人たちの白骨があたり一面にちらばっているし、暗くてじめじめしてて。そして上の方には光の円がまるで冬の月みたいに小さく小さく浮かんでいるの。そんなところで一人ぼっちでじわじわと死んでいくの」

「考えただけで身の毛がよだつな」と僕は言った。「誰かが見つけて困いを作るべきだよ」

「でも誰にもその井戸を見つけることはできないの。だからちやんとした道を離れちゃ駄目よ」

「離れないよ」

何かの拍子にクミコがふと沈黙の中に沈んでしまうことがあった。とくに理由もなく（少なくとも僕には何かそうなるような理由は思いあたらなかった）、会話の途中で急にぱったりと黙り込んでしまうのだ。まるで道を歩いていてすとんと落とし穴にはまりこんでしまうみたいに。沈黙そのものはそれほど長く続かなかつたが、そのあとしばらく彼女は「心ここにあらず」という風になった。そしてある程度の時間が経過するまではもとに戻らなかった。（傍線引用者）

「僕」はクミコの中に、自分の入ることのできない「クミコだけの領域」が存在していると感じている。また、クミコはまるですとんと「落とし穴」にはまりこんでしまうみたいに、沈黙の中に沈んでしまうことがあった。そして、「心ここにあらず」といった状態になり、ある程度の時間が経過するまでもとに戻らなかった。

でも僕はクミコとの関係を急いで深めようとは思わなかった。彼女にはどこことなく、何かについて迷っているような様子が見受けられたからだ。具体的に何がどうというわけでもないのだが、クミコの言葉や動作に、その迷いのようなものがふと

顔をのぞかせることがあった。僕が何かを質問すると、彼女の返事が一呼吸遅れることがあった。そこにわずかな間が空く。その一瞬の間の空き方の中に、僕はいつも何かの「影」のようなものを感じないわけにはいかなかった。（傍線引用者）

直子の「もう一人の自分」やクミコの「影」など、二人が抱えている「違和感」とは一体何を指しているのか、明らかにしたい。

第二章 無の領域「井戸」

第一章でも触れたように、『ねじまき鳥クロニクル』では、すとんと「落とし穴」にはまりこんだという表現がある。

『ノルウェイの森』の冒頭部分をみてみる。

彼女はそのとき何の話をしていたんだっけ？

そうだ、彼女は僕に野井戸の話をしていたのだ。そんな井戸が本当に存在したのかどうか、僕にはわからない。あるいはそれは彼女の中にしか存在しないイメージなり記号であったのかも知れない―あの暗い日々には彼女がその頭の中で紡ぎだした他の数

どこかに、何かちよつとしたものが潜んでいるような気がする
ことがあるの。ちよつと空き巣が家の中に入ってきて、そのま
ま押入れに隠れているみたいだね。そしてそれがときどき外に
出てきて、私自身のいろんな順序やら論理やらを乱すの。磁気
が機械を狂わせるように」(傍線引用者)

クミコも直子と同じく、自分の中のどこかに、「何かちよつとし
たもの」が潜んでいるような気がしている。そしてそれが自分を乱
し狂わせ、何が本当で何が本当ではないのか、わからなくなる。
クミコと肉体としてまじわったときにも、「僕」は「乖離」の感
覚があり、戸惑いを感じていた。また、「奇妙に覚めたもの」を発
見した。

最初にクミコの中に入ったとき、それに似た奇妙な戸惑いを
感じたことを覚えている。クミコは最初のおそらく苦
痛しか感じなかったはずだ。彼女は痛がったし、ずっと体をこ
わばらせていた。でも僕がその戸惑いのようなものを感じた理
由はそれだけではなかった。そこには何か、奇妙に覚めたもの
があった。うまく表現できないのだけれど、そこには一種の

乖離トクの感覚があった。自分が抱いているこの体は、さつきまで
隣に並んで親しく話していた女の体とはべつものなんじやな
いか、自分の気づかないうちにどこかでべつの誰かの肉体と入
れ代わってしまったんじゃないかという不思議な思いに僕は捉
われた。(中略)でもそれと同時にその背中は僕からものすべ
く離れた場所にあるみたいに思えた。クミコはこうして僕に抱
かれながら、ずっと離れた場所で、何かべつのことを考えてい
るみたいだった。そして今僕が抱いているのは、一時的にここ
にあるかりその肉体であるようにさえ思えた。(傍線引用
者)

「僕」は他にもクミコの「違和感」についてこのように記してい
る。

結婚したあと、僕らは幸福に暮していたし、問題というよう
なものは何もなかった。でもそれにもかかわらず、クミコの中
に僕の入ることができない彼女だけの領域が存在していること
を、僕はときおり感じないわけにはいかなかった。たとえばそ
れまですつと普通に、あるいは熱心に会話をしていたのに、

いる問題のあるひとつの部分にすぎないわけですが、それでも彼の言わんとすることは私にもなんとなくわかります。私たちはたしかに自分の歪みにうまく順応しきれないでいるのかもしれません。だからその歪みがひきおこす現実的な痛みや苦しみをうまく自分の中に位置づけることができなくて、そしてそういうものから遠ざかるためにここに入っているわけです。ここに

いる限り私たちは他人を苦しめなくてすむし、他人から苦しめられなくてすみます。何故なら私たちはみんな自分たちが『歪んでいる』ことを知っているからです。そこが外部世界とはまったく違っているところです。外の世界では多くの人は自分の歪みを意識せずに暮しています。でも私たちのこの小さな世界では歪みこそが前提条件なのです。私たちはインディアンが頭にその部族をあらわす羽根をつけるように、歪みを身につけています。そして傷つけあうことのないようにそっと暮しているのです。(傍線引用者)

「歪み」を認識していることが「外の世界」とはまったく違う「阿美寮」で暮らす人々の前提条件だとしている。しかし、「阿美寮」に入っている人々は、「歪み」を認識してはいるものの、受け入れることができていない。「歪み」を矯正するのではなく、「歪

み」に馴れるために「阿美寮」に入る必要があるとしている。

村上春樹は、こうした「違和感」が自分の中で把握できず、戸惑っている人物を、他の作品の中にも登場させている。

第二節 『ねじまき鳥クロニクル』クミコ

村上春樹の作品『ねじまき鳥クロニクル』(新潮社、一九九四・四、一九九五・八)《注5》では、主人公(「僕」)の妻クミコが、直子と共通した悩みを抱えている。

「でもね、正直に言うと、私にはときどきいろんなことがわからなくなってくるのよ。何が本当で、何が本当じゃないのか。何が実際に起こったことで、何が実際に起こったことじゃないのか。……ときどきね」

「それで今がそのときどきなの？」

「まあね……。あなたにはそういうことってない？」

(中略)

「なんと言えはいいのかしら、私が現実だと思っていることと、本当の現実とのあいだに、少しズレがあるのね。私の中の

ることができないのだ。だからこそ言葉が出てこないのだ。

(傍線引用者)

これらから、直子が阿美寮に入ることになった原因は、「何か」が自分の中で把握できないことであると考えられる。

また、「僕」は直子の二十歳の誕生日の出来事を、阿美寮を訪問したときにこう振り返っている。

その夜、泣きつづける直子の服をゆっくりとやさしく脱がせていったとき、僕は彼女の体がどことなく不完全であるような印象を持ったものだった。(中略)僕は直子を抱きながら、彼女に向ってこう説明したかった。僕は今君と性交している。僕は君の中に入っている。でもこれは本当に何でもないことなんだ。どちらでもいいことなんだ。だってこれは体のまじわりにすぎないんだ。我々はお互いの不完全な体を触れあわせることでしか語ることでできないことを語りあっているだけなんだ。こうすることで僕らはそれぞれの不完全さを分かちあっているんだよ、と。しかしもちろんそんなことを口に出してうまく説明できるわけではない。僕は黙ってしっかりと直子の体を抱きしめているだけだった。彼女の体を抱いていると、僕はその中に

何かしらうまく馴染めないで残っているような異物のごつごつした感触を感じる事ができた。(傍線引用者)

「僕」は、直子と肉体としてまじわることで、直子の中に潜んでいる「不完全さ」「何かしらうまく馴染めないで残っているような異物のごつごつした感触」を感じていた。そして、体のまじわりを「不完全さ」を分かちあうための手段にすぎないと考えている。直子も自身のことを、阿美寮に入ってから「僕」に宛てた手紙の中で、このように綴っている。

ある日私の担当医にそのことを言うと、君の感じていることにはある意味では正しいのだと言われました。彼は私たちがここにいるのはその歪みを矯正するためではなく、その歪みに馴れるためなのだといいます。私たちの問題点のひとつはその歪みを認めて受け入れることができないというところにあるのだ、と。人間一人ひとりが歩き方にくせがあるように、感じ方や考え方や物の見方にもくせはあるし、それはなおそうと思っても急になおるものではないし、無理になおそうとすると他のところがおかしくなってしまうことになるんだそうです。もちろんこれはすごく単純化した説明だし、そういうのは私たちの抱えて

ここから、直子の行動と意識が上手く噛み合っていないことがわかる。

そして別れ際に、直子は「僕」にこのように伝えた。

「ねえ、もしよかったらーもしあなたにとって迷惑じゃなかったらということなんだけどー私たちまた会えるかしら？もちろんこんなこと言える筋合じゃないことはよくわかっているんだけど」

「筋合？」と僕はびっくりして言った。「筋合じゃないってどういうこと？」

(中略)

「うまく説明できないのよ」と直子は弁解するように言った。

(中略)「筋合、なんて言うつもりはなかったの。もっと違った

風に言うつもりだったの」

(中略)

「うまくしゃべることができないの」と直子は言った。「このところずっとそういうのがつづいてるのよ。何か言おうとしても、いつも見当ちがいな言葉しか浮かんでこないの。見当ちが良かったり、あるいは全く逆だったりね。それでそれを訂正

しようとする、もっと余計に混乱して見当ちがいになっちゃうし、そうすると最初に自分が何を言おうとしていたのかわからなくなっちゃうの。まるで自分の体がふたつに分かれていてね、追いかけてくをしてみたいなそんな感じなの。まん中にすごく太い柱が建っていてね、そのまわりをぐるぐるとまわりながら追いかけてくしているのよ。ちゃんとした言葉っていうのはいつももう一人の私が抱えていて、こっちは絶対にそれに追いつけないの」(傍線引用者)

直子は、自分の身体がふたつにわかれて、「もう一人の自分」が存在しているような感覚があると表現している。ちゃんとした言葉は「もう一人の自分」が抱えていて、「こっちの私」は絶対に「もう一人の自分」に追いつけないとしている。そして「こっちの私」は見当ちがいな言葉しか浮かんでこなくて、結局何を言おうとしていたのかわからなくなる。

そんな直子の様子をみて、「僕」はこう思う。

たぶん彼女は僕に何かを伝えたがっているのだらうと僕は考
えるようになった。でも直子はそれをうまく言葉にすることが
できないのだ、と。いや、言葉にする以前に自分の中で把握す

く、なかなか解き明かすことができない。そういった不可解な謎に、人々は魅了されるのではないか。

本論文では、『ノルウェイの森』を中心に、いくつかの作品を取り上げていく。そして、人々がどこに共感したのか、また、村上春樹が作品にちりばめている、読者に伝えたい主題について解き明かしていきたい。そして、村上春樹の思想に影響を与えた人物について考察したい。

第一章 見定められない「違和感」

第一節 『ノルウェイの森』直子

『ノルウェイの森』は、三十七歳になった主人公のワタナベ（「僕」）が、飛行機の中でビートルズの「ノルウェイの森」を聴き、今は亡き直子との京都の草原での出来事を思い出すシーンから始まる。直子は、「僕」の高校時代の唯一の友達であったキズキの幼馴染みであり、恋人であった。キズキは十七歳という若さで自ら命を絶つ。キズキの死から一年後、「僕」と直子は東京で再会する。そして、直子は二十歳の誕生日以降、京都の「阿美寮」で療養

生活を送ることになる。

まず、直子が阿美寮に入ることになった経緯について考察してみる。

キズキの死から一年後、大学生になった「僕」と直子が東京で再会する場面での会話をみてみる。

駅の外に出ると、彼女はどこに行くとも言わずにさっさと歩きはじめた。（中略）時々直子はうしろを振り向いて僕に話しかけた。うまく答えられることもあれば、どう答えればいいのか見当もつかないようなこともあった。何を言っているのか聞きとれないということもあった。しかし、僕に聞こえても聞かなくてもそんなことは彼女にはどちらでもいいみたいだった。（中略）

「ここはどこ？」と直子がふと気づいたように訊ねた。

「駒込」と僕は言った。「知らなかったの？我々はぐるっと回ったんだよ」

「どうしてこんなところに来たの？」

「君が来たんだよ。僕はあとをついてきただけ」

村上春樹作品における「自我」と「共生」——『ノルウェイの森』を中心に——

泉 綾乃

はじめに

『ノルウェイの森』（講談社、一九八七・九）《注1》は、村上春樹の長編小説である。村上春樹は一九四九年、京都市伏見区で生まれた。父、村上千秋は京都市左京区栗田口にある「安養寺」という浄土宗のお寺の次男であり、仏教の学習を専門とする学校に通っていた。村上春樹は父について、このように述べている。《注2》

もうひとつ父に関してよく覚えていること（ちなみに村上

千秋^{ちあき}というのが父の名前だ）。

それは毎朝、朝食をとる前に、彼が仏壇に向かって長い時間、目を閉じて熱心にお経を唱えていたことだ。いや、仏壇と違うのではない。菩薩を収めたガラスの小さなケースだった。

（中略）

しかしいざれにせよ、それは父親にとって一日の始まりを意味する大事な習慣になっていた。僕の知る限り一日たりともその「おつとめ」（と父は呼んでいた）を怠^{おこた}らなかったし、誰にもその日々の行いを妨げることはできなかった。そして父の背中には、簡単には声をかけがたいような厳しい雰囲気があった。そこには「日々の習慣」というような簡単な言葉では片付けられない、普通ではない——僕には思えた——強い集中があった。

結婚後は、阪神間にある甲陽学院という中高一貫私立校で、国語の教師をしていた。村上千秋は文学を愛好し、よく本を読む人だった。そのため、家の中にはいつも本が溢れていた。その影響もあり、村上春樹は自身が熱心な読書家になったと振り返っている。

《注3》

発売からわずか一年で四百万部を売り上げ《注4》、大ヒット作品となった『ノルウェイの森』だが、なぜそんなに売れたのか。私は「共感」出来る部分があるからではないかと考える。村上春樹はヒット作品を数多く出版しているが、それぞれの作品にちりばめられている主題があるように感じる。しかし、その主題については謎が多

立命館京都学 優秀卒業論文集 2020

2021年7月1日 発行

編集・発行

立命館大学 文学部 人文学科 地域研究学域 京都学専攻
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

印刷

中西印刷株式会社
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入